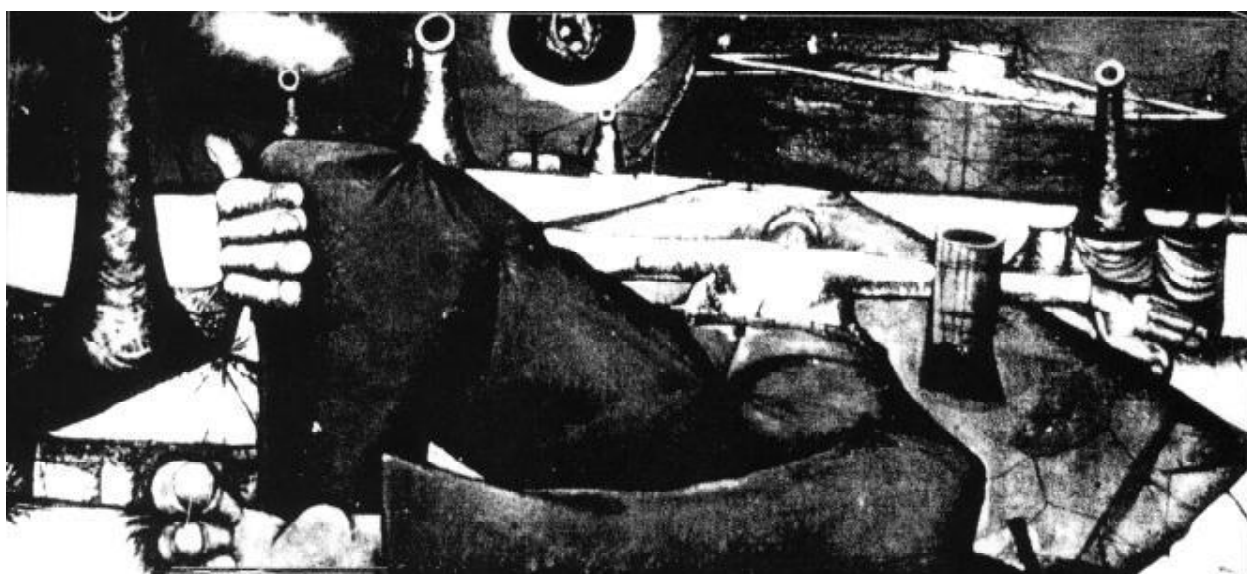

「拒否」の〈前〉線情報 No.2



(尾藤 豊作品集「失われた土地」から)

FOCUS 「拒否」の動線を見さだめ、「拒否」の地平をさぐる
.....2

IN/OUT 仲里功:「沖縄トワイライト」- 重層する〈否〉の力動
.....83

「拒否」の〈前〉線情報

再訪「大飯原発再稼働阻止闘争」87

遠方からの風信

「遠方からの風信 (No.1所収)」をめぐって」 ...128

「すべてが可能だった」- カイロからの手紙 ...145

オマー・ロベルト・ハミルトン(駒井英吾 訳)

生・労働・運動ネット富山

“The crying swallow flies at dawn.
The sun’s radiance is also very sad.
Even the sound of the wind...
Pierces a stony heart.
Ideal for a burning cheek,
There’s a frozen asphalt bed.
I don’t need a silver needle
To mend a shredded flag.
I will file my nails in the dark.
This is our battle ground.
A silent battle front.
A crying swallow flies at dawn.
In the streets at daybreak,
Leaves flutter in the wind.
I throw a tiny flame
Towards burning crimson blood
In any barren field.
Burn the dawn
Burn the street dawn!
This is a fire.
Oh fire, this is...
Our battle ground.
This is a fire,
Oh fire, this is...
Our silent battle front. ”

From “*Ecstasy of the Angles*”
(directed by Koji Wakamatsu)

目次

FOCUS	「拒否」の動線を見さだめ、「拒否」の地平をさぐる ……………2
--------------	--

はじめに ……………2

I-a 3・11/3・12以後の反原発運動 ……3

I-b 沖縄における「拒否」の累積 ……29

II 「拒否」のメタ論理を考える ……57

IN/OUT	仲里功：「沖縄トワイライト」——重層する〈否〉の力動 ……………83
---------------	---

「拒否」の〈前〉線情報

	再訪「大飯原発再稼働阻止闘争」 ……………87
--	--------------------------------

はじめに ……………87

大飯原発再稼働阻止闘争の動線 ……………92

おわりに ……………126

遠方からの風信

「遠方からの風信 (No.1所収)」をめぐって ……128

「すべてが可能だった」オマー・ロベルト・ハミルトン
(駒井英吾訳) ……………145

FOCUS

「3・11／12」から2年半。この列島で展開されている多なる「拒否」の〈前〉線のありかをみさだめ、それらが拓く地平をさぐり、そこに「日本の『構成』的解体」のベクトルを描こうとする試み

「拒否」の動線をみさだめ、 「拒否」の地平をさぐる

はじめに

この列島上での「『拒否』の〈前〉線」のありかを探りながら、それが拓く地平に日本の「構成的」解体へのベクトルを描き出すことに向けて、戦後日本国家の構成原理の原型／変容／現在を改めて捉えなおすこと。そのことをテーマとして、私・たちは、今年4月21日の「オープニング」を皮切りに、「アンラーニングプロジェクト・2013 『拒否』が拓く地平——日本の『構成』的解体の方へ」をスタートさせています。

福島原発事故後、これまでにない大きな高揚の中で各地で反原発運動が展開されてきていますが、「アンラーニング・2013」の第2回（5月26日）では、「『拒否』の〈前〉線をさぐる・1——反・脱原発運動の展開の中から」と題して、「3・11／12」以降の様々な反原発運動の潮流の中の「拒否」の「〈前〉線」のありかを探りました。

現在、沖縄での動きは、日本国家からの「離脱」までも視野に含めた「自己決定権の樹立」という段階に入ろうとしているという意味で、すでに「前線」の形成がなされつつあるように思います。第3回（6月30日）の「『拒否』の〈前〉線をさぐる・2——沖縄の闘いを通じて」では、現在の沖縄での「非暴力直接行動」の闘いを、戦後の沖縄での民衆闘争の軌跡と重ね合わせると共に、カリブ海地域での米軍基地反対闘争といった世界各地の運動との「同時代性」や「共時性」という視点で捉え直しました。

第4回（7月28日）の「『拒否』の地平をみきわめる試み——『拒否』のメタ論理を考える」では、この列島上での様々な社会運動の中でこの日本国家・社会のあり方に対する「拒否」を突きつけようとする「動線」の蓄積が「〈前〉線」へと転成し、更にそれが「前線」へと至る筋道がどのようにありうるかを描き出すことを試みました。

今回の「『拒否』の〈前〉線情報」では、「アンラーニング・2013」の第2回、第3回、第4回での論議を収録しました。

なお、現在、私たちの前に大きく立ちふさがる安倍政権やそれが体現するものに対して、どこで本当に切り結ぶことができるかが私たちに切実に問われているように思います。

「アンラーニング・2013」の第6回(10月27日)では、独自の「戦後日本国家」論に基づく鋭い安倍政権批判を提起している武藤一羊さんを迎えて、「安倍政権による戦後日本国家レジームの解体と私たちの側からの『対抗線』」と題して話してもらう予定です。

その中で安倍政権に対して私たちの側から「拒否」を突きつけるための「対抗線」や「陣型」をいかに生み出すかということ、主な論議の軸の一つにしていきたいと思いますが、そこでの論議については、次号の『『拒否』の〈前〉線情報』に収録する予定です。

I - a 3・11/3・12以後の反原発運動 ——私の歩みにそって——

アンラーニングプロジェクト・2013 第2回(2013.5.26)

1. 反・脱原発運動の展開の中から『『拒否』の〈前〉線』を さぐる——当日の提起・報告から

私の「3・11/12」以降の「歩み」をたどり直す

「反原発市民の会・富山」の藤岡です。福島原発事故以降、反原発デモや反原発集会に数万人もの人々が参加するというかつてない状況が生み出されています。また、昨年夏、非暴力・直接行動で原発ゲート前を封鎖・占拠した「大飯原発再稼働阻止闘争」以降、その闘いが残したものを他の原発現地での反原発運動でもしっかりと受け継ぎ、原発の再稼働阻止に向けた「陣型」を生み出そうとする動きが登場してきています。そうした全国各地の反原発デモや集会に、私は富山から出かけて行くことで、いろんな運動のあり方にふれることができたのですが、そのことの意味を一度、きちんと整理して捉えなおしてみたいと思ってきました。

そのような意味で、今日こうしてお話する場をもったことは、福島原発事故以降の私の体験を通じてつかんだことを私自身が振り返る貴重な機会のように感じています。この間、原発事故の出来(しゅったい)以降の2年数ヶ月間という時間は何だったのかを問い直すような動きが少しずつ出てきています。今日は、私が全国各地での反原発運動に触れながら感じてきたことを一つの手がかりにして、この場に参加している皆さんと共にそのことを考えあいたいと思います。

原発事故が出来した日付を表す「3・11」という言い方と併せて、2011年3月12日に

原発が爆発して多くの人々が放射能汚染地帯からの避難を始めたという意味で「3・12」という言い方をすることがあります。今日は、私の「歩み」をめぐる報告と併せて、「3・11/12」以後の運動も含めて、この2年数ヶ月間の反原発運動の潮流がどのようにあるのかを、大きく横断的に捉え直すことをしていきたいと思います。

2011年

福島原発事故が起きてからまだ間もない2011年4月10日、富山市の中心部の街頭で「原発いらないデモ」を行いました。その時には富山のデモとしては久しぶりに100人近い参加者がありました。3月末に、富山で古くから反原発運動に関わってきた者たちが集まって、「この後、自分たちは何をしようか」と話し合っていたのですが、その話し合いの場に、富山で音楽活動を行っている若い人たちも参加して、「とにかく何か面白いことを街中でやりましょうよ」と言ったことがきっかけとなり、そのデモは実現しました。

その後、原発現地の人たちに原発への不安や反対の思いを声にして欲しいし、富山の私たちも原発に反対していることを伝えたいという思いから、2011年4月29日から5月3日の連休に富山から能登半島にある志賀原発の現地に出かけて、福島原発事故後、初めての原発現地での戸別ビラ入れを行いました。その時の現地ビラ入れは、「反原発市民の会」が中心となって行ったものですが、その際に4月10日のデモを一緒に行った人たちにも呼びかけて、一緒に現地でのビラ入れをしました。

4月10日のデモの約2ヶ月後の6月11日は、原発事故からちょうど3ヶ月目ということで全国各地で反原発デモや集会が行われましたが、富山でも4月10日のデモを一緒に行った若い人たちが中心になって、中心部の街頭で「脱原発サウンドデモ」を行いました。そのように、「3・11/12」後の早い時期から、反原発デモの企画・準備を通じて、それまであまり接点がなかった若い人たちとの出会いがあったのですが、残念ながら、その後の富山の反原発運動の中で、そのことを十分に活かすことができなかつたように思います。

6月末に、「福島と一緒に行きませんか」という誘いを受けて、富山で反原発運動に関わっている顔なじみの人たち数人と福島県に行き、南相馬市の詩人の若松丈太郎さんを訪ねたのですが、その際に津波の被害にあった近くの海岸にも行きました。また、その時の福島行きでは、6月26日に福島市内で行われた「1万人ハンカチパレード 福島アクション」に参加しましたが、それは「3・11/12」以降、福島市で初めて行われた反原発デモでした。そのデモの集会の中で読み上げられた「宣言文」で、「ふくしまは死んでしまったのか？いいや、我々は、このふくしまで生きている。そして叫びを上げている」といった切実な訴えを行っていたことが心に残ったのですが、その福島行きでは、それも含めていろいろな課題が見えてきたように感じていました。

7月24日には、金沢市で行われた「風下住民パレード」という反原発デモに参加しまし

たが、その際に、6月11日の富山の「反原発サウンドデモ」で使用したゴジラのはりぼてを仲間と一緒に担いでデモに参加しました。

2011年の8月、「反原発市民の会」では、反原発と地域自治とは分かちがたいこととしてあるという思いから、富山県内の富山湾岸沿いの7つの市(氷見、小矢部、高岡、新湊(射水)、富山、滑川、魚津)の市長や防災担当者を訪ねて、「反原発キャラバン・2011」を行いました。その中で、「隣接県での原子力プラントの立地・建設・再稼働について発言権や拒否権」をもち、「原発『事故』を含むすべての『災害』の被災者・被爆者の『避難の権利』を保障」といった私たちの掲げる「反原発都市」のコンセプトをめぐって訪問先の自治体の市長に回答を求めると共に、福島原発事故の「教訓」に立った地域独自の原子力防災対策をどのように進めているかを問いました(「反原発キャラバン・2011」については、「2011/9/10〈エクソダス〉2011 通信7」参照)。

その後、「反原発市民の会」では、その年の11月を中心に、志賀原発に隣接する県内自治体はUPZ(緊急時防護措置準備区域・30km圏)、それ以外の自治体はPPA(50km圏・放射能プルームの通過時の被爆を避けるための防護措置を実施する地域)、もしくはそれに準ずるエリアとして志賀原発の事業者である北陸電力と「原子力安全協定」を結ぶことを求める陳情を、県内の15の自治体の全ての議会に行いました。

9月19日、「さようなら原発1000万人アクション」の一環として行われた東京・明治公園での「さようなら原発5万人集会」に参加しました。その集会は、大江健三郎らの著名な知識人を呼びかけ人として、これまでの原発政策そのものの転換を訴えるものでしたが、集会のタイトルにある通りに、数万人もの人々がそこに参加するという大きな盛り上がりで開催されたものでした。

「5万人集会」の少し前の9月11日に「経産省包囲行動」が行われましたが、そのアクションとの連携として、「9条改憲阻止の会」のメンバーの人たちが中心となって経産省の敷地内に「経産省前テント」が設置されました。その翌月の10月27日から29日にかけて、「経産省前テント」で福島の女性たちと支援者たちによる座り込みが行われたのですが、それに合わせて第2、第3のテントも経産省の敷地内に設置されました。そのことに連帯するアクションを富山でもやろうということになり、県庁前公園内に設置したテントで数日間にわたって座り込みが行われましたが、その時には、私はもっぱらスピーカーを付けた車で県庁前公園の周辺を回って、街宣活動をしていました。

2012年

2012年に入ると、日本各地の原発が次々に定期検査の時期を迎えて運転を停止すると共に、定期検査後も原発を動かせないという状態になり、2012年5月には日本中の全ての原発が停止しました。そうした状況の中で、大飯原発を再稼働させるかどうかは政府の原発政策の大きな焦点となっていたのですが、2012年の3月、4月の段階ではそのこ

とをめぐって様々な紆余曲折があり、政府自身もまだ大飯原発の再稼働に踏み切ることへの決断をしかねているという状態でした。

そうした状況の中で、3月25日、福井市の中央公園で「大飯原発3・4号機『再稼働』に慎重な判断を求める市民集会」が開かれ、私も富山から参加しました。その少し前から大飯原発現地のおおい町の公園内に「大飯原発再稼働現地監視テント」が設置されたのですが、その頃から「監視テント」を中心に、大飯原発の再稼働阻止に向けた具体的な取り組みが始まっていました。

私・たちは、富山市に本社を置く北陸電力が石川県・能登半島で原発の建設を計画し始めた段階から現地に通いながら、「反原発市民の会」として原発に反対する運動に関わっていたのですが、志賀原発1号機と2号機が相次いで建設されてしまった後は、志賀原発反対運動は、主に原発の運転差し止めを求める裁判闘争として闘われてきました。その裁判の終了後、石川県と富山県で志賀原発への反対運動に関わってきた運動団体・グループによって「命のネットワーク」が結成され、現地での反原発運動の母体となっています。

原発立地自治体である石川県・志賀町では北陸電力と原子力安全協定を結んでいますが、富山県側の氷見市も含めて原発から30km圏内にある他の自治体でも北陸電力と「原子力安全協定」を結ぶことで原発の再稼働への「拒否権」をもつことを求めて、4月26日、七尾市、中能登町、羽咋市といった石川県の自治体と氷見市での申し入れに参加しました。それは、初めて石川と富山の「命のネットワーク」全体で行った取り組みでした。

2012年6月には、大飯原発を再稼働させるという政府の方針が明らかになっていましたが、そうした政府の方針に反対して、6月3日、福井市の中央公園で「再稼働反対 福井・全国緊急集会」が行われましたが、その集会に、私も富山から参加しました。それは、平和運動センターや労働組合と市民運動グループといった古くから福井での反原発運動に関わってきた人たちだけではなく、「監視テント」で再稼働監視行動を行ってきた人たちや、「原発の電気を使う自分たちも当事者だ！」という意識で関西方面からやって来た若者たちも多数参加するなど、旧来の運動の枠を大きく超えるものでした。

それから数日たった6月10日、金沢の反原発団体の「さよなら志賀原発」が金沢市内で主催した反原発デモと集会に参加しました。

大飯原発の再稼働の日が近づくにつれて、全国各地で再稼働に反対するデモや街頭アクションが展開されましたが、とりわけ、毎週金曜日夜の「官邸前抗議行動」では、参加者の数が数万人規模にまで一挙に増えて、再稼働直前の6月30日夜には、主催者発表で20万人もの大群衆が首相官邸や国会議事堂周辺の街頭を埋め尽くすというかつてない事態になりました。残念ながら、私自身は参加できなかったのですが、6月30日から翌7月1日にかけて、大飯原発現地では、原発ゲート前を非暴力・直接行動で封鎖・占拠するという、この国の反原発運動の軌跡の中で大きな画期となった「大飯原発再稼働阻止闘争」が闘われました。

7月半ばに私は東京に行きましたが、14日には「官邸前抗議行動」に参加し、15日には「再稼働阻止全国ネットワーク」の準備会として開かれた「全国相談会」に参加しました。15日の「全国相談会」では、「大飯原発再稼働阻止闘争」を全国のそれぞれの原発現地での闘いへとどのように引き継いでいくことができるのかをめぐって論議が行われました。

また、16日には、代々木公園で行われた「さようなら原発 10万人集会」に参加しました。その集会は、昨年9月の「5万人集会」を開催した人たちが中心になって行ったものですが、「官邸前抗議行動」を中心的に行っている「首都圏反原発連合」や、各地の原発の再稼働阻止に向けた動きを全国レベルでつくろうとする人たちなど、多種多様な人々が一堂に会した熱気のあるものでした。しかし、集会后、代々木公園を出て、街頭でデモを行った時に、街宣車とデモの参加者との距離が開きすぎてしまい、デモのシュプレヒコールをする人が誰もいなくなっていました。結局、主催者でも何でもない自分が、「再稼働反対！」といったコールをハンドマイクですることになってしまい、とても変な気分だったことが今でも記憶に残っています。そこにも現れているように、集会自体は多くの反原発運動団体・グループが参加してとても熱気のこもったものでしたが、今後、様々な運動組織やグループがそれぞれの課題をどう共有化し、運動を更に大きく展開するのかという点では、多くの隙間があったのではないかと思います。

2011年11月、富山の私・たちは、富山と石川の反原発運動が互いに「越境」し合いながら、地域独自の原子力災害対策／原子力規制行政の確立を求めることで、「地方自治体」から「地域自治体」への転換を進めることを掲げて、「越境する原子力災害対策／原子力規制行政を求める住民ネット・富山」（略称：〈越境〉ネット）を発足させました。2012年8月17日から28日にかけて、「〈越境〉ネット」では、富山県内の15の全自治体を訪ねました。その際に、各自治体での新たな原子力防災計画の策定に際して、志賀原発に隣接する自治体はUPZ、それ以外の自治体はPPA、もしくはそれに準ずるエリアとして、具体的に原子力災害対策を盛り込むことを要請しました。

8月18日、富山平和運動センターと「原発をなくす連絡会」という共産党系の反原発団体との共催で、「北電本社総行動」の反原発集会と「パレード」が行われました。私もそこに参加しましたが、旧総評系の労働組合によってつくられた平和運動センターと共産党という既成政党とのいわば、「野合」による「北電本社総行動」は、「3・11／12」以前の運動スタイルを踏襲するだけで何の新鮮みも感じることができないものでした。そこにこの間の反原発運動のあり方の一つのマイナスの側面が、象徴的に現れていたように思います。

その翌日の8月19日から20日にかけて、愛媛県・松山市で伊方原発の再稼働に反対する集会があり、その集会后に「再稼働阻止全国ネットワーク」の準備会が行われたのですが、私はその両方に参加しました。

翌月の9月には、「福島原発告訴団・北陸ブロック」の集会が、20日には金沢市で、30日には富山市で行われましたが、30日の富山集会では、主に自分たちが中心となって当日の準備や進行を勤めました。

10月21日、「さよなら志賀原発」が企画した志賀町での現地ビラ入れに参加しました。

先程からお話ししてきたように、「大飯原発再稼働阻止闘争」以降、その闘いの「灯」を絶やすことなく、各地の原発の再稼働を許さない現地での闘いの新たな高揚へとつなげていこうとする機運が高まっていたのですが、11月11日、東京で「再稼働阻止全国ネットワーク」の発足集会が行われ、私もそこに参加しました。また、私は翌12日の「国会包囲行動」にも参加しましたが、その際に、志賀原発に対する反対運動に関わってきた立場からアピールをさせてもらいました。

12月8日、福井県・敦賀市で開かれた「もんじゅを廃炉へ！全国集会」に参加しました。この集会は毎年12月上旬に行われているものです。集会後、敦賀市で行われた「再稼働阻止ネットワーク・西日本交流会」に参加し、翌9日、大飯原発の現地を案内してもらい、現地の反原発運動に関わっている人たちと交流しました。

2013年

今年2013年に入ってから私の動きについて言えば、まず、1月25日から26日にかけて東京都内で行われた「再稼働阻止全国ネットワーク」の「研修合宿」に参加したのですが、そこでの論議の場で、そのような「研修合宿」をぜひ、原発現地でも行ってほしいということを私は提案しました。そうした提案を受けて、4月13日から14日にかけて、志賀原発現地の石川県・志賀町に隣接する羽咋市で「交流合宿」を行うことが決まりました。

3月3日、「富山ガレキ阻止大会」に参加しましたが、その時には富山での集会には珍しく200人もの参加者がありました。昨年12月、岩手県・山田町からの震災ガレキを「試験焼却」した灰を富山市山本地区のゴミの最終処分場に運ぼうとしたトラックを、山本地区の住民と市民グループの人たちが搬入の途中で10時間余りストップさせるということがありました。それに対して、今年2月、ゴミ処理の富山地区広域圏組合の理事長である森富山市長が威力業務妨害で告訴したのですが、そうした弾圧をはねのけ、当事者を支援するということが、急きよその集会がもたれたといういきさつがあります。

4月13日から14日にかけて、先程触れた「再稼働阻止全国ネットワーク・羽咋合宿」が行われましたが、そこには私はもちろん、富山で一緒に反原発運動に関わってきた仲間たちも参加しました。石川と富山で長年、志賀原発反対運動に関わってきた者たちにとって、そのように「再稼働阻止ネット」の合宿を原発の地元の羽咋で行ったことは、これからの運動の結集軸を新たに創り出すことの契機として、非常に大きな意義があったと感じています。

それから約1ヶ月後の5月18日と19日に、「再稼働阻止ネット」の「柏崎連帯ツアー」に富山から参加しました。実はこの「連帯ツアー」というのは、東京で反原発運動に取り組む「たんぽぽ舎」が毎年行っているものなのですが、その時の「連帯ツアー」は「再稼働阻止ネット」として企画したものでした。そこには福島的女性たちも、自家用車やマイクロバス

に分乗してたくさん参加していましたが、彼女たちは初めての土地でも臆することなく、反原発を訴える街宣活動をつアーの間中行っていました。そうした彼女たちのあり方に触れて、私は大きな感銘を受けていました。

以上、「3・11/12」以降の私の「歩み」をざっと紹介しました。こうして振り返ってみると、おぼつかない足取りではありますが、「アンラーニング・2013」のテーマに即して言えば、「3・11/12」後の反原発運動の中で『拒否』の〈前〉線」が生み出されようとしているすぐそばを歩いてきたように思います。このように、原発事故後も原発に固執するこの国の支配者層のあり方を許さない運動の「現場」に居合わせる事ができたという意味で、幸せな経験をしてきたように感じています。

「3・11/12」以降の反・脱原発運動はいかに展開されたか

この後は、「3・11/12」後の2年数ヶ月間の時間の中で展開されてきた反原発運動のあり方を、私なりに大きく横断的に捉え直すことをしていきたいと思いますが、これはあくまでも、私が主観的に分類してみたものです。ですから、分類の仕方自体に問題があるかもしれませんし、こういう運動が抜けているということもあるでしょうが、「3・11/12」以降の多様な反・脱原発運動の「潮流」を、次の6つの「キーワード」で分けてみたいと思います。

① 「再稼働阻止」の運動

先程もお話したように、昨年11月、「再稼働阻止全国ネットワーク」が発足しました。その背景には、現在停止中の原発を何としても再稼働させたいという政府の方針に対抗して、全国各地の原発の現地やその近隣の都市の運動が横断的なネットワークを形成し、互いの課題を共有しながら、再稼働阻止に向けて闘う主体を更に強いものにしていきたい、ということがあります。

原発現地での闘いはどこでも長年、孤立を強いられてきましたが、大飯原発の再稼働が差し迫って来た時に、「地元の皆さん、頑張ってください」というかけ声だけで済ませるのではなく、若者たちが実際に原発現地に入って「監視テント」を立て、そこをベースとして原発ゲート前の封鎖・占拠という直接行動を展開したことの意義は、非常に大きかったことのように思います。同時にそれは、労働組合をバックにした原発への抗議行動によくあるように、最初から闘争のスケジュールを設定してそこまで行ったら止めるというスタイルではなく、最後まで手を引かないぞ！という闘いを貫徹したという意味では、「不服従の闘い」でもありました。

大飯原発の再稼働自体は残念ながら阻止できませんでしたが、警官隊が最終的に退却するまで原発ゲート前を占拠・封鎖し続けた「大飯原発再稼働阻止闘争」は、非常に心をゆさぶらせるものがあります。その闘いを「糧」にしながら、今後のそれぞれの原発現地の闘いへとどう受け継いでいくかということが、「再稼働阻止ネット」の出発点になっていま

す。

今日の私の話の資料の中に、昨年 11 月の「再稼働阻止ネット」の結成時に参加者に配布された『「再稼働阻止全国ネットワーク」』は、どういうものか、それはなにをめざすのか？』という「宣言文」を収録しました。その中で、「再稼働を阻止していく上で要となるのは原発現地(立地地域+周辺地域)の闘いであり、それに連帯する『消費地元』の闘いである。脱原発への国政の転換を求める運動と原発現地を主体とする再稼働阻止の運動は両輪をなし、両輪は密接であり、互いを激励し、高めあう関係であるが、ネットワークは後者を担っていく」と、述べられています。「原発を止める」ために何をするかという時にいろいろなやり方があると思いますが、そこにもあるように、「原発の再稼働阻止」という 1 点に集中するという方針を掲げているということが、「再稼働阻止ネット」の運動の大きな特徴になっています。

私の「歩み」の中でも触れましたが、昨年 8 月の松山市での「準備会」や、今年 4 月の「羽咋合宿」、そして 5 月の「柏崎連帯ツアー」といったように、「再稼働阻止ネット」では、全国各地の原発現地で再稼働阻止に向けて人々が結集する「結節点」をつくりだそうとしてきました。この後も、「再稼働阻止ネット」では、伊方原発や大飯原発の現地での結集が予定されていますし、息の長い運動が継続・展開されていくことでしょう。

そうした動きを目的意識的に一つの「〈前線〉」へと形成していくことの一端を、富山の私たちも担っていきたいと思います。

② 「被曝労働者」への支援活動

「多重下請け」構造の中で使用者の責任が問われることのないまま、高線量の放射能にさらされながら、賃金の「ピンハネ」や劣悪な労働条件の下で使い捨てにされる原発労働者の健康と権利を守ることに向けて、2012 年 11 月 9 日、「被ばく労働を考えるネットワーク」が結成されています。また、多量の放射性物質が広範囲に撒き散らされた地域での放射能除染作業は、場合によっては従来の原発での作業以上に過酷な被曝を強いられる労働環境になっています。同「ネットワーク」では、除染労働者に支給される危険手当の「抜き取り」の問題にも現れているように、原発労働者と同様の賃金の「ピンハネ」や労働者の健康を無視した労働環境に苦しむ除染労働者の支援・相談活動も行っています。

今日の資料の中に、昨年 11 月 1 日付の「被ばく労働を考えるネットワーク通信 第 1 号」のコピーを収録しましたが、そこには、同「ネットワーク」の設立集会への参加と併わせて、同年 11 月 25 日の福島県いわき市での同「ネットワーク」主催の講演会と労働・健康相談会への参加を呼びかけています。原発事故後、いわき市は、福島原発事故の「収束労働」に従事する企業や労働者が集まるようになっていますが、そうした意味では、まさに被曝労働の「現場」と言ってもいいでしょう。

同「ネットワーク」の正式発足に向けた「呼びかけ人」の顔ぶれを見ると、東京の「フリー

ター全般労組」といった連合とは全く違った立場で無権利状態の労働者の労働運動に取り組んできた人たちや、反原発団体・グループや放射能被曝の問題に取り組んできた人たちが一堂に会しています。そのように、原発の「安全神話」や原発政策に固執したい人々にとって直視することを避けた存在である被曝労働者の問題を、反原発運動の重要な課題として取り上げていこうとする動きが生まれています。

「被曝労働を考えるネットワーク」の連絡先が、「山谷労働者会館」となっていますが、古くから東京の山谷といった寄せ場で日雇い労働者の支援活動を行ってきている人たちが、同「ネットワーク」の設立・運営に際して、大きな役割を果たしています。「収束労働」に従事する労働者の少なくない部分が寄せ場から集められていると同時に、暴力団を介在させた暴力的な労務管理や日常化した賃金のピンハネの問題といった日雇い労働が直面する問題は、そのまま原発労働者の問題と重なるものです。そのように、日雇い労働者への支援活動を行ってきた経験が、同「ネットワーク」での原発労働者や除染労働者への支援・相談活動の一つの大きなベースになっています。

③ 「放射能自主計測」運動

今日の資料の中に、「学校給食ニュース」を収録しましたが、これは 2011 年 12 月に発足した「生産者と消費者をつなぐ測定ネットワーク」が、発足からすぐの時期に出したものです。そこにもあるように、「測定ネットワーク」では、「子どもたちの内部被ばくを可能な限り抑えることが課題」だとして、「食材や土、学校給食等の放射能測定を開始」し、放射能の自主測定とその情報の共有を通じて、「生産者と消費者のつながり」や「学校給食の安全性と信頼性」を深めることを活動方針に掲げています。

この列島上の広大な範囲が、深刻な放射能汚染の被害を受けています。しかし、この国の政府は、放射能汚染食品の流通を厳しく規制して食を通じた内部被曝の防止に努めるどころか、むしろ、「被災地復興キャンペーン」や「風評被害」を起こさないという口実の下で、放射能汚染地帯からの農産物の流通を積極的に奨励しています。そうした現状に対して、このような放射能の自主測定グループが、とりわけ若い子どもをもつ女性たちが中心になって全国各地で結成されています。

これはたまたま私の目についたものを紹介したのですが、他に私が知っているところでは、「3・11/12」後、子どもたちが遊ぶ児童公園の砂場の放射線量の測定を首都圏全域を対象に行った「東京・砂場プロジェクト」や、原発被災地の福島で測定の依頼のあった食品サンプルの放射能測定を行い、その結果をネット上で公開している「いわき放射能市民計測室」といったグループがあります。なお、「市民計測室」では、放射能自主計測活動と併せて、福島の子どもたちを放射能汚染の心配のない地域で一時的に「保養」させる活動にも取り組んでいます。

④ 「脱・避被曝」への取り組み

今日の私の話の資料の中に、昨年 12 月に発足した「避難・移住・帰還の権利のネットワーク」が今年 4 月にネット上で掲載した2つの文章を収録しましたが、その内の一つは、「福島県の子どもの甲状腺ガン多発事態に関する緊急要求」と題するものです。これは、2011 年度に福島で甲状腺検査を受けた約 3 万 8 千人の子どもの内、3 人に甲状腺ガン、7 人にガンの疑いのある甲状腺腫瘍が見つかったことを受けて、更なる健康被害の防止に向けて、「どこでも誰でも健康診断」が受けられるようにすることを国や東京電力、自治体に求めるための署名活動への参加を呼びかけるものです。それと一緒に、その署名をもって請願に行ったことを報告する文章(「4/17 環境省・復興庁・原子力規制庁に行きました」)も掲載しました。

それらの文章からもうかがえるように、「権利のネットワーク」は、「子ども・被災者支援法」の形骸化を許すことなく、放射能汚染地帯からの避難や放射能による健康被害の防止を求める原発事故の被災者の要求を後押しすることに向けて、いくつもの運動団体やグループが結集してスタートしたものです。そこでは、年間 20 ミリシーベルトまで安全だとする文部科学省の放射能安全基準の撤回を求めたり、沖縄の久米島に放射能汚染地域から子どもたちを「一時保養」させるための施設をつくるといった多くの課題に取り組んでいます。

「脱・避被曝」ということ言えば、この間、全国各地で活発に展開されてきた放射能汚染ガレキの「広域処理」に対する反対運動も、その重要な一角を占めるもののように思います。今日の資料の中に、昨年 2 月に発足した「ノーモア・放射能キャンペーン@富山」が、今年 3 月 16 日付で出した「声明文」を載せました。富山県には岩手県山田町から放射能汚染ガレキが運ばれて一般のゴミ焼却施設で燃やされているわけですが、「ノーモア・放射能キャンペーン」では、県内の運動団体やグループ間の連携を進めながら、岩手での反対運動との連携・交流も行っています。放射能汚染ガレキの「広域処理」の問題には、「復興予算」の流用や大手ゼネコンの利権といった問題も大きく関わっていますが、富山でこれ以上の放射能汚染の拡大を許さないということが、運動の原点にあるように思います。

⑤ 原発事故の加害者に対する「告訴／告発」の運動

2012 年 3 月 16 日、福島原発事故の被災者を主体として、「福島原発告訴団」が結成されています。その結成集会で発せられた「福島原発事故の責任をただす！告訴宣言」を、資料に載せました。

その「宣言」で述べられているように、「未曾有の事故が起きてなお『想定外』の津波のせいにして、責任を逃れようとする東京電力、形だけのなおざりの『安全』審査で電力会社の無責任体制に荷担してきた政府、そして健康被害を過小評価し、被害者の自己責任に

転嫁しようと動いている学者たちの責任は重大」です。それにも関わらず、「誰一人処罰されないどころか捜査すら始まる気配がない」という状況を打破するために、「最も深刻な被害を受けている福島で、まず私たちが立ち上がり、行動」しなければならないという原発事故の被災者たちの強い思いが、「告訴団」の結成に至る背景にあります。しかし、日本の法律の枠組みでは、原発事故を引き起こした者たちの責任を問うことが非常に困難であるために、告訴はしても検察側が一向に動こうとしないという降着状態が、今なお続いています。そうした現状を訴えることに向けて、5月31日に「告訴団」の集会が東京で開かれることになっています。

それとは別に、既存の裁判制度に代わって民衆自身が原発事故に対する東京電力と日本政府の責任追及を行うことを通じて、国家権力による正統化抜きに普遍的な法的規範を確立するための運動として、「原発を問う民衆法廷」があります。これは、むしろ、「告訴」というよりも「告発」に近いものではないかと思いますが、2012年2月25日に第1回の「民衆法廷」が東京で開かれ、その後も各地で開催されています。今日の資料の中に、「民衆法廷」のパンフレットの一部分を掲載しましたが、「3・11/12」後、原発事故の被災者の立場から原発事故の被災者への公的支援を訴えている武藤類子さんや亀屋幸子さんといった福島の女性たちも、「民衆法廷」の「証言者」として陳述を行っています。

原発事故から時間が経てば経つほど、電力会社や政府の対応の理不尽さを追求するということが困難になってきているように思いますが、東京や大阪を始め、全国の各都市で「民衆法廷」を開催することを通じて、改めて問題の共有化を図ると共に、原発事故を引き起こした者たちの責任を問う声を高めていこうとしています。

⑥ 運動の「つなぎ手・中継」としての「テント前広場」と福島の女性たちの動き

「つなぎ手」や「中継」というのは、運動の言葉ではないように聞こえるかもしれませんが、実はそのことは、運動の中で非常に大事な役目を果たしているのではないかと思うので、あえてそうした言い方をしてみました。

今日、この場に参加している皆さんの中にも、経産省の敷地内に設置された「経産省前テント」に行った人がいるのではないかと思います。私がそこを訪れた時に、その運営に中心的に関わっているメンバーの一人が、「経産省前テントは、『峠の茶屋』ですから、いつでも来て一休みしてもいい。その後で、ぜひ、デモや抗議行動に参加してください」と言っていました。ルポライターの鎌田慧さんは、「経産省前テント」のことを「霞ヶ関の〈へそ〉」と言っていました。単に反原発運動に関わっている者たちが一息つくための「茶屋」ということ以上に、そこは、全国各地の原発の問題をめぐる「拒否」の運動の「中継地点」や「つなぎ目」になっているように思います。

今日の資料に、見開きで「経産省前テントひろば」のチラシを載せました。そのチラシでは、「テントひろばから各地へ!!!」という見出しで、そこからいつどここの原発の現地に駆けつ

けたかが日本地図のイラストで説明されていますが、その中に能登の志賀原発の現地も含まれています。そのように、東京に住んでいる人たちだけではなく、福島の女性たちも「経産省前テント」を中継して、全国各地の原発現地を訪ねているわけです。「3・11／12」以降、私が原発現地での抗議行動や集会に行く度に、必ず福島の女性たちに出会うことを不思議に思っていたのですが、そのチラシを見てようやく合点がいました。そのように、福島の女性たちが「経産省前テント」を経由して原発現地に出かけているだけではなく、その場を介して全国各地で運動に関わっている人たち同士が会って仲良くなり、「今度はそちらに行きますからね」と言ったりしています。それは、やはり、面白いことだと思います。

今日の私の話のレジュメでは、〈つなぎ手・中継〉の例として、「経産省前テントひろば」と併せて、「福島の女性たちの動き」と書きました。それも、運動の言葉ではないと言われそうですが、福島の女性たちは、何か特別な組織や運動のメンバーとして動いているわけではないのですが、ただ運動のそれぞれの場面でいろんな名乗り方をされていて、2011年10月末に「経産省前テント」で座り込みをした時には、自分たちのことを「原発いらぬ福島の女たち」と名乗っています。

先程触れたチラシの「テント広場のこれまで」の部分では、「テント」が経産省前に設置されてからのそこでのアクションが年表風に紹介されています。その中に、2011年10月27日から30日にかけてのべ2500人が参加した「原発いらぬ福島の女たち」の座り込みについての記載があります。その座り込みの「声明文」に当たるのが、資料の最後に掲載した『原発いらぬ福島の女たち』が立ち上がる！』という見出しのついた2011年10月5日の日付入りのチラシです。そのチラシの最後に、連絡先として何人かの福島の女性たちの名前・出身地と連絡先の電話番号が書かれていますが、それは別に誰か運動の代表者がいるということではありません。

私が昨年12月に大飯原発の現地での交流集会に参加した時にも、そこに福島の女性たちが来ていて、発言と併せてかんしょ踊りを披露していたし、その1ヶ月前の「国会前包囲行動」でも福島の女性たちが大勢来ていて、そこでもかんしょ踊りを披露していました。そのように、福島の女性たちの中で発言やアピールをしたりするのはごく限られた何人かの人たちなのですが、「テント前広場」での座り込みやハンストに参加したり、かんしょ踊りを披露したりするといったように、それぞれがいろんな形で運動に関わっているということが興味深かったし、すごいなと思うところです。

以上、「3・11／12」以降の反原発運動の流れを6つの「キーワード」で私なりに整理してみました。その中には原発事故以前からの反原発運動は含めていませんので、実際にはもっと多くの運動のスタイルがあるわけです。それら旧来からの運動が闘争的ではないとか、「拒否」の運動にはほど遠いと言うつもりは全くありません。ただ、反原発運動の『拒否』の〈前〉線化を進めようとする際に、「3・11／12」以降に登場してきた様々な動き

をきちんと捉え直すことの中に、そのための一つの契機があるのではないかと、思います。

反原発運動の「『拒否』の〈前〉線」はどのようにあるか

以上、「3・11/12」以降の反原発運動の中の多様な動きを、私自身の体験も交えながら整理することを試みてみました。こうして振り返ってみると、原発事故後の2年数ヶ月という時間の中に、今までにない動きが新しく登場してくるような運動の「節目」や「分岐点」があったように思います。そのような意味で、反原発運動にとっての特別な「節目」になるのが、2012年6月30日から7月2日にかけての「大飯原発再稼働阻止闘争」をはさんだ前後の時期ではなかったかと思えます。大飯原発3号機と4号機の再稼働がなければ、「日本中の原発がゼロになっても、電力の供給には何の問題もない」ということを実際に即して堂々と主張することができたはずなのに、そのチャンスを逸してしまったという意味でも、大飯原発の再稼働は反原発運動の側にとって非常に悔しいことでした。

しかし、私たちとしては、そうした思いにだけこだわっているわけにはいかないところもあります。つまり、原発推進派の人たちにとって、大飯原発を再稼働させたということは、もはや、後戻りができないところに足を踏み入れたということであって、この後は、日本中の停止している原発を次々と動かしていくしかありません。それは言い換えれば、運動の側も原発推進派の勢力との緊張関係を創り出しながら、再稼働阻止に向けた大きな闘いを展開していく段階に入ったということです。「大飯原発再稼働阻止闘争」の少し前の時期から、「官邸前抗議行動」が大きく盛り上がっていきませんが、「このまま何もしなければ、大飯原発が再稼働してしまう」という危機感が、大きなリアリティーをともなって「官邸前抗議行動」の参加者の間で共有されていたように思います。

先程も言いましたが、「大飯原発再稼働阻止闘争」で、最後まで「非暴力・不服従」を貫いて原発前ゲートの封鎖・占拠をやり切ったことの意義は、非常に大きなものがあつたように思います。従来の原発現地での反原発運動では、圧力に屈せずがんばっている現地の人たちを、都市に住む者たちが「側面」から応援するというのが、基本的な運動の形でした。

しかし、原発の再稼働が強行されるかどうかという瀬戸際で、まず、自分たちが体を動かすことで再稼働を止めさせたいという思いで、福井県の内外から大勢の人々が現地に集結しました。そのようにして旧来の運動のつくり方が崩されたことに対して、古くから現地の原発に対する反対運動に関わってきた人たちの中には戸惑いもあった、と思えます。しかし、そうではあっても、現地の反対運動と都市の支援者というこれまでの原発現地での反原発運動の枠組みを打破するような運動のスタイルや、闘争の参加者同士の連携の形が新たに生み出されたということは、とても画期的なことだと思います。大飯の闘いでは、運動のリーダーや「司令塔」無しでそこに参加している人たちが連絡を取り合って互いの動きを確認しながら、そこで何が起きているかをネットを通じてリアルタイムで伝えて、現地の闘

いの「実況中継」を日本中の多くの人たちが見ていました。そうした闘いのつくり方は、今までになかったものだと思います。

とりわけ、労働組合を軸にするような旧来のタイプの反原発運動では、「ここまで行ったら手を引こう」とか、「ここまでいったら一応は『勝利』だろう」といったような最初から自分で自分の行動をセーブしてしまうような体質が色濃くあります。それとは逆に、最後まで闘い抜こうとするような運動のあり方が、「大飯原発再稼働阻止闘争」でははっきりと見えたように思います。「大飯原発再稼働阻止闘争」では、原発のゲートから原発の構内に入ることができなかつたために、当時の牧野経産副大臣は船を使って海側から原発に入らざるを得ませんでした。そのような意味で、原発の再稼働自体は阻止できませんでしたが、大飯の闘いは、推進派にとっても大きな出来事でした。

しかも、注目すべきことに、大飯原発の再稼働が実際に強行されてしまった後も、「原発再稼働反対！」の声は衰えることなく、全国各地で原発再稼働に反対する動きは大きく盛り上がりました。そうした動きを受けて、それまでにはない運動を創り出していこうとする機運が全国各地で高まり、いろんな運動組織・団体が 2012 年に生まれています。そうした動きの中で、その年の 11 月、「再稼働阻止全国ネットワーク」や、「被ばく労働を考えるネットワーク」が結成されています。

原発で働く被曝労働者の問題は、これまでも重要な課題とされてきましたが、それをきちんと社会問題化していこうとする動きが 1980 年代に一旦中断されてしまった後は、被曝労働者の問題を反原発運動の中の課題にすることがなかなかできませんでした。今でも被曝労働者の問題が社会的にどこまで認知されているかということはありませんが、「被ばく労働を考えるネットワーク」ができてそこにいろんな人たちが一緒に関わることで、間違いなく、その問題が「可視化」されるようになってきているように思います。

このように、「3・11/12」後の反原発運動の中で、これまでに取り組めなかつたような大事な課題に挑戦しようとする新しい運動のあり方が生まれてきていると同時に、必要ならいつでも従来の運動の枠組みを壊してもかまわないということが、運動の中の一つの共通認識になってきているように思います。しかし、その一方で、旧来の運動の悪しき体質が依然として解体されずに所々で露呈してしまうということも、多々あるように思います。そうしたことの典型的なケースが、先程も触れましたが、富山平和運動センターと共産党系の反原発団体との共催で行った、昨年 8 月 18 日の富山での「北電本社総行動」集会と「パレード」でした。そこでは、既存の組織を使って多くの人たちを「動員」することで、集会やデモの規模を拡大することができたかもしれませんが、これまで反原発運動の中で小さな運動グループがやってきたことの良さが、退けられてしまったように感じました。

私は、「北電本社総行動」の主催者に、「命のネット」としてその場で発言させて欲しいと申し入れたのですが、平和運動センターと富山の共産党との両者の間で発言者を調整しているのもそれは難しい、ということで拒否されてしまいました。結局、そうした形で行われる集会では、主催者側にとって無難な発言をしてくれる人たちを選べばいいということで、

ずっと前から発言者が決まってしまうので、そこに急に私のような者が割り込もうとしても無理なのです。今日、私が話したように、「3・11／12」以降、いろんな新しい運動が登場してきているのですが、残念ながら、それらの運動がそうした旧来の運動の硬直的な体質を解体するということにまで至ってはいません。

この間の反原発運動の中で、それまでにない新しい運動が登場するようになっていますが、それらの運動の間で様々な矛盾や対立がないわけではありませんし、本当に出会うべきものが出会えていなかったり、運動同士が「交差」していないというもどかしさを、私自身が感じています。

先程も言ったように、2011年6月末に私は福島に行き、6月26日の福島市での「1万人ハンカチパレード 福島アクション」に参加しました。「パレード」では、他の参加者と一緒に「再稼働反対！」というスローガンを叫んでいたのですが、その時に、強い違和感を感じたことが今でも心に残っています。

多くの人々が深刻な放射能汚染の中での「生」を強いられている福島の地で、とりわけ、私のようによそから来た者が、「再稼働阻止！」や「再稼働反対！」を唱えることは何の意味があるのだろうか、デモをしながらずっと考え込んでいました。しかし、自分のような者が、福島で苦しい思いを抱えながら生きている人たちに向かって、「危険だからそこから逃げろ」と、ただ軽々しく言うわけにもいかない。そうであれば、いったい自分としては何を言えばいいのだろうか、という思いをずっと抱えたままで、富山に戻ってきました。そうしたちぐはぐさは、今でも運動の中できちんと解かれていないように思います。

例えば、この間の反原発運動の中で、「再稼働阻止」の運動と「被曝労働者」への支援の運動は、どこでどのように出会って「交差」していくのか、本当にはよく分からないところがあります。今日の話のレジュメを作る際に、最初、「被曝労働者」の運動を、「脱・避被曝」の中の一つとして考えていました。しかし、少し考えれば分かるように、「被曝労働」というのは、結局、他の人たちが被曝させないようにするために、自分が放射能を浴びるという仕事なのです。もちろん、そんな労働は良くないに決まっていますが、誰も「収束作業」をやらなかったらどうなるかということは現実の問題としてありますし、現にそれを仕事にしている人たちがいる以上は、「被曝労働」はない方がいいと言ってみても何の力にもなりません。

そのように、私が福島のデモで感じたような矛盾は、何もそこだけに限ったことではなく、「3・11／12」以降の反原発運動の様々な取り組みや、運動の現場にも現れていることではないかと思います。そのことをどうしていくのかを私たちが本気になって考えなければ、運動は簡単に分断されるだろうし、反原発運動の新しい動きの中から『拒否』の〈前〉線が生み出されるということにもならないように思います。

今年の5月の「柏崎連帯ツアー」に私が富山から参加した時に、何人かの福島の女性たちもそこに来ていました。彼女たちも私と同様に「ツアー」の参加者として来ていたのですが、彼女たちは柏崎で街宣車に乗って市街地をずっとアピールをして廻っていました。私

はそうした彼女たちの様子を見ていて、自分が情けなくなったというか、こんな参加の仕方
でいいのかという思いになっていました。「3・11/12」以降、福島の女性たちは、全国の
あちこちの反原発グループに呼ばれて現地の状況を訴えています。その時の「ツアー」
でも、「もう誰も私たちと同じ目に遭わないで欲しい。原発事故を絶対に繰り返してはなら
ない」と、街宣車から柏崎の人々に向かって訴えていました。

そのような福島の女性たちの身の動きが、東京の「テント広場」の場のつくりと一体化し
て、そこからいくつもの新しい出会いやつながりが生み出されていますが、そうした彼女た
ちの動き方は、これまでの反原発運動にはなかった有り様を示しているように思います。今
更ではありますが、彼女たちがそのように一生懸命に動き回っている姿を、自分たちはどこ
までちゃんと見ていたのだろうか、と思っています。

先程から言っているように、個々の運動としては貴重な取り組みがなされているというこ
とはあっても、それぞれの運動が互いに向き合うということはあまりなされていないように思
いますし、そうした動きが互いにどのようにつながっていくのかという筋道は、まだまだはっ
きりと示されてはいません。そうした意味でも、福島の女性たちの身の動かし方に体现され
ているような〈つなぐ〉という役割の大切さを強く感じています。

2. 「フリー・トーク」での論議から

以上のような提起・報告の後で、それを受けて参加者同士での「フリー・トーク」が活発に行わ
れました。以下、そこでの論議のアウトラインを紹介します。

「〈3・11〉以降の反・脱原発運動の展開」を補足する

参加者 A : 今日の話の中で、「3・11/12」以降の反原発運動の様々な「潮流」について分類・
整理をしてもらったが、報告者自身としては、その中のどの運動にとりわけ深く関わってきたとい
うことになるのか。

報告者: 私が能登半島の原発現地に通り始めた頃にすでにあった、古顔の反原発運動団体と
して「はんげんぱつ新聞」を出している「原子力資料情報室」があるが、私たち「反原発市民の
会」もその賛同団体となっている。先程の話の中では触れなかったが、2011年12月に敦賀市
での「もんじゅを廃炉へ！全国集会」に参加した後で、京都で開かれた「はんげんぱつ新聞」の
会員の全国交流会にも参加した。そこでは全国各地の原発現地での闘いや取り組みについて
の報告が行われたのだが、そうした報告のどこに焦点を当てて今後の反原発運動をめぐる論議
を進めるかということが、非常に曖昧であるように感じた。率直に言えば、そこでの論議のスタイ
ルは以前からそのようなものであったのだが、「3・11/12」以降もそんなことでいいのかと思わ

ざるを得なかった。

そのような思いをずっと抱いていたところに、「再稼働阻止ネット」の結成に至る動きに関わるようになったのだが、そこで出会った人たちが、「大飯原発再稼働阻止の闘いをどうしたらちゃんと継承できるかということが、自分たちの課題だ」と言っていることに強く共感した。その時に、大飯の闘いの継承ということを経験の原発に関わってきた自分たち自身もどうすれば自らの課題とするかが問われていると思ったのだが、今でもその思いは変わっていない。

そうした意味では、反原発の「潮流」の中での再稼働阻止の運動に最も深く関わってきたということになるが、何もそれだけを考えればいいと思っているわけではなく、他の運動をどうしていくかということも含めて、反原発運動全体を立体的に創り直すことが求められている、と思っている。そのためにも、先程から触れてきた福島の女性たちの動きから自分たちは何を受けとめるかということがあるだろうし、自分たち自身も彼女たちのように運動と運動との「つなぎ手」としての役割をどう果たすかを自覚的に考えなければいけない時期に来ているように思う。

昨年 11 月、私が「再稼働阻止ネット」の発足集会に参加したのと同じ頃に、「はんげんぱつ新聞」の全国交流会があり、自分には行かなかったが、志賀原発の反対運動に関わっている人たちが何人かそこに参加している。そのような意味で、その頃の時期が運動の一つの「分岐点」になっているように思う。

参加者 A :よく分からないが、それは、何と何との「分岐点」だったということか。

報告者:「はんげんぱつ新聞」の全国交流会のように、原発現地での運動の全国的な連絡会・交流会という枠組みでつながるということが、これまでもずっと行われてきた。そうではなく、原発の再稼働をいかに阻止するか、また、そのために反原発運動全体をいかに組み立て直すかという共通の課題を軸につながるとい方向性がはっきりと現れてきたという意味で、運動の「分岐点」と言ってもいいように思う。

参加者 B :今言われたことをもう少し補足すると、「原子力資料情報室」を仲立ちとして、それに地方では平和運動センターといった労組中心の平和運動団体、首都圏では環境フォーラムや原水禁が加わって運動をつくるというのが、「3・11/12」以前の主な反原発運動のスタイルだった。そうした運動スタイルは今でも続いているわけだが、それと「再稼働阻止ネット」につながるような動きとが徐々に「分岐」してきた、と言ってもいいだろう。

今日の話の中で福島の女性たちの身の動かし方について何度か触れられていたが、まさに現在「被曝現地」としてある福島の中で、いろんな動きが登場してきているように思う。「テント前広場」にも現れているように、福島の中での様々な動きと全国的なレベルでの多様な反原発の運動とは互いに結びつきながら展開されているということがあるはずだが、そこをもう少し意識的に整理したらいいのではないか。

また、今日の話で出てきた〈つなぎ手・中継〉ということで言うと、古くからある反原発運動の団

体だが、「3・11/12」以降、目覚ましい活躍をしているものとして、「たんぼぼ舎」がある。「たんぼぼ舎」は、「再稼働阻止ネット」の全国的な事務局としての役割を務めているし、「経産省前テント」の運営でも大きな役割を果たしているという意味でも、〈つなぎ手・中継〉ということの中にきちんと含めて置いた方がいいように思う。

報告者:「反原発出前講座」をやっていたり、原発問題に関する書籍やパンフレットを出している団体として、80年代から「たんぼぼ舎」の名前を知っていたが、「柏崎連帯ツアー」に参加した時に、そこにいろんな人が関わっているということがよく分かった。

柏崎では自分のことを「アドバイザー」と自称している人と知り合ったが、彼は学者ではないが、原発に関する専門的・技術的な知識をもって、古くから「たんぼぼ舎」での運動に関わっているということだった。また、「プラント技術者の会」という原発の「ストレステスト」について反原発の立場から分析している人たちがいて、それを自分も参考にしていたが、そのメンバーで「たんぼぼ舎」の活動にも関わっている人がいることを最近知った。

「たんぼぼ舎」では、ある貸しビルのかなり広い部分を借りていて、そこで原発に関する講座や映画の上映会を行ったりしているが、そのように運動の「拠点」となっていると同時に、全国各地での反原発運動をつなぐという役割も果たしている。

参加者 B:「3・11/12」以降の反原発運動の「潮流」ということについてももう少しだけ補足して言うと、この間の「放射能自主計測」運動について、「民衆科学」という言い方をしている人たちがいる。かつて「市民科学」という言い方がされた取り組みがあったが、原発の問題のように科学的な知見を必要とするような政策に対して、専門的な知識をもつ人々が市民の声をそこに反映させて批判的な立場から介入しようとする流れがあった。そうした流れを代表する人物が「反原発資料情報室」の高木仁三郎さんだったが、彼が亡くなった後も、彼の遺志を受け継いだ「高木学校」等を通じてそうした流れは今でも続いている。

「民衆科学」というのは、まだまだ熟さない言葉だが、原発事故後の深刻な放射能汚染の中で、何か特別に科学的な知識をもっていなくても、学校給食の食材や自分が住んでいる場所の放射能汚染の実態を自分で調べようとするのが、とりわけ、首都圏に住む幼い子どもをもつ女性たちを中心に進められている。そうした動きの中で、全国各地で「放射能市民測定所」が作られているし、それと連動して、子どもを放射能から守るための各地のネットワークや、放射能汚染ガレキの「広域処理」に反対する運動が生まれてきている。

参加者 C:昨年夏を中心に数万人規模の人々が参加した「官邸前抗議行動」のことは、今日の話の中ではあまり取り上げられていなかったが、それは、「3・11/12」以降の反原発運動の「潮流」のどこに入ると考えた方がいいのか。

参加者 D:それは、大飯原発現地で再稼働阻止闘争が闘われたことと対応するような、都市での街頭行動ということになるだろうが、原発事故後に全国の各都市で展開された反・脱原発を掲

げるデモや街頭アクションの流れは、今日の話で取り上げられた様々な運動とは別の範疇のこととして、「3・11/12」以降の反原発運動の「潮流」の中にきちんと含めるべきではないかと思う。

その他、それほど華々しく展開されているわけではないが、重要な動きとして、原発プラントの海外輸出に反対する運動があるだろう。また、どうしても、東京のような大都市で展開されている運動に目がいきがちだが、放射能汚染ガレキの「広域処理」の問題は、その逆に、地方での反対運動が各地で活発に展開されることの積み重ねの中で、全国的に注目されるようになっていたように思う。

参加者 E :放射能汚染ガレキの話が出たが、富山でのガレキの「広域処理」の問題がどうなっているかということについて、私が知っている範囲で話してみたい。

石井知事が岩手県に行って結んだ協定では、「住民の理解が前提」と書かれていたはずだが、結局、私たちの理解や納得を抜きに富山への放射能汚染ガレキの持ち込みが強行されたことに大きな憤りを感じている。

今年に入って、岩手県の椎茸栽培農家の人の話を富山で聞く機会があったが、その人が言うには、今、仮設住宅にいる被災者の人たちが最も困っているのは、住宅の再建と雇用の問題であり、ガレキは2011年8月の段階で全部が仮置き場に運ばれてしまっていて、生活している場所には全く残っていないということだった。そうした被災者の声は、町長にも届いていないし、ガレキの「広域処理」の件は地元の山田町の手を離れて、岩手県と環境省で勝手に決められてしまっている。実際には岩手県にはもうほとんどガレキが残っていないのに、まだ8,300トンのガレキを富山に持って来るとい話になっている。

まだ、民主党政権だった頃に、氷見出身の民主党の県議が、「高岡市に金がないというならオレが何とかしてやる」、「ガレキの受け入れを表明すれば国から助成金が出るし、しかもガレキを実際に焼却処理しなくてもそのお金は返さなくてもいい」と言ったことで、高岡でのガレキの受け入れが決まってしまったそうだ。

県内の3つの清掃事務組合の中で一番最後にガレキの試験焼却を行った新川地区清掃事務組合が、住民との公害防止協定を結んでもいない段階で、ガレキの本格受け入れを富山地区よりも早く表明している。どうも県以上に新川地区清掃事務組合自体が身を乗り出して、ガレキの受け入れを決めてしまったらしい。結局、そうなってしまえば、後は、自分たちとして監視行動を強めるしかない、と思っている。

参加者 D :「3・11/12」以降の反原発運動の活発な展開に対して、2011年9月に高円寺界隈の「素人の乱」が中心になって企画したデモに対する弾圧があったが、その後、大阪では、ガレキ受け入れに反対する抗議行動に対して何人も逮捕・拘留するという厳しい弾圧があった。試験焼却したガレキの灰を最終処分場に搬入しようとしたトラックを足止めした人たちを森富山市長が告訴したということも、そうした流れの中にあると言ってもいいだろう。

反原発運動の『拒否』の〈前〉線」をめぐって補足する

参加者 B :今までの論議は、今日の話の中の『3・11/12』以降の反・脱原発運動の展開」ということに関わるものだと思うが、今日の話の最後の「反原発運動の『拒否』の〈前〉線はどのように存在しているか」ということについて、私なりにもう少し補足したい。とりわけ、今日の話の中で、大飯原発再稼働阻止闘争が「3・11/12」以降の反原発運動の大きな「分岐点」だと言っていることについて、そのことの有り様をもう少しきちんと見ていく必要があるだろう。

「3・11/12」以降、多様な範疇の反・脱原発をめぐる運動やアクションが登場してきているが、今日の話の中で何度も指摘されているように、それらが全部滑らかに「接続」しているわけではない。個別の運動同士がどこかすれ違っている場合もあれば、互いに近接していながら、「交差」しそこねているというように、それらの運動がお互いにどのように関連しあい、向き合うかということについて認識が共有化されるところにまで至っていない。また、「分岐点」と言ってみても、それが単に運動グループ・団体の「集合離散」ということのレベルに止まるのならばあまり意味がないので、そこから何が新しく生み出されたかといったように、もう少し実質を伴うこととして考えなければいけない。そのような意味で、報告者が強調していた、運動と運動を「つなぐ」ことの重要性を、もう少しきちんと捉える必要があるように思う。

「自由と生存のメーデー」といったメーデーや、「反戦と抵抗のフェスタ」といったラディカルな街頭アクションを展開している「フリーター全般労組」という「フリーター」・非正規労働者の労働組合が東京にある。今年4月6日、「フリーター全般労組」では、「3・11 北へ西へ。語るべきだが、語られてこなかったこと」という「反原発企画」を行ったが、それはとても優れた運動的センスに基づいて企画されたもののように思う。

その集いのタイトルの「北へ」というのは、福島に行って「被曝労働者」になった人たちがいるということだが、一方、「西へ」というのは、福島原発事故による放射能汚染から身を守るために「自主避難」した人たちということだ。4月6日の集いでは、「北に向かったもののひとり」として「フリーター全般労組」のメンバーの北島教行さんと、「西に向かったもののひとり」として東京から実家のある愛知県へ「自主避難」した活動家の矢部史郎さんが、問題提起を行っている(同「反原発企画」については、『拒否』の〈前〉線情報 No.1 参照)。

矢部史郎さんは、福島原発事故後、「3・11」と「3・12」とはきちんと区別すべきだということを、一貫して主張している。つまり、2011年3月11日の東日本大震災やそれによる巨大津波の被害というのは、紛れもなく自然災害だ。しかし、3月12日から破局が決定的になった福島原発事故は、自然災害が「引き金」ではあっても、それとは明確に別のこととして捉えなければならないし、「3・11」の自然災害の被害とは別に、「3・12」以後の「放射能公害」をきちんと問題化すべきだというのが、彼の主張だ。彼は、今日の話の中にあつた「東京砂場プロジェクト」に深く関わっているが、彼は、とりわけ、自主避難者の動きや、各地の女性たちが中心になって取り

組んでいる「放射能自主計測運動」といった「民衆科学」に着目して、この間、鋭い社会批判・社会批評を行っている。そうした彼の問題意識からすれば、原発事故の「収束」のための「被曝労働」は拒否すべきだ、ということになる。

一方、「北へ」行って原発事故の「収束労働」に関わっている者の立場からすれば、「俺たちが『収束労働』をしなくなれば、福島原発はその後どうなると思っているのか」ということになる。福島原発事故後の「収束労働」に従事させるために、山谷や釜ヶ崎といった寄せ場も含めた様々な下層労働市場から労働者を集めているわけだが、法律で決められた以上の放射能を浴びればどんどん人間を入れ替えなければならなくなるので、「収束労働」を行う労働者が今後「枯渇」してしまう。そうなれば、福島原発はどうなるのかということ抜きにして、『原発を止めろ』とか『再稼働反対』と簡単に言うなというのが、「北へ向かったものたち」の言いたいことだろう。

そのように考えれば、「放射能自主計測運動」や、「ガレキ」の受け入れに反対することと、「被曝労働者」の問題をどうするかということとは、運動的にも論理的にも必ずしもうまく「接続」できるわけではない。しかし、非常に難しいことだろうが、そこまで本当に問題を深く掘り下げて行かなければ、日本の反原発運動の中で『拒否』の〈前〉線が本当に生み出されることにはならないのではないか、と思う。

そのように、「フリーター全般労組」の「反原発企画」では、運動に関わっている者同士の見解の違いや対立がはっきりと現れていたのだが、それは決して悪いことではなく、むしろ、そうした違いを互いに率直に表明しあうことが運動をより豊かなものにしていくように思う。

「3・11/12」以降の反原発運動の中には、今まで触れてきたような多様な範疇の運動があり、その中で多くの人たちが動きを創り出している。そのような意味では、運動の「動線」が引かれつつあると言ってもいいのだろうが、それが直ちに〈前〉線になっているかといえば、必ずしもそうとは言えない。それでは、〈前〉線とは何かということになるが、それは一言で言えば、「敵を名指して対峙する」ということだろう。

例えば、放射能汚染ガレキの問題に取り組んでいる人たちは、ガレキを受け入れたがっている県当局や県内の各自治体の行政と対立しているのは間違いないが、それが本当に「敵を名指す」ようなところまで行っているとは、必ずしも言えないのではないかと。「敵を名指す」というのは、別にこちらで敵に勝手な呼び名をつけるのではなく、敵がリアルにせり上がってくるような状況をこちら側が創り出した上で、相手側と対峙関係に入るようなこととして、イメージしてもらえればよいように思う。

更に言えば、「3・11/12」以降の反原発運動の多様なアクションや運動の展開の中で、「まさにここが『突破口』だ！」ということが運動全体の共通の認識となり、そこに向かって運動が収斂していくような「焦点」が生み出される——その時に、〈前〉線が「前線」にまでせり上がって、国家や資本に対峙するところまで入っていくのではないかと考えている。

先程から何度も言っているように、福島原発事故の出来(しゅったい)以降の私たちの「生」の大きな危機の中で、反原発をめぐるこれまでになく多種多様なアクションや運動が全国各地

で展開されているが、それはまだ「自然過程」の段階だと言ってもいいように思う。

他方では、「自分はずっとこういうことをやってきたが、これは本当はどういうことだろう」とか、「自分はこれをしてきたが、自分の隣にいる人は何をしています、そのことと自分がやっていることとはどのように関わるのか」と自ら問うような段階があるが、それは「自然過程」との対比で言えば、「意識過程」ということになる。

そのように、原発事故後の危機的な状況の中で、ある種の「自然過程」の中で生み出されてきた反原発運動の「動線」が、自分たちがやっている運動と自分の隣にいる人たちの運動との「接続」を探りあうような「意識過程」に入る時に、〈前〉線が「前線」に変容して、それがまさに運動の「分岐点」になる。現在、この列島上にいろんな反原発運動の「潮流」やアクションが登場しているが、そのように、「自然過程」から「意識過程」への転換がどのようになされつつあるのかということが、「3・11/12」以降の反原発運動のあり方を捉える際の重要なポイントであるように思う。

「拒否」の萌芽をいかに探るか

参加者F: 原発事故の「収束」の見通しが全く見えない中で、三菱重工が製造する原発プラントをトルコへ輸出する計画が出てきているが、その計画には、福島原発事故の汚染水の処理プラントを作ったフランスのアレバ社も加わっている。そうした海外の原子力関連の巨大企業から、先程の話にあった「ガレキを受け入れて、国からカネをもらおう」と言う「ドブ板議員」まで、「原子力帝国」を構成する者たちの裾野が世界大に広がっている。先程の話の中で「敵を名指す」ということが言われていたが、そのような意味で、現在、敵の姿や輪郭をはっきりと捉えるということが、非常に難しくなっているように思う。

また、「3・11/12」以降の危機をどのレベルで考えたらいいかということ自体が非常に難しいことで、そこには、「被曝労働者」に象徴される労働の問題から、「食」の問題、子育てといった「生」の再生産の問題まで、つまり私たちの生きることの全体にまで及んでいる。

そのような状況をいかに突破するかという時に、今日の話の中で触れられていたような、自らの苦しみを経験がそのまま、原発現地の人々の苦難に「接続」といった、福島の女性たちの身の動かし方が一つの手がかりになるように思う。それは、また、私たち自身が「3・11/12」以降の自分たちの経験から、この世界のあり方にいかに「接続」するかが問われている、ということでもあるだろう。

日本政府はインドとも原発輸出に向けた原子力協定を結んでいるが、福島原発事故のニュースや映像に衝撃を受けて、インドではクダンクラム原発への反対運動が活発化している。そのように、日本での私たちの闘いが、インドでの反原発の闘いに直接的に影響するような状況がある。そのような意味で、私たちの側が運動的な想像力を世界大の視野でもつことが、敵側の世界大の裾野の広がりに対抗するための手がかりになるのではないかと、思う。

参加者B: 今の発言に引きつけて言うと、東京の「フリーター全般労組」の今年の「自由と生存の

メーデー」の集会の中で、「そろそろ、敵を名指そう」ということがテーマになっていたということを知り、何かの文章で読んだが、それは、敵の有り様を見定めなければならないという意識が、運動の中で徐々に共有されていることの一つの現れのように思う。

今日の話の中で取り上げられた「被爆労働を考えるネットワーク」は、「3・11/12」以降の原発運動の「潮流」の一つであると同時に、それは紛れもなく、「被曝労働」という「労働」の問題に関わるものであると同時に、労働条件の悪化や貧困の押しつけに反対する労働者の闘いの一翼を担うものでもある。

民主党政権の「自滅」後に再び首相の座についた安倍という人物は、一方で極めて排外主義的でナショナルな感情を「動員」することを精一杯やっているが、他方では、日本という社会空間をグローバル資本主義に売り渡すようなことをしている。以前、このような場で話してもらった音楽／社会批評家の平井玄さんは、現在の世界は2007年の世界恐慌後の「2週目の新自由主義」に入っている、と言っている。それをどう迎え撃つかというよりも、もっとはっきりと言ってしまうと、私たちは安倍と「無理心中」したくないということ、どのように運動的な表現にしていくことができるかが問われているように思う。その際に、原発の再稼働を阻止するという事は、間違いなく安倍に対する重要な闘いになるが、それだけで果たして充分かということはあるだろう。

2011年のアメリカ・ニューヨーク市でのオキュパイ運動の「私たちは99%だ!」という有名なスローガンがある。平井玄さんによれば、「2週目の新自由主義」というのは、1%の富裕層を5%に増やそうとするものだという事だが、そのために安倍は日本をグローバル資本主義に差し出そうとしている。それと同時に、今や凋落しつつあるアメリカの軍事覇権主義に進んで巻き込まれながら、それに飽き足りずに中国と事を起こしそうになるという危ういところに入ろうとしている。

私たちが安倍との「無理心中」を拒否しようとするならば、原発の問題だけではなく、沖縄の問題も含めた運動間の連携が求められるだろうし、ある課題を軸に一生懸命運動に取り組めば取り組むほど、もう一つ別の軸を据えることが必要な状況になってきているように思う。

そのような意味で、今後、日本の運動は、かなり際どく状況と「交差」するようになるところに踏み込みつつあると思うが、自分たちはどのような段階に来ているのかということを一方できちんと置かないと、いろんなことが見えなくなってしまうように思う。

参加者 G :今朝の新聞で知ったのだが、原発事故によって町全体が避難した福島県浪江町の馬場町長が町民たちの代理人となって、原発事故による被害への慰謝料の増額を「原子力損害賠償紛争解決センター」に申し立てる予定だということだ。そのように、原発事故から2年以上経って、自治体が住民の苦悩を受けて動き出すようなところにまで来たのかと思い、感銘を受けた。しかし、同時に、被災者住民の苦難を受けとめて動くというのは、福島の人たちだけにやらせていいことではないはずだし、それに対して富山の私たちは何をするのかという思いもある。

富山にも福島からたくさんの人たちが避難してきているが、そうした人たちが、本当に自分たちが富山で受け入れられていると思えているのか、気になっている。

福島の子どもたちを福島県外で受け入れて「保養」してもらおうということが富山でも行われてい

るが、そのことは、今日の話とも決して無関係ではないように思う。

報告者: 浪江町長の申し立ての話というのは、被災者一人一人への補償が進まないということに対して、町民たちの切実な思いを受けて行われたということは、間違いなくあるだろう。福島県は、原発事故の被災者の補償の問題に真剣に取り組んでいないし、それは政府も同様だ。結局、補償の問題は、東電と個々の被災者との問題にされてしまっていて、そこで補償の話がうまく進まなければ、「紛争解決センター」に申し立てればいい、ということにされている。しかし、東電は被災者を見捨てようとしているから、問題が起きないはずはないので、それを見るに見かねて、町長自身が身を乗り出さざるを得ないということが起きている。

そのように自治体が動かなくては補償が進まないということは大きな問題だが、その際に、自治体とは何かということ自体が問われているのではないか。浪江町では、「仮の町」として移住先をずっと探していて、それがなかなかうまく行っていないのだが、その際に、避難者を受け入れることを求められる側にも、問題は跳ね返って来ざるを得ない。そのように、避難者を受け入れるということは、そのことが可能になるように受け入れる側自身も地域のあり方を見直すことを求められるという意味で、地域自治の問題に大きく関わる問題であると思う。

参加者B: 今日の報告・提起の中でも原発事故の被災者や避難者への支援ということは全く入っていないわけではないが、問題のレベルが違うことを混同してはいけないように思う。

例えば、Aさんという女性が、原発事故によって放射能に汚染された地域から「自主避難」しようとする時に、家庭内に大きな波風や亀裂が生じざるを得ないが、それでもがんばって避難したという話はたくさんあるだろう。そのような話は、具体的な問題を具体的に解くしかないことであって、その際に、日本の反原発運動は、どのような段階に差しかかっているかと言ってみても、何の役にも立たない。そのことは、そのような大きな話とは無関係ということではないが、そもそも、問題が存在している平面が全く違うこととして捉えるべきだ。

それは、個々の具体的なケースのことを考えれば、運動的な大きなレベルのことを考えなくてもいいということではないし、その逆に、大きな話を考えれば、個々の具体的なケースなどどうでもいいということにはならない。実際に放射能汚染地帯から避難するかどうかといった極めて具体的な問題は、具体的にそのレベルで解くしかないことだ。ただ、そうして具体的に解いていったことが、どのように「蓄積」されていくか、という問題はあるだろう。そのような「蓄積」がどう行われるかというところで、先程から言ってきたような大きな運動的な状況との「接続」が生まれてくることになるように思う。そのレベルを混同してはいけないと思うし、運動的な状況を大きく語れば、個々の具体的なレベルのことを考えなくてもいいと言っているつもりはないので、そこは誤解のないように言っておきたい。

先程から何度か取り上げた矢部史郎さんという人は、けっこう乱暴なことを言っていて、彼は「福島は、すべからず『復興』させるべきではない」と言っているが、そのような発想はある意味ではよく分かるし、自分もそう思うところがある。ただ、そのようなことを言うと、どうしても、「逃げられ

る人はいいですね」といった話になってしまっていて、そこで行き詰まってしまうことになる。それはあまり意味のないことであって、避難するかどうかというのは、膨大なディテールを伴って、ある一家に避けがたく迫ってくることであって、それをどうするかというのは、その一家にとって毎日の切実な判断としてある。そういうレベルが現実的に存在していることを忘れてはならないように思うが、ただ自分がそういうことだけで動けばいいかという、そうは思っていない。

つまり、それぞれの人がどのように動くことができるかというのは、それぞれ条件が違うことなので、そういったレベルを混同した論議をするのは、非常に不毛なことのように思うが、そこがまだ運動の中でのきちんとした「前提」にはなっていない、ということがあるように思う。

参加者H:このような場の話し手として来てくれた松本麻里さんという、「生」の再生産に力点を置いたユニークなフェミニズム論を展開している人がいるが、現在の状況の中で彼女の言っていることに、とても刺激を受けている。

先日、新聞で、安部首相が、「日本の技術力でトルコに『世界一安全な原発』を輸出する」と言っている記事を読んだが、結局、そうした「安全神話」によって、東北や関東地方での深刻な放射能汚染の実態が隠蔽され、放射能による健康被害を心配すること自体が「タブー視」されるような状況が生まれている。

そのような状況に対して、松本麻里さんが「放射能が怖くて当たり前だ、皆でもっと『怖い』と言おうよ」と堂々と主張していることが面白いと思うし、とても元気づけられる。

参加者B:「怖いから逃げようよ」ということ自体が、「拒否」ということの一つの出発点であって、そこから、例えば、自分の住んでいる場所の周辺の放射能を「自主計測」といったことも派生してくる。

松本麻里さんは、「No Nukes More Feminism」というブログを主宰しているが、反原発運動の中で、フェミニズム運動に関わっている人たちの間で、「子どもを放射能から守れ」といったように「母性主義」を持ち出すことでいいのかという論議が以前からあって、その問題は、「3・11/12」以降の反原発運動の中でも残り続けている。ただ、その際に、「放射能が怖い」ということを出発点にしてどこまで行き着くか、ということはあるだろうし、そのことが「前線」化するという可能性は全くないとは言えない。

今は、「3・11/12」以降の反原発運動の中のどの運動が一番可能性があるかというよりも、それぞれの運動がエネルギーを徐々に蓄積しているような段階であって、そこからどのように運動が展開されていくのかというのはまだ誰にも分からない状態なので、そこはあまり早く結論を出したり、見切ったりしない方がいいように思う。

矢部史郎さんは、「放射能が怖い」ということは、日本に「革命」をもたらすことだと言っている。つまり、再生産労働を担っている女性たちが放射能を怖がり、「ゼロベクレル」にこだわり続けることの中で、「生」の再生産を脅かす者たちへの怒りを抱き、再生産労働を含めた現在の資本主義を維持するための労働を「拒否」ということが、既存の社会秩序を「突破」することへの有力な

通路になるだろう、と彼は言っている。

もちろん、その時に、「被曝労働」の問題をどうするかということは残り続けるだろうが、「放射能が怖い」ということでどこまで突き進めるかということは、そのように論理の筋道を立てて考えるべき面と、具体的に個々の人の動きとして一步一步どうするかと考える面との両方があるように思う。とにかく、どの運動にしても、最大限、やれるところまでやってみてどこまで行き着くのか、ということだろうと思う。

先程、「避難」をめぐる話をしたが、同様のことは、沖縄の運動についても言えるように思う。沖縄の人たちの全てが「ヤマト国家」からの「自治／自律」に向かって一枚岩になっているということではなく、今でも米軍基地内で作業する労働者はたくさんいるし、それこそ、基地の周辺の飲食街で働いている女性たちも多い。反基地運動をどのように進めていくかということの一方で、そのような女性たちとどのように出会って、その問題をどこで解くかということが、沖縄の運動にとって長年の大きな課題としてある。

つまり、日米安保体制の下で沖縄はどこに向かうのかということの傍らで、基地周辺の飲食街にいる女性たちがどのような「痛み」を背負っているか、ということがずっと解かれずに残り続けているのだが、そのようなことは、いろんな形でどこにでも現れているように思う。

運動を大きく展開していこうとすれば、どうしても一人一人が抱える問題は視野に入らなくなるし、逆に、そうした具体的な問題を考えようとすると、大きな話をしても意味がないというようになりがちだ。しかし、そうしたレベルの違いを区別した上で、それらの問題をどのように「接続」していくかということが、現在の運動が更に大きな力を獲得していくために、切実に問われているように思う。

I - b 沖縄における「拒否」の累積 ——〈前〉線から前線へ——

アンラーニングプロジェクト・2013 第3回(2013.6.30)

1. 沖縄にある「拒否」の〈前〉線——当日の提起・報告から

1, 「繰り返し変わる: 沖縄における直接行動の現在進行形」——この微妙な言い回しの意味は？

今日は、『拒否』の〈前線〉をさぐる』ということで、沖縄における直接行動に注目していきたいと思います。

琉球大学の教員の阿部小涼さんという人が「3・11」の前に書いた「繰り返し変わる: 沖縄における直接行動の現在進行形」という文章がありますが、彼女はその少し前に「海で暮らす抵抗」という文章も書いています。今日は、この二つを主にベースにして話そうと思います。あまり深いことや、詳しいことは話せないかもしれませんが、逆に言えば阿部小涼さんの書いたものを紹介することで、かなりざっくりと大づかみに沖縄における「拒否」の〈前線〉の在り方がつかめるのではないかとも思っています。

さてこの「繰り返し変わる: 沖縄における直接行動の現在進行形」という題名は、なんだか微妙な言い回しになっていると思います。「変わっている」のに「繰り返している」、あるいは「変わる」ことが「繰り返されている」のか、本当の意味はしっかり私もつかめませんが、イメージするときのヒントとして、私を取り上げたいのは、二つの写真です。お手元の資料に、1955年伊佐浜闘争で座り込みをする農民の写真と、現在の高江や辺野古の座り込みの写真があります。「座り込み」という在り方としては、繰り返しているけれども、感じが違うなあと思います。「繰り返し変わる」というのは、例えば、このように二つの写真を並べてみて分かるようなことなのかなと、自分ではイメージしています。

2, 「座り込み」で「拒否」の〈前〉線へ

今日は、『拒否』の〈前〉線をさぐる』ということで、沖縄における直接行動に注目していくことになるのですが、率直に言うと、私がとても興味を持っているのは、「座り込み」についてです。『拒否』の最〈前線〉は沖縄にあり』ということと言うと、基地の前で座り込むという行為自体が、権力の中枢部に肉薄することになる。沖縄では、「座る」ことが日米の権力の

有り様をむき出しにしてしまうという意味で、そのことが『拒否』の最〈前線〉」になっているように思います。そういう意味では、「拒否」を身体で表現しているのが、沖縄の人々ではないか。これまでも、身体を張った「拒否」を、沖縄の人々はずっとしてきました。その累積が、日米の権力にとって無視しようがないところまできていて、日米同盟の足下にまでその「水位」が上がってきている。

今年 10 月の「アンラーニング・2013」の話し手として迎えることを予定している武藤一羊さんは、「沖縄は、今や、権力中枢部への『進駐』を果たしている」と言っているそうです。沖縄では長い抵抗の歴史があつて、それが人々の背中を押して、現在の闘いのあり方に繋がっている。今日の資料の2ページ目に見取り図のように描いているのですが、沖縄戦の悲劇がベースにあり、その上に 50 年代の「銃剣とブルドーザー」と言われる米軍による土地の強制収用があるわけですね。そして、それに対する「島ぐるみ反対闘争」がある。そういうことが底流にあつて、現在の辺野古や高江に繋がる闘争が再燃するきっかけになるのが、1995 年の米兵による少女暴行事件です。

そのときの沖縄の人々の激しい怒りを何とか静めよう、ごまかそうということで、日米政府は「SACO合意」なるものを取り決めます。1996 年のその「合意」は、一応基地の整理・縮小を進めると表面上は言っていますが、実は、アメリカの世界戦略上の変更に合わせて基地機能の強化でした。その「SACO合意」後の 10 年間を、沖縄の運動では「失われた 10 年」と呼んでいるそうですが、その中で、辺野古への基地移設反対運動や、高江のヘリパッド建設反対運動が沖縄での象徴的な「拒否」の運動として存在感を増していきます。

先程も言ったように 1995 年に複数の米兵が小学生の女の子に暴行するというおぞましい事件があり、そうしたことがそれまでに何度も繰り返されてきて、もう耐えられないということで、人々の不満が爆発し、県民総決起集会には 8 万 5 千人もの住民が参加しています。それを機に沖縄では住民投票が行われ、日米地位協定の見直しと基地の整理・縮小の是非を問いました。住民投票では、日米地位協定の見直しと基地の整理・縮小に対する賛成票が過半数になり、本来なら、そうした投票結果をそのまま政治に生かすべきなのに、生かせなかった。また、1997 年の 12 月、名護市でも住民投票があつて、普天間の移転先を辺野古の海上とする案について過半数が反対したのですが、当時の市長はそれを政治に反映させなかった。そこから辺野古では、「命を守る会」が座り込みを開始して、現在に続く「座り込み」が始まったわけです。

そのように、1995 年の「米兵少女暴行事件」を引き金にして、96 年の「SACO合意」に対する不満や、「もう『飴と鞭』にはだまされないぞ」、「『基地縮小』だとか言うが、実際に日米政府がそうするはずはない」という声が高まり、沖縄の人々はその頃から怒りを大きく表すようになっていきました。そうした状況の中で、辺野古での普天間移設反対運動が始まったわけです。高江でのヘリパッド建設反対運動が始まったのは 2007 年からですが、その頃、高江にヘリパッドを建設するという話を米軍がもってきたそうです。なぜ高江なのかということには米軍は答えないのでよくわからないのですが、「SACO合意」からほ

ば 10 年たった後に高江を狙い撃ちしてきたということです。そのように、辺野古の反対運動に続いて、高江でも反対運動が起こるのですが、その二つの闘いが、「SACO合意」以降の象徴的な直接行動として沖縄では位置づけられることになっていくのです。

3. 沖縄「座り込み」考

ここで少し「座り込み」という行為について考えてみたいと思います。今日の資料に「座り込み考」と書きましたが、「座り込み」というのは、第一に、「生活しながらそこに居続ける」ということで国家の暴力に対峙するという意味で、国家の暴力に日常性を対置するというラディカルな闘い方ではないかと思います。それから二つ目に、「座り込み」をやめさせようとする時に権力側は「ごぼう抜き」をするわけですが、その際に抵抗する側の被害者性が強調される。「座り込み」自体は、現行法をある意味では逸脱しながらというか、一種の「グレーゾーン」のところで身体を張っているわけだけれども、相手側に「ごぼう抜き」をさせることで、法を逸脱して座り込んでいる方が見た目には「被害者」になり、権力の側が「加害者」になる。そういうスペクタクルを構成できるという利点がある。それから三つ目に、「非暴力不服従」の形をとりながら、見えない暴力を可視化することができる。そのように、座り込むことで相手側の暴力性を明らかにできるわけですし、座り込む場所で、こちら側と権力側が対峙する際の境界線がどこにあるのかを明確に可視化させられるわけです。

では、その「座り込む」という行為の身体性はどこから来るのでしょうか。それは、まず沖縄で言えば、「銃剣とブルドーザー」で農地を奪われた阿波根昌鴻さんらの行動様式からきている面があると思います。資料の 2 ページ目の阿波根昌鴻さんのところを見てください。これは、インターネットで検索して拾ったのですが、辺野古のテント村には、阿波根昌鴻さんのパネルがあるそうです。該当部分を読んでみます。

■阿波根昌鴻さんと島ぐるみ闘争

・非暴力の抵抗

新基地建設に反対する辺野古のテント村にやさしいまなざしで空を見上げる老人の写真パネルがある。2002 年、101 歳で亡くなった阿波根昌鴻さんだ。阿波根さんは伊江島に農民学校をつくるため求めた土地を米軍に奪われた。阿波根さんはじめ米軍に土地を奪われた島の住民は土地を取り戻すため非暴力で米軍に立ち向かっていった。阿波根は闘いの中で、中心的な役割を果たすようになり、いつしか「沖縄のガンジー」と呼ばれるようになる。阿波根さんは亡くなる直前まで土地を取り戻し農民学校をつくる夢を捨てなかった。

2005 年、防衛施設局は辺野古の新基地建設をすすめるため実力行使に出る様相を見せ始めた。それを阻止しようと辺野古の海岸にテント村が建てられた。阿波根さんのパネルはそのころからテント村に置かれるようになった。

阿波根昌鴻さん

阿波根昌鴻さんは 1901 年旧本部村(現在町)で生まれた。生家は貧しかったが父親を説得し、県立嘉手納農林学校に入学した。数ヶ月後、健康を害しやむなく退学、大分県別府で療養した。病気回復後、東京で進学する夢をもっていたが、関東大震災が起き、東京行きを断念した。帰沖して伊江島に渡り商業を営む。1925 年、24 歳の時、島で見初めた喜代と結婚した。間もなく移民募集に応じ、身重の妻を残してキューバへ出稼ぎに行く。その年の 10 月、長男昌健さんが誕生した。阿波根さんは稼ぎの悪いキューバからペルーへ渡った。阿波根さんは細めに仕送り手紙を妻と息子の元へ送ってきた。1934 年、33 歳のとき、帰沖する。

その後、静岡県沼津市にあった興農学園で農業を学び伊江島に帰る。阿波根さんには夢があった。デンマーク式の農場をつくることだった。喜代と共に働き、島の西側に土地を求めていった。息子の昌健さんは農民学校の先生になるため、八重山農林学校へ進学した。

1944 年5月、島に東洋一と呼ばれる飛行場建設が開始され、最愛の一人息子昌健さんも徴兵された。

1945 年4月 16 日、米軍が島に上陸、一週間に渡る激しい攻防戦が展開され、島の住民 1,500 人が犠牲になった。阿波根さん夫婦を含め、生き残った 2,500 人は米軍によって慶良間諸島へ強制移住させられた。最愛の息子昌健さんは沖縄本島で戦死し、還らぬ人となった。

阿波根さんらの帰島が許されたのは2年後だった。破壊しつくされた島に新たに米軍の滑走路が完成していた。

陳情規定

1954 年6月、米軍は真謝区と西崎区の住民四戸の農民に立ち退くよう命令してきた。米軍は「農耕は自由にさせる、補償もする」と言っていたが、射撃演習の目標を作るため作物はブルドーザーで潰され、植え付けしたばかりの畑は焼き払われた。しかも、補償はわずかだった。9月にはさらに 152 戸に立ち退き命令が出された。中止の陳情を琉球政府へ何度も行ったが、まるで無力であった。米軍はあらゆる手段を使って住民に圧力をかけてきた。そこで、住民は 11 項目からなる陳情規定を作った。

「陳情規定」

- 一、反米的にならないこと
- 一、会談のときは必ず坐ること
- 一、集合し米軍に対応するときは、モッコ、鎌、棒切れその他を手を持たないこと
- 一、耳より上に手をあげないこと(米軍はわれわれが手をあげると暴力を振るったとって

写真をとる)

一、人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に優っている自覚を堅持し破壊者である軍人を教え導く心構えが大切であること

(中略)

右誓約いたします。

1954年11月23日

真謝、西崎全地主一同

その後も米軍は何度も来島し、立ち退きを迫ってきたが住民は米軍との話し合いを続けていった。

1955年3月、とうとう米軍は実力行使に出た。完全武装した米兵約300人が上陸、村長は軟禁され、止めようとした住民が拘束され嘉手納の軍事裁判所に連行された。米軍は力づくで住民を家から引きずり出し、ブルドーザーで家を破壊し、焼き払い、土地を奪った。阿波根さんの土地も奪われた。

米軍が決めた立ち入り禁止区域に入り農耕した農民が米軍に捕らえられ軍法会議にかけられた。家を破壊されテント生活を強いられた妊婦が餓死した。

「乞食行進」

1955年7月、真謝区民大会が開かれ、この惨状を全県民に訴えることを決定した。「乞食をするのはずかしい。しかし、我々の土地を取り上げ、われわれに乞食をさせる米軍はもっと恥ずかしい」とプラカードに書いて「乞食行進」を始めた。はじめは乞食、托鉢をするということであり、後に「乞食行進」と呼ばれるようになった。琉球政府前を出発し、国際通り、安里、開南を通過して糸満へ向かった。そこからさらに北上し、北部へ。行進は年が開けて二月まで続いた。

島では土地を奪われた住民と米軍のせめぎ合いが続いた。住民は柵内耕作を強行し、耕作地への通行証の受け取りを拒否した。通行証を受け取れば土地明渡しを認めるとになる。米軍が立てた「立ち入り禁止」の立て看板を引き抜き、「地主以外の立ち入り禁止」の看板を立てた。米軍が張り巡らした金網も撤去した。住民の逮捕、投獄は続き、米軍による蛮行や事故による犠牲者も出たが、住民はひるまなかつた。米軍は徐々に立ち入り禁止区域を後退させていった。

以上『けし風』51号(2006年6月23日 沖縄フォーラム刊行発行)より転載

このようなことが、沖縄の座り込みの歴史の中に息づいていると思います。資料の2ページ目に今日の話の冒頭で触れた「1955年伊佐浜で座り込み要求する農民」とキャプションをつけた写真がありますけれども、これは、伊江島闘争と同時期に連動して闘われた伊佐浜闘争での写真です。座り込んでいるもんぺ姿の女性たちの後ろに白い布に筆と墨で

「要求項目」が書いてあり、読んでみると「一、我々の承諾なしに取り上げた土地を直ちに返すこと」とあります。そういうことを、美しい行書体で書いています。そしてこの座り方が、きちんと正座しているんですね。これを見ているだけで、なんだか涙が出てきそうになりますよね。さらに阿波根さんたちの「陳情規定」では、「物を持たない」だとか、「耳より上に手を上げない」「座って話をする」というようなことを自分たちで自主規制して決めながら、毅然とした態度で話し合いを続けようとした。そうするしかなかったという歴史なのです。

自分たちの土地が奪われたことへの抗議行動を「乞食行進」と名付けて、その中で「乞食をする我々は恥ずかしいけれど、米軍はもっと恥ずかしいことをしている」と訴えていくことで、それがやがて全島的な「島ぐるみ闘争」へと火をつけることになっていったのです。米軍によってすべてを奪われながらも、自分たちはそれでも生きているんだ、当たり前のことを言っているんだぞ、ということだけを毅然として全面に出していくという、そういう「座り込み」のスタイルが、沖縄にはあったのです。沖縄の場合には、闘いの縦軸にこういう歴史が刻印されているのです。それが、辺野古の海岸に阿波根さんの写真が貼られていることの意味なんですね。

ついでに「座り込み」ということで考えたことをもう少し言うと、資料の最後のページに普天間基地を上空から写した写真があります。宜野湾市の真ん中にある普天間基地は、沖縄戦のさなかに、米軍が「本土決戦」に備えて造ったものです。旧日本軍の基地を接收した日本本土の米軍基地とは成り立ち方が違って、米軍が日本本土に爆撃機を飛ばすための飛行場を造ったわけです。普天間基地は住民を収容所に隔離している間に米軍が住民に無断で造ったものですが、それは「ハーグ陸戦条約」に違反する行為であって、たとえ戦争中であってもやってはいけない、法的根拠を欠いたやり方だそうです。基地を造った最初がそうですから、今もそうした状態が継続しているわけなのですが、1951年にサンフランシスコ講和条約が結ばれたことを機に、米軍は自分たちが沖縄に基地をもつことの正当性を一方的に主張し、さらに70年以降は「日米安保条約」に基づく「合法」的な提供施設であると主張しています。

しかし、元々普天間基地の建設は非合法なのであって、そこに暮らしていた人を蹴散らして造ったものなのです。つまり、始めに危険な基地があってその周りに危険を承知で人が住みついたのではなく、その逆に、人が住んでいたところに無理矢理危険な軍事基地というものを割り込ませたわけです。写真では基地の周りにへばりつくように住居が見えますが、こう言ったら語弊があるのかもしれませんが、そんな風に基地を取り囲んで暮らしているという有り様は、ある意味で「座り込み」に見えないこともありません。沖縄での「座り込み」というのは、この風景に象徴されているように思いますが、そこには、このような沖縄の戦後史という「縦軸」があるということです。

4, 沖縄とアメリカで同時にあった「座り込み」

しかし、「座り込み」という行為は実は全世界的にあって、沖縄における「座り込み」も、横軸に目を転じてみると、そういうものと繋がっているようにも思います。例えば、阿部小涼さんは、沖縄での「座り込み」は、米軍基地の存在する世界各地での抵抗運動や、ポストコロナ的な運動と繋がっていると捉えています。それは、アフリカ系アメリカ人の公民権運動と「座り込む」という行為で繋がっているし、更には、ヨーロッパの各都市での「スクウォッティング」=空き家の「占拠」という生存を懸けた闘いとも繋がっています。また、それは、カイロのタハリール広場やニューヨークのズコッティー・パークを占拠した「オキュパイ運動」や、「大飯原発再稼働阻止闘争」といった福島原発事故後の原発現地での闘いなどとも繋がり、相互に呼応するような関係性をもつものだと考えていいように思います。

「座り込み」というのをウィキペディアで調べてみると、「市民的不服従を表現する有効な手段である」として、アメリカの公民権運動などでよく用いられたと書いてあります。公民権運動での「座り込み」というのは 1960 年代に多かったのでしょうか、実はすでに 40 年代から始まり、1950 年代には大きな盛り上がりがあったようです。つまり、沖縄で阿波根さんたちが座り込んでいたのと同時期に、アメリカ国内では、アフリカ系の人たちが公民権運動で「座り込み」をしていたということです。

アメリカの例で言うと、1957 年、ノースカロライナ州ダーラム市のアイスクリームパーラーで人種差別への抗議行動としての座り込みがあり、不法侵入として逮捕された男女 7 人は、その後、そこでの反人種差別闘争を象徴する歴史的な人物として称えられているそうです。また 58 年にも、オクラホマシティのドラッグストアで大規模な座り込みがあり、それが全米に知れ渡り、ドラッグストアでの人種差別は即座に撤廃され、その後数年かけてレストランでの人種差別が撤廃されていったということです。

当然、アメリカ国内のアフリカ系の人々の行動にも、その「縦軸」に重い歴史があったはずです。その重い固有の歴史を「縦軸」にもった者同士が、太平洋を隔てながら、東西で同時期に座り込んでいたわけです。どちらもその歴史の重さゆえ、身体表現としては、立ち上がりずに「座り込む」ことで抗議し、「拒否」しようとしたのではないのでしょうか。

5, 辺野古と高江の新しいスタイル

ちょっと座り込みの話が長くなったので、話題を戻します。辺野古と高江が「SACO合意」以降の沖縄における直接行動の象徴になっていくわけですが、その現代風なスタイルを阿部小涼さんは文章の中で紹介しています。どういうスタイルなのかというと、阿波根さんの志を継いでいるとは言え、ずいぶんその頃とは変わっている。これが「繰り返し変わる」ということなのだろうと思いますが、どんな風に変わっているのかというと、阿波根さんの頃の座り込みと違ってテントで座っているわけです。パイプ椅子に座っているのも「座り

込み」なのです。生活や日常性を持ち込むことで権力に対峙しているというところが特徴的だということです。

普天間基地の辺野古移設案は、最初は海岸に移設するという案だったのですが、海上移設案に変更されて、そのための海洋調査が行われようとした際に、それに対する反対の意思を、調査のための海上のやぐらの占拠・座り込みで表明した時期がありました。現在は再び海岸での基地建設に計画が戻っているのですが、「海上座り込み」は世界的にもとてもユニークなものだったということです。阿部さんは今 40 代半ばぐらいの年齢で大学で教えているわけですが、「海上座り込み」が行われていた頃に彼女が実際に辺野古に行ってそれに参加した時のことを、「海で暮らす抵抗」の中に書いています。

その中でおもしろいと思ったのは、「どのようにトイレを済ませるのか」ということが気になって仕方がなかったのだというくだりで、海上のやぐらに間に合わせの材料で「仮設トイレ」を作ってそこで用を足すということが書いてあります。男性であればその辺はあまり問題にならないのですが、逆にそういう日常的なことや、そういうことに対する感覚が大事なんだということを、彼女は強調して言っています。そのように、女性たちが日常性の感覚を大事にしなが、生活する者としてのたくましさ表現することで闘いを紡ぎ出し、民衆の日常を蹂躪する国家権力に対峙するというあり方を、その文章を読んで感じています。

高江での反対闘争が始まるまでは、辺野古の普天間移設反対運動が沖縄での直接行動の一つの象徴としてあったわけですが、10 年を超える闘いなので、代替わりしながらの、生活を懸けた重みはその闘いにはある。その闘いを続ける中で、個々の人がいろいろな問題を抱えながらやってきているんだということです。そこにはかつての「金武湾闘争」で沖縄中の活動家が権力に対峙して闘った流れを受け継ぐ人たちも来ているし、もちろん、それ以外の市民活動家や環境派の人たちなども一緒に組んで運動を作っているということです。その中で、「ジュゴン訴訟」というのをアメリカでやって勝訴したということがあったりするなど、辺野古の反対運動は、環境を守る闘いとしても注目を集めています。そういうユニークな闘い方をしていることが、阿部さんの文章で紹介されています。

辺野古での反対運動には阿部さん自身はあまり直接的には関わっていないのですが、高江のヘリパッド反対運動には深く関わっていて、2007 年から現在までずっと通っています。どうしても地域の運動では、元からの住民であるかどうかとか、土地をもっているかないかということが、運動が分裂するウイークポイントになりがちです。しかし、高江のヘリパッド建設反対運動は、土地の所有者が自分の土地を返せという闘いではないということもあって、そのようなことはあまり問題にならない。そもそも、古くからの地元の人以外に他の土地からの転入者が多く参加している運動なんだそうです。元々高江の住民は百数十人しかいないのですが、転入者をよそ者扱いするようなこともなく、互いにうまくつきあっているようです。

高江への転入者の中には活動家のような人もいるけれども、非正規労働者といった経済的基盤をもたない人たちや、ミュージシャン、バックパッカーなどが、自由に出入りしてい

ます。特定の組織が仕切っていたりするのではなく、座り込む者同士が親しくなって、「友情」やある種の「親密圏」を築いていくようなことが基になっている、そんな運動なのだそうです。阿部さんによれば、ヘリパッド建設に反対する「座り込み」の中で、互いにおいしいお弁当の作り方の情報を交換し合うなど、日常を楽しみながら活動しているということです。

高江には反グローバリズムの闘いに身を置いている人たちも来ているし、ミュージシャンといっても沖縄の地元の音楽というよりは、ジャズやロック、パーカッションの効いた曲をやっている人たちが来ていますし、サーフィンをする人たちもいたりします。そういうサブカルチャー的なイベントでミュージシャンを招いて演奏会を開いたりするというようなこともあるようです。また、高江はヤンバルの森の中にある部落ですから、そこにしかない特別な動植物が生息しているわけで、エコロジー的な関心や環境保護の立場からヘリパッド反対運動に関わっている人たちもいる。そのように、高江のヘリパッド反対運動では、いろいろな人と人との繋がりで「拒否」の意思を示し続けていて、今までとは違う闘いのスタイルが編み出されている。もちろん、そこでの闘いは阿波根さんの志(こころざし)と繋がっていることは間違いありませんが、闘いの中に日常性や文化が置かれているという意味で、今風の闘いなんだと思います。

6、「沖縄人はブルースピープルだ」

阿部さんの「繰り返し変わる：沖縄における直接行動の現在進行形」の文章の中で、2009年の琉球大学の学生による大学の「占拠」を非常に高く評価しています。それは、さほど人々に知られていない闘いなのですが、それをなぜ阿部さんが評価しているかというところ、そこに彼女の言う「繰り返し変わる」運動のあり方が象徴的に現れているのです。阿部さんは、琉球大学の学内「占拠」は辺野古と高江の直接行動に対する「オマージュ」だと言っていますが、それは、ネオリベ的「大学改革」によって、大学側が一切の説明なしに大学での語学カリキュラムを改悪したことに学生が抗議して行ったものです。「占拠」と言っても、大学の中庭の芝生の上にテントを張って一ヶ月間キャンプをしたという鷹揚なものなので、とても「拒否」の(前)線には見えないのですが、阿部さんは、そのことが、辺野古や高江の闘いと繋がっているし、また、世界各地の抵抗運動とも繋がっていると捉えています。彼女が、「同じでありながら変化していく」と言っているのは、そのようなことなのだと思います。

また、阿部さんは、沖縄における直接行動は「ブルースのように繰り返し変わる」という言い方もしていますが、ウェス・モンゴメリーというブルースのギタリストがいて、その人の「カリバ」という曲がいいんだと言っています。その曲は、ウイントン・ケリーという人のピアノとの掛け合いで演奏しているのですが、阿部さんはそれについて次のように言っています。

「そのソロの美しさは、ピアノによって決まる。一連の試行錯誤(ソロ演奏)に応答し、繰り返

返すように見えて旋律を少しずつ変更し、ずらし、ときにはテーマを先取るように提供しつつ、インプロビゼーションを解釈しようと試みる、そのような呼びかけと応答として聞き取ることができる。繰り返すことは、窓を開く試みなのである」。彼女は、沖縄の直接行動が「繰り返し変わる」というのは、その曲のようなものではないかと言っています。

阿部さんが「ブルース」を持ち出していることには、更に伏線があります。2008年に哲学者のコーネル・ウェストを沖縄に呼んだ時に、彼は、「沖縄人はブルースピープルだ」、「ブルースとは、悲惨な経験を歌詞に込めつつも、優雅さと気品を保ち続けること。権力があなたに襲いかかってつぶされそうだとわかっていても、現実と向き合い、笑顔を忘れず、反抗し戦い続けるやり方。それがブルースです」と語ったということです。阿部さんが「ブルース」に込めている思いは、そこなんだろうなと思います。

それから、「海で暮らす抵抗」の文章の中で、阿部さんが自分の研究テーマに即して言っていることで私がいいなと思ったのは、アフリカ系アメリカ人の"reparation"(賠償運動)に触れながら、沖縄の闘いについて語っている箇所です。彼女は、「単に奴隷制度から解放しただけではことは済んでいない。不払いで提供させてきた労働、身体、土地、共同体の破壊、歴史の収奪といった全てのことに対して償還すべきだし、自分たちは当然の支払いを要求しているだけだ」という、アフリカ系アメリカ人の賠償運動での主張を紹介しています。更に、阿部さんは、その主張を沖縄にも重ね合わせて、「沖縄は基地経済に依存して自尊心・自立心を失っているのではない。不払いの返済が十分でないだけだ」、「むしろ『まだ支払われていないのに、さらに犠牲を増やすのか』というべきなのだろう」と言っています。

アフリカ系アメリカ人の抵抗運動の中で、そのような賠償要求があるということです。自分たちの先祖がアフリカから無理矢理に奴隷として連れてこられて収奪されてきた歴史への「不払い」が現在も続いていて、それに対する「支払い」を要求するのは当然だということです。それはそのまま、基地建設のために住み慣れた土地を奪われ、人々が「生」の根本までも侵害され続けている沖縄の状況にも当てはまるし、そのことが何も解決されないまま、更にその上に辺野古と高江に軍事施設をつくらうとすることに対する沖縄の人々の怒りは当然なんだと、彼女は言っています。そういう認識が、今必要なんだと思います。

7、世界との「共時性」を感じることに

最後になりましたが、沖縄の運動を「縦軸」や「横軸」の関係で捉えたと、「縦軸」の関係には、阿波根昌鴻さんたちの闘いや、沖縄戦、あるいは「琉球処分」や、さらにはもっと先の時代から見ても、そこでの民衆の長い抵抗の歴史があり、その上に現在の沖縄の状況があると言ってもいいでしょう。「横軸」の関係で言えば、世界各地での抵抗運動と沖縄での「拒否」の〈前〉線との「共時性」、つまり、地理的に遠く離れてはいても、同じ問題を共有し、同時に闘っているという感覚が、沖縄の運動の中にあるように思います。

阿部さんは、民衆の「抵抗権」が勝利した事例として、オーストラリアの反戦活動家によるパイン・ギャップ基地への侵入及び通信施設暴露事件のことを紹介しています。オーストラリアがイラク戦争でアメリカに最も貢献したのはパイン・ギャップ秘密基地であると言われていたのですが、その米軍情報傍受基地の内部に反戦活動家が侵入して機密情報を暴露したことが、法廷で無罪判決を勝ち取ったのです。それは4人の活動家が行ったことなので、「パインギャップ・フォーの無罪判決」と呼ばれています。また、阿部さんは、自分が参加した辺野古での「座り込み」と、ニューヨークのハーレムでのアフリカ系の人々の占拠運動や、イーストハーレムのプエルトリコ系の人々の占拠運動とを重ね合わせて想起しています。その他にも、アメリカの自治領となっているプエルトルコのビエケス島で、2001年に米軍の軍事演習を中止させたということがあります。そのように、アメリカの軍事覇権主義に対する「拒否」の〈前〉線としてビエケス島と沖縄が繋がっている、といった運動の「共時性」を感じてもいいように思います。

また、阿部さんは直接触れてはいませんが、前にこのような場で、カリブ海のフランスの「海外県」のアンティール(アンティュー)諸島のマルティニック島のエドワール・グリッサンらの知識人たちが2009年に発表した「高度必需品宣言」について取り上げたことがあります。「高度必需品宣言」は、アンティューでのゼネストを全面的に支持すると共に、「食」といった基本的な生活必需品と高度な文化の享受を不可分のものとして要求しながら、制度的にフランスの植民地主義がなくなった後も継続している「ポストコロニアル」な状況からの「自立／自律」を宣言する非常に格調の高い文章です。そのような世界各地での「ポストコロニアル」な状況からの解放を求める思想・運動と沖縄での闘いと「共時性」や、また、とりわけ、台湾、韓国といった東アジアの民衆運動と、沖縄の人々の「拒否」の〈前〉線がどう繋がるのかということも、きちんと見ていかなければならないように思います。

それでは、ネット上で見つけたビエケス島の反基地闘争の記事を今日の資料に載せましたので、それを読みあげたいと思います。

基地はなくせる！...2003年...ビエケス...プエルトリコ...

プエルトリコはカリブ海にある米国の自治領です。そのビエケス島は1941年に米海軍の基地となり、様々な演習がおこなわれてきました。太平洋戦争が終わってからも、米軍が開発したナパーム弾、枯れ葉剤、劣化ウラン弾の最初の発射実験がおこなわれてきました。

島の主な産業は漁業でした。しかし、演習による損害に米軍は補償をしませんでした。失業率は50%にのぼり、珊瑚礁は破壊され、海は重金属に汚染されました。住民のガンの発症率はプエルトリコの他の地域に比べて27%も高かったのです。

爆音や健康被害に対する反対運動が60年にわたって展開されてきましたが、1999年に海兵隊の誤射によって住民が死亡するという事件がおこったのをきっかけに、基地撤退

の声がプエルトリコ全体に広がりました。プエルトリコ本島でも 10 万人を超す反基地デモが起き、ビエケス島では何百人もの人々が海軍の金網を引き倒す実力行使に出ました。

住民のこうした動きに対して、ブッシュ元大統領はこう言ったのです。

「住民に被害が出たし、住民は基地を望んでいない。代替地は米軍が後で探せばいい。」

こうして、ビエケス島の海軍基地は 2003 年に撤退し、フロリダに移転しました。

現在、この島は、海辺はリゾート地に、内陸部は野生動物の保護区になっています。

「住民に被害が出たし、住民は基地を望んでいない」——これは沖縄も全く同じです。それなら結論も同じであるべきです。「辺野古に代替基地を」などと言わずに、とっとと撤退すべきです。

あのブッシュが決断したことがオバマにできないということがあるのでしょうか。

(Days Japan 2010-10-03 | 沖縄) より

そのように、沖縄と全く同じ「軍事植民地」的な構造の中で虐げられながら、それと闘って米軍基地を撤退させたビエケス島に、沖縄の人たちは実際に出かけて行って交流しているんですね。そのように世界のいろんなところに行って米軍基地と闘う者同士が交流・連帯しようとするところに、沖縄の運動のグローバルな広がりを感じています。ヤマトの私たちにとっても、そうした「拒否」の「前線」が国境を越えて生み出されるような運動のあり方を構想することが、とても重要なことのように思います。

8、沖縄にある「拒否」の〈前〉線

最後に、阿部さんたちが始めた「合意していないプロジェクト」が目指すものについて、2006 年のその立ち上げの頃のことに触れた文章の中に書かれていたので、少し古いのですが紹介したいと思います。

合意していないプロジェクト者 【2006.2.15】

阿部さんは「合意していないプロジェクト」の企みを「想像力でつながる」として、次のように書き続けている。

……コンセプトは次のようなものだ。①今、可能なゼネスト。あるいはゼネストに向かうための思考を鍛える場を②完成された企画でなくてもよい、まず第一弾という気楽さ③非系統的、非中心的、非組織的な実践を、抵抗運動の再創造に④想像力でつながる。政治的意識の高まりは、見えにくいかもしれないけれど充滿している。それが政治的アクションにつながっていく、そのような新しい運動のかたちを模索しよう、その点での合意を頼りに動いてみようと考えた。

そして、この「合意していないプロジェクト」のもう一人の「仕掛け人」と目されている新城

郁夫さんが同年 12 月 10 日の琉球新報で、『合意していない』シンポジウムに向けて」という副題で「国家暴力拒否という選択」という文章を掲載している。

……沖縄のどこかにまた米軍ヘリが落ちて誰が死のうと、そしてこの沖縄の基地から飛び立っていく米軍という殺戮集団が、世界中のどこで誰を殺そうとも、それは国益に叶う、だから沖縄の人々は黙って被害に耐え続けろ、そういう恫喝を日本というこの野蛮な国は、国の名において沖縄に命じている。かかる時、沖縄に生きる私たちに、いかなる選択が残されているだろうか。黙って国家暴力の犠牲となる以外に、私たちに可能な生の選択はないのだろうか。

そして、新城さんは「ある、と私は考える。」と断言する。さらに「国家暴力を拒否するという選択肢が、私たちにはある。端的にしかも徹底して拒むこと、それは私たちの犯されざる権利であり責任である、と私はそう考える。」

「暴力」一般ではなく、「国家暴力」(ここでは米帝と日帝＝ヤマトがターゲットだ)と言い切るだけでなく、それを拒否することを自らが引き受けようとする清潔さが、この文章の白眉であろう。「国家暴力を拒絶し、ゼネストを構想する」とする、お二人とも 38 歳と聞く。(引用者註: 2006 年当時)

(「沖縄の自立解放に連帯する風遊サイト」より)

ここには「国家暴力」に対する「拒否」ということが、はっきりと出ています。「合意していない」というのは、明らかに「SACO合意」への批判を込めた言い方です。「SACO合意」以降、日米の権力者たちは、「合意」という言葉で、普天間基地の辺野古移設も含めた沖縄の「軍事植民地」的状态の更なる継続・強化に向けて、沖縄を恫喝しようとしてきました。しかし、沖縄の人たちにとってみれば、基地の撤去を求める自分たちの意思が全く考慮されていない以上、そのことに「合意していない」と言うのは当然のことでしょう。

今日の私の話にあるように、沖縄の「拒否」の「最〈前〉線」は、辺野古や高江にあると言ってもいいように思います。もちろん、沖縄では、辺野古や高江の闘いだけではなく、2011 年末の沖縄県庁での普天間基地移設に向けた「環境影響評価」の「搬入阻止闘争」がありましたし、2012 年秋、オスプレイ配備に対する反対行動として普天間基地のゲート前を沖縄の人々が 4 日間にわたって封鎖するという闘いが繰り広げられました。そのように、現在、沖縄では、「拒否」の〈前〉線が、いろんな形を取りながら厚みと広がりをもって生み出されつつあるように思います。

2. 「フリー・トーク」での論議から

以上のような報告・提起の後の「フリートーク」では、参加者同士で活発な論議や意見交換が行われました。その中の主な発言を、ピックアップして紹介します。

伊江島・伊佐浜闘争と日本本土の50年代の運動との関係を巡って

●先程の報告では、長い射程で、1950年代の伊江島闘争や伊佐浜闘争から、現在の辺野古・高江の闘い、更には、大学の講師の雇用打ち切りによって語学の授業が組めなくなるといった、ネオリベ的な「大学改革」を学生が実力で阻止しようとした琉球大学での「学内占拠」まで、沖縄での非暴力直接行動の闘いの連続性をたどり直してもらいました。「沖縄の人たちは、ブルースピープルだ」といった話も興味深かったのですが、この後の「フリートーク」では、報告の中で出てきたことを更に解きほぐしながら、ヤマトの私たちの側がそれをどのように受け止めるのかを考えあいたい、と思います。

●私より年配の人に聞いてみたいことなのですが、伊江島闘争や伊佐浜闘争というのは、当時の本土の人たちがそのことを聞いた時には、今の自分たちが聞くのとは少し違った「同時代性」の感覚があったのではないかと思います。

今日の報告の「合意しないプロジェクト」についての話の中で出てきた新城郁夫さんは、琉球大学で教える一方で、ヤマトと沖縄をめぐる独自の鋭い視点からの批評活動を行っています。彼は、「図書新聞」の今年の年頭のエッセイの中で、彼が観た「砂川闘争」の記録映画について触れています。その記録映画の中で、砂川闘争に参加した沖縄の人が、カメラに向かって、沖縄の反戦基地闘争と砂川闘争とのつながりをとつとつと話していて、そのように、「ただもう信頼の塊になって、なんのためらいもなく連帯を語って」いたことに心を打たれた、と新城郁夫さんは書いています。

例えば、伊江島闘争では、三池闘争の現場からたくさんの支援物資やカンパが寄せられたということですが、そういうヤマトの闘いと沖縄の闘いと連続性や近しさの感覚が、現在とは違った形で存在していた時代もあったのではないかと思います。福島原発事故後、この国の政府は、「安全キャンペーン」をふりまきながら、政策的に人々を放射能汚染地帯から逃がさずに囲い込もうとしています。それは、国策としての「死の強制」と言ってもいいように思いますが、原発自体が核兵器の材料であるプルトニウムの生産のために不可欠なものであり、軍事技術そのものです。

そのように、「3・11/12」以降の状況と、「軍事植民地」的状況の強制によって「生」の根底までも深く侵害されてきた沖縄の人々の状況とが根底のところにつながっているという感覚が、徐々に共有化されつつあるように感じています。そうした意味で、「3・11/12」以降、それまでとは違ったレベルでの沖縄との新たな運動的な「接続」の可能性が生まれつつあるように思います。その際に、日本がアメリカの占領統治下にあった50年初頭やそれからまだ間もない時期のヤマトの側の沖縄の闘いと「同時代意識」がどうだったかということを思うのですが、そのあたりのことはどのように考えるべきでしょうか。

●その話に入る前に一つ確認しておきたいのは、反基地闘争というのは、当時は別に沖縄だけに限ったことではないということです。50年代の日本の本土では、「反米」という感覚がアメリカの軍事基地の存在と結びつくものとしてあって、当時、そうした反米・反基地運動の流れがあったわけです。そうした流れは60年代に入ってから完全に無くなったのではなく、富士山麓の北富士演習場に対する忍草の女の人たちの反対闘争がありますが、50年代には、米軍基地に対する反対闘争というのは、本土にもそれなりにありました。

そうした「反米」という感覚はうまく伝えられないし、下手をすると変なナショナリズムに足をすくわれそうなどころがありますが、日本共産党は、当時の言い方では「民族独立」闘争路線をとっていたので、反基地闘争を反米・実力闘争として捉えることは、50年代の日本の運動にとっては特別なことではなかったのですが、そのところは一度きちんと振り返った方がいいように思います。

沖縄と本土との運動的な関わりということになると、どうしても労働運動を通じた沖縄の反基地闘争への連帯・支援行動を思い起こすことになりませんが、それはそれで長い歴史があるわけです。砂川闘争というのはむしろ60年に近い時期のことですが、50年代というのは、日本の社会運動全体が日本共産党傘下の運動という感じでした。富山から近いところと言えば、石川県の「内灘闘争」がありますが、それは結構長い間続いていました。

そういう意味で、1950年代の日本本土の運動の中で、反基地闘争は決して外せないものとしてあったのですが、そのことがあまりきちんと振り返られていない。

僕は、ちょうど砂川闘争が終わった年の前に大学に入ったのですが、砂川闘争が始まった頃から、全学連が日本共産党の支配下から脱していく流れが始まっていました。砂川闘争というのは、そのような見方をされていたと思うし、僕もそういう感じで見えていました。これは日本の運動の残念なところですが、50年代の運動に対する評価というのは、当時、誰が闘争のヘゲモニーを握っていたかによって最初から決まってしまうようなところがあって、「あれは所詮日本共産党がやっていたことなんだろう」といった見方になってしまう。そういう意味では、日本本土における反基地闘争の流れというのは、一度ちゃんと位置づけし直すことが必要だと思います。

50年代の運動の特徴として、一方では先程から言っているような反米・反基地闘争の流れがあり、もう一方では、「サークル運動」があります。「サークル運動」では、労働者が職場や地域に小さなサークルをつくって、自分の生活や労働のことを文章にするという、「生活綴り方運動」の労働者版のようなことを文化活動として行っていました。現在から見れば、反米・反基地闘争と「サークル運動」という全く傾向の異なった運動が同時に共存することは難しいように思いますが、50年代半ば頃まではそういう時代でした。それに対して、砂川闘争は、むしろ、日本共産党の支配下から学生運動が「自立」していく過程の中のことのようになっています。

新城郁夫さんが言及しているのは、戦前から活動していた日本の著名な映像作家の亀井文夫が撮った「流血の記録・砂川」という、米軍による土地の強制接収への反対闘争を記録したドキュメンタリー映画です。砂川闘争では、警官隊と学生が対峙しあっていた時に、学生が「赤とんぼ」の歌を歌うと、警官隊の方も頭を垂れてそれを聞いていたという有名な話があります。そのように、後の学生運動で機動隊と正面からぶつかるようになる頃とは少し違って、ある意味では牧歌的なところがまだある時代でした。しかし、同時に、「赤とんぼ」という歌は、日本の「プチ・ナショナリズム」というか、日本的共同体への「郷愁」を喚起することでナショナルな意識を促すというところがあって、そういう意味では、50年代の終わり頃は、「反米」とナショナルな意識とはまだ未

分化だったように思います。

その頃の沖縄では、「銃剣とブルドーザー」による米軍の圧倒的な暴力支配の下での必死の抵抗がずっと続いていましたが、そうしたことに対して、その頃、僕は特に本土の反基地闘争との「呼応関係」があるとは感じていませんでした。それは僕に限らず、本土の側の運動全体がそうだったと思います。

60年安保闘争の時に、当時のアメリカのアイゼンハワー大統領の来日の準備に向けて協議のためにハガティー大統領報道官が日本に来た時に、全学連の学生たちが羽田空港を取り囲んだので、やむなく羽田から米軍ヘリで脱出した「ハガティー事件」がありました。その時の集会のあいさつの中で、日本共産党のある幹部が、「アイゼンハワーは沖縄に逃げていきました」と言ったという有名な話があるのですが、そこからも伺えるように、沖縄は日本本土とあまり関係のない土地だという感覚があったように思います。その頃の日本の学生運動では「反米」的な要素は全くなかったと言い切っていいと思います。しかし、社共や総評に動員された労働組合の人たちの中には、ある種の「反米」的な意識は全くなかったということではなく、当時の運動では、その辺のことがきちんと意識化されていなかったように思います。

● 2011年夏から2012年初頭にかけて私たちが行った「沖縄セミナー」の中の連続学習会の一つとして、若手の研究者の大野光明さんを迎えて、沖縄の運動に対するヤマトの側からの「連帯の軌跡」について話してもらいました。ちょうど1972年の沖縄「返還」前後の時期がベトナム戦争が激化した頃でもあったのですが、ベトナム反戦運動を通じて、沖縄とヤマトの運動との距離が一举に縮まった時期があったように思います。そのように、当時、戦争への「荷担」を拒否するには、沖縄の人たちとの連帯を創り出さなければならないという切実な問題意識や、沖縄の人々と共に「敵」に向き合っているという感覚があったと思います。そうした感覚が現在、改めてどのように成立しうるかと思うところがあって、今のような質問をしてみました。

そのような問題意識や連帯感は、運動の中で「繰り返し変わり」ながら形成されていくもののように思います。それは時には運動間での意見の違いや対立を伴うことでもあると思うのですが、そのあたりのことが、今回紹介された阿部小涼の文章では、少し滑らかに語られてしまっているように思います。

阿部小涼さんの斬新なところは

●今日の報告を聞いて、阿部さんの沖縄の運動の捉え方は、自分の古い認識のパターンとは違って非常に斬新なものだという印象を受けています。その斬新さの中身について少し言うと、阿部さんは、研究者としてプエルトリコといったカリブ海地域のことを研究テーマとしていますが、彼女は、そうした地域での「ポストコロニアル」な状況に対する抵抗という視点から沖縄の運動を見ているように思います。沖縄の問題を世界的な視野から大きく見ようとする時に、どうしても、アジア、とりわけ東アジアとの歴史的・政治的な関係や共通性で捉えるという傾向が強くあります。しかし阿部さんの場合、そのことについて全く触れていないわけではありませんが、どちらかと言えば、カリブ海地域での米軍基地に対する反対闘争や抵抗運動が「参照枠」になっていることに、新鮮さを感じました。

●阿部さんの文章の中では、阿波根昌鴻さんのことは何も書いていなかったのですが、それは

今日の報告に際して自分で補足しました。新川明さんたちの「反復帰論」のことは、「思想運動」として取り上げられていて、彼らを「アナキスト」として紹介しているんですね。沖縄での抵抗運動の歴史については、阿部さんは、そんなに詳しくは言っていません。ただ、「沖縄戦からずっと占領状態が続いている」ということは、阿部さんの文章の冒頭で言われていて、そこから話が始まってはいます。全体としてはその辺のことにはあまり言及せずに、今、言われたような、アメリカでのアフリカ系の人々の運動や、カリブ海の島々での運動と重ねて言おうとしているのが特徴です。

●僕がもう一つ新鮮に思うことは、「沖縄セミナー」などでは、どちらかという、いわば、「大文字の『拒否』」ということを問題にしてきたと思うのですが、それに対して、阿部さんは、「小文字の『拒否』」ということに注目していて、今回の報告は、そこをちゃんと踏まえていたように思います。つまり、「座り込む」というあり方の中で生み出される「拒否」ということの中に、「歴史性」もあれば、世界各地の運動との「共時性」もある。歴史が繰り返し、深いところで現在に繋がっていることがよく分かる。そのことを問題にしている阿部さんのいるところが、地面の上の何十センチ、つまり、そのように座り込みをしている人たちのポジションから、「拒否」ということを考えようとしているように思います。

残念ながら、欺瞞的な沖縄「返還」を沖縄の人たちが突破できないという状況の中で、「反復帰論」という思想的営為が鮮烈な「きら星」のように登場したことがその後どのように持続していったのか、という関心で、自分としては沖縄の運動に注目してきたということがあります。そうではなく、もっと人々が実際に生きている現場や、平面にまで降りたった地点で考えるべきではないのか、という問題提起として受けとめながら、今日の報告を聞いていました。そういう意味で、とても新鮮に感じたわけです。

●阿波根昌鴻さんのことが、今日の資料では3ページにもわたって紹介されていますよね。今日の報告では、とりわけ、「座り込み」に着目していましたが、なぜそのことが重要なポイントだと考えるようになったのですか。

●私は、阿波根昌鴻さんのことは最初はほとんど知らなかったんです。自分の場合は、思考の向きが逆なんですね。今、指摘があったように、確かに、阿部さんの視点のユニークなところは、沖縄の闘い固有の歴史性というよりは、むしろ、世界との「共時性」を見ようとしているところだと思います。私はそこのところは比較的よく分かるのですが、逆に沖縄での抵抗運動の歴史をほとんど知らずにいたんです。けれども、「繰り返し変わる」ということの意味を考える際に、そこをきちんと見なければ、沖縄の運動を本当に理解することにならないだろう。そう考えていた時に、直感的に、「座り込む」という闘いには、意思表示のすべをすべて失った時に、抵抗の意思を表すためにはもうそれしか残されていないといった意味が込められている、と感じたのです。そうした視点から見えていった時に、沖縄での抵抗運動の軌跡の方へ関心が広がっていったわけです。しかし、実は、阿部さん自身は、あまりそこのところは言っていないのですが、恐らく、そこにあまりこだわると話が重いものになるという気持ちがあるのではないかと思います。

阿部さんの文章の中で、世界の運動の中のある種の「祝祭性」と、固有の歴史性をもつ沖縄の運動がどのように「交差」するのかと自問自答している部分もあって、彼女がそのような問題意識をもっていることは間違いない。その上で、自分の研究テーマとも重なるということもあるのです。

ようが、世界の運動との「共時性」の方に彼女はより注目しているように思います。

それと併せて、私が面白いと思ったのは、阿部さんが実際に運動の現場に足を運んでいることです。高江にはかなり軸足を置いているようですが、辺野古についても、『『海で暮らす』ってどういうことなのか』とおそろおそろ行ってみたら、こういうおおらかなところだったんだよ』というように表現したいという思いが伝わってくるわけです。そういった今時の運動者のあり方と共通する雰囲気、彼女の文章自体がもっている。彼女の語り口は軽快で、開放感を感じさせるものです。

阿部さんの書いたものを読んでいると、虐げられた現状を抉り出すというよりも、きちんとした現状認識を経た上で、変革の可能性の萌芽について書かれていることが多いように思います。

ビエケス島では住民の反対で実際に米軍の軍事演習を中止に追い込んだこと、オーストラリアやイギリスでは、市民活動家が基地に侵入して米軍の重要な秘密情報を持ち出しても、「人々の『生存権』に関わる重大なことだから、無罪にする」という判決が下ったということがあったことなどを、さらにと紹介しています。ほんの少しずつのことなんでしょうが、それらを大事につなげていくことで、国家の暴力というものに民衆が対峙して、世界中で基地を逆に包囲しているというイメージを私たちに与えてくれるように思います。

●米軍基地を撤去させたビエケス島の闘いのことは今回初めて知ったのですが、フィリピンでスービック基地がなくなったのは、別の理由なのですか。あれはフィリピンの人たちが「出て行け」って言ったんでしょう？

●フィリピンでは、マルコス政権が「ピープルズ・パワー」で打倒された後に選出されたコラソン・アキノ大統領が、「外国軍駐留の原則禁止」を掲げる新憲法を制定し、クラーク空軍基地とスービック海軍基地がフィリピンに返還されたという経緯があります。その後、かつてのスービック基地の敷地の中に工業団地が建設されたということをどこかで読んだ記憶があります。

●アメリカとフィリピンとの関係は、アメリカの世界戦略の中で大きく変わって行かざるを得ないわけで、クラーク基地やスービック基地がなくなったことには、米軍がフィリピンに基地を置くことが必ずしも必要ではなくなったという事情もあったように思います。沖縄について言えば、米軍の世界戦略の中での沖縄の位置が相対的に下がるのではないかと思われた時期が、1990年代初頭の冷戦終了後の一時期ありました。しかし、その後すぐに中国が台頭してくるということがあって、アメリカの軍事戦略が、中国の存在を組み込んで改めて練り直されたということが、現在の沖縄での基地問題の背景にあります。

●結局、阿部さんの斬新なところは、先程からの話で出ているような「座り込み」をする人たちからの「視線」や、運動の世界的な「共時性」といったことの他に、「ヤングジェネレーション」であることだと思います。沖縄の運動でも世代的な違いがあり、僕らが知っている人で言えば「沖縄セミナー」に来てくれた仲里効さんは、ある意味では、古い世代の最後の人のように思いますが、阿部さんや新城さんは、その後の世代の人なんですね。そのように、世代によって、沖縄の運動に対する見方や視点がかなり違っているという印象を受けています。

軍事活動と警察行為とが互いに近接

● 国家の暴力の最たるものである「軍事」ということが私にはあまりリアルには分かっていないのですが、阿波根昌鴻さんの闘いを紹介した箇所では、そうした国家の暴力性が露わになる瞬間があったことがよく分かりました。そうしたことは、日本本土でもあって、北富士演習場もそうですし、私たちの近くのこととしては、内灘闘争では、北鉄の労働者が果敢に闘ったということを聞いています。そういった国家の暴力性が最も露呈する軍隊に対して、阿波根昌鴻さんが「無抵抗の抵抗」という闘いを突きつけたということに、私は感銘を受けました。

● 50年代というのは、冷戦体制が始まる時期でしたが、冷戦体制下と「冷戦」後の軍事では、米軍の世界戦略が違いますから、沖縄であれ日本本土であれ、戦略上の位置が違うわけです。そういう意味で、沖縄で普天間基地の移設問題が浮上してくる時期というのは、そういった冷戦体制と「冷戦」後との境目のところから始まっていますが、そのように、沖縄での米軍の動きの一つ一つが世界のその時々的情勢と非常に密接に結びついている。軍事というのは、まさに国家権力の最大の暴力装置であるが、冷戦体制後の世界レベルでの軍事行動の展開というのは、むしろ、「警察」行為としての意味合いがずっと強くなっていて、軍事というのは世界的な規模での警察的な監視・「取り締まり」行動になってきている。そのように、軍事活動と警察行為とが非常に近接しているような状況があります。

沖縄の反基地運動の抱える難しさ

● 私が沖縄へ行ったときのことを少し話すと、高江はすごく交通の不便なところにあってその時には行かなかったのですが、辺野古はもう少し行きやすいとはいえ、それでも那覇からバスで2時間半もかかるような遠いところにありました。私が辺野古に行った時は、ちょうど台風が来る直前の時期で、海岸のテントが撤去されていたのですが、海岸から少し離れた場所にある「監視テント」で少し話を聞きました。今日の資料の写真にあった「座り込み何千何百何十何日目」という看板が、「監視テント」の前に立っていました。辺野古というと海洋調査のやぐらでの座り込みのイメージがあって、もしかするとそういうところに行くこともあるかと思って海水パンツも用意していたのですが、やぐらはすでに何年も前に撤去されていました。

辺野古の「監視テント」は、ある種の「通い」の運動というか、海の近くの空き地にテントがあって、名護市から通っている市民運動グループの人がそこの運営を中心的に担っていました。その中に、高江での運動にも関わっている人がいて、高江の座り込みの写真を見せてもらいました。

ところがそこは別にもう一つ、辺野古現地の人たちの「反対小屋」があるのですが、監視テントを担っている市民運動グループの人たちと現地の人たちとの関係に、距離があるという印象を受けました。その背景に、かつて現地の人たちの反対小屋を市民運動グループが使うことを快く思わなかったということがあって、結局、それとは別に監視テントが立てられることになったようです。

それこそ、普天間基地の辺野古移設問題に対して、反対派であれ賛成派であれ、狭い部落の中では、祭りの時などでは必ず顔を合わせなくてはならない。また、葬式があれば、顔を出さないわけにはいかないというように、非常に気を遣って生きているわけです。そうした複雑な事情もあって、今は辺野古現地での反対運動は、団結小屋と監視テントに分かれているのですが、

現地の反対派の住民が少なくなっていることに加えて、年配で体がきかなくなっている人が多いこともあって、残念ながら現地の人たちの反対小屋に来る人が少なくなっています。

「命を守る会」の現在の会長は西川征夫さんという年配の男性で、彼は「命を守る会」の初代の会長だったのですが、心臓が悪くて一度反対運動を離れた後で、どうしても他に代わりの人がいなくて会長をしているということでした。「インパクション」誌で浦島悦子さんが辺野古の運動についての記事を載せているを何度か読んだのですが、それはその前の会長さんの時の話のようですが、その時にはもう少し、現地の人たちと市民運動との関係はもっとオープンな雰囲気だったようです。

高江の方は、ヤマトから来て住み着いている人もいるということなので、もう少し違う雰囲気があるのかとは思いますが。

●高江は、本当に沖縄本島北部の山原(ヤンバル)のジャングルのような森の中の部落ですから、そこまで気軽に行こうという人はあまりいない。こう言ったら語弊があるかもしれませんが、労働組合の動員などではなく、かなり常識とはかけ離れた人たちというか、例えば、自然の中で暮らしたいとか、バックパッカーの人たちとかいったような、元々はヘリパッド建設反対運動をするつもりで来たわけではなかったけれども、そこが気に入って住み着いたという本土の人たちが何人もいます。住み着くという程ではなくても、就活がいやになったり、職場で息が詰まったりして、沖縄の自然に触れて生きたいという気持ちで本土から流れて来て、そこで楽器やサーフィンをやっている内に、座り込みに参加するようになったという人たちも結構いるようです。現地のテントで過ごす人たちを写した写真を見た印象でも、高江と辺野古の雰囲気はちょっと違うような気がします。

●昨年の大飯原発再稼働阻止闘争でも、現地でテントを張って泊まり込んでいる人たちがいましたが、要するに、テントを渡り歩いている人たちもいるということです。昔、全共闘運動が盛んだった頃に、大学のバリケードを泊まり歩いていた人がいたそうですが、そういう風に、運動の現場を人が自由に渡り歩いているという感じは、いいですね。

●「命を守る会」の会長の西川さんは、若い頃、米軍基地の警備隊をしていて、米軍基地のフェンスの内側から、銃を持って反基地運動と向かい合う側だったのですが、米兵と一緒に送別会をした時の写真もその小屋に貼ってありました。そのような人が辺野古移設反対運動に関わっているということを興味深く思った反面、複雑な思いもありました。

●沖縄では、そのようなことはいくらでもあって、沖縄の 60 年代末の全軍労のストライキは沖縄の運動にとって画期的なことだったと言われていますが、全軍労の労働者は言ってしまうと、基地労働者なのです。そういう意味では、沖縄の運動は、自分の存在を自分で否定するようなことにならざるを得ないところがあります。

●「命を守る会」の西川さんと話したことで記憶に残っていることなのですが、運動が後退期に入った時に、東京からひよっこりと「フリーター」のような人が来て、「何かお手伝いするようなことがありますか」とか、「反対小屋に泊まらせてもらってもいいですか」と言ってきたそうです。その時

に、西川さんは「何を甘ったれたことを言っているんだ」と思ったそうですが、「その若者が本土で居場所がないように感じていることと、西川さんが部落で孤立感を味わっているのとは、きっと同じような思いなのではないですか」と、言ってもよかったのではないかと後になって思いました。

そういった意味では、本土の生きがたい若者と小さな部落の中で「孤軍奮闘」の思いでいる老人が、本当に会うということにはならなかった。また、監視テントの運動と西川さんたちのような現地の人たちの運動は、分裂しているというよりも、互いにあまり関係のないようになっていて、両者が過去のいきさつを超えてもう一度新たに出会い直すということにはなっていないのですが、その辺が非常に難しいところだと思います。

日本の民衆運動の伝統的な身体アクションとは

●今日は、言わば「座り込む」というアクションに視点を置いて話してもらいましたが、日本の民衆の伝統的な身体性の中には、間違いなく「座り込み」ということがあるように思います。

そのように、日本の民衆が権力に対して抵抗する際にどういう身体の動かし方をするのかという時に、その他にも多くの伝統的な集団行動の型があると思うし、個々の人の振る舞いとしてもそういうことはいろいろとあるはずです。この間、特にテントでの「座り込み」ということが、「3・11/12」以降の運動では盛んに行われるようになっていますが、それ以外にも、日本の庶民や民衆の伝統的な抵抗の形として、「火つけ」や「投石」といったことが外せないように思います。とりわけ、幕藩体制下では、米の値段をつり上げる悪徳商人の店を襲う「打ち壊し」といった伝統的な民衆のアクションがありました。

時代と共にそうしたアクションのあり方というのは変わっていくと思いますが、今回の報告では、「座り込み」ということにはかなり大きな力点を置いて沖縄の運動を見ています。この「座り込み」という抗議行動の形は、抵抗のための身体的アクションとして、今後も中心を占めていくと思いますが、「座り込み」というのは、英語で言うと、「スitting・ポジション」ということになるでしょう。それに対して「投石」や「火つけ」というのは、「スタンディング・ポジション」ということになります。

かつてこの国の民衆が「投石」をしたことの延長線上に、学生運動で火炎瓶を投げるということがあったかどうかは別にして、とにかく、金持ち連中や支配者層への抗議・抵抗の形としてもものを投げるというのは、民衆にとってはごく基本的な行為だったと思うのです。しかし、今は、「座り込み」ということが主になっていて、例の「官邸前行動」などは、「スitting・ポジション」と「スタンディング・ポジション」のどちらでもないもののような気がします。そのように、このアクションは自分には近いとか、逆にすごく遠いとかいうことはあるでしょう。今日の沖縄の報告は、「小文字の『拒否』」という「スitting・ポジション」の流れを語るのに相応しいものだと思います。

●「スタンディング・ポジション」の方は、「やって逃げる」というか、「やって人混みに紛れる」ということですが、「座り込み」はそこに身をさらさなくてはならない。「スタンディング・ポジション」の方は、やった後で逃げるということが前提になっていると思うんですね。しかし、それが「民衆の正義」に転化するためには、その際に紛れ込めるほどの人々の数の「絶対量」が必要であって、それだけの人数のバックがあって初めてやれるというのが、「火つけ」や「投石」だと思うんですよ。

●つまり、そこに「野次馬」がいるということですか。

●「野次馬」というか、そういったアクションを了解してくれる周りの人たちが、たくさん存在しているということです。「座り込み」の場合は、人々の数がそこまで行かないし、意思表示をするために、その場でずっと身をさらし続けなくてはいけない。

●そのような意味では、座り込みというのは「静的」ですよ。

●難しいのは、そこなんです。「座り込む」というのは、一見、立って石を投げたり、火をつけて回ると比べたら、とても静的に見えますよね。しかし、座っているということ自体の中に、すごく「ボルテージ」があるわけじゃないですか。

昨年、大飯原発のゲート前での封鎖・占拠闘争が何時間にもわたって行われましたが、それは、座り込んでいるわけでも、石を投げたり、火をつけているわけでもなく、とにかくもみ合っています。そういう時には、身体は激しく何かを求めている、それは本当にその現場に居合わせなければ分からないような何かでしょう。先程名前が出た大野光明さんには、今年の12月のアンラージングでまた来てもらうのですが、大野さんは、大飯原発再稼働阻止闘争での原発ゲート前の封鎖・占拠闘争について書いています。それは、大飯原発のゲート前での闘いの意味や位置づけということよりも、闘争の中に身を置いているということのリアルさを真摯に伝えようとしていて、なかなかいい文章だと思います。

●だから、「静的」とか「動的」とかいうのは、少し違うような気がします。そういう風に言ってしまうと、座り込むことの中の大きなエネルギーのようなものが見えなくなってしまうように思います。

●そのような意味で、確かに、「静的」とか「動的」とかいうことではないですよ。人々の動きが「流動化」することでできるのが「火つけ」や「投石」なのですが、それと比較してエネルギーが弱いのではなく、内に秘めた悲しみや怒りの感情を静かに「座る」というあり方で表現するということでは、むしろその方が心的なエネルギーが強いのかも知れない。やはり、闘争の場に即して言えば、座っている状態というのは、流動的になる局面ではないでしょう。

●そうは言っても、相手側がどっと押し寄せてくることに対して、ただそこに座るしかないという局面もあるという意味では、ただ「静的」なわけではないでしょう。

●この写真のようにテントを張った中に人がじっとしているというのが「座り込み」のイメージとしてありますが、高江では、車と車を連ねてチェーンでつなぐなどしてヘリパッドの建設工事用のゲートをふさぐことをしています。そのように、「座り込み」といってもかなりアクティブな形の座り込みもあります。高江では、資材を搬入するのを妨害しようとして棒で突つくとかいうこともしているし、「座り込み」だから必ずしもじっとしているだけではなく、反対行動でゲートをふさいで工事をさせないようにすることに対して、相手側はそれをどけようとするといった攻防が毎日繰り返されています。

●その辺はなかなか難しいことですが、抵抗や闘いといったアクションを身体のあるようという視

点から見るということは、とても大事なことだと思っています。そのように、ある運動が、どういう思想に基づくものなのか、どういう理念の下で行われたかとかいうことは、また別の捉え方があるでしょう。日本の民衆が、権力に対する抵抗の際に、伝統的にはどういうアクションをしてきたのかというこの「系譜」を、私たちはしっかりと引き継いでいくべきだと思います。昔の「火つけ」や「打ち壊し」といったことは、今では、遙か遠い過去のことなのかもしれませんが、日本の民衆に根付いている抵抗のための身体の動かし方というのはどうあったのかということが気になっています。例えば、そういったことに照らして、かつての三井・三池闘争で人々がどのように闘ったかを見ることによって、何かそこに新しいことが見えてくるということもあるように思います。

●そのようなことでいうと、「釜ヶ崎暴動」などはそうした古くからの日本の民衆の抵抗の形の「系譜」を継承しているように思います。その際に、暴動の参加者自身が「こんなことをしても何の得にもならん」と自覚した上で、線路の砂利を取って投石したり、火をつけたりしていたということがあったそうです。

●学生たちが街頭で暴れていた 60 年代という時代には、「釜ヶ崎暴動」や「山谷暴動」などがありましたが、それは当時の学生たちの体の動きとは全く別なものとしてあったわけで、それは、釜ヶ崎や山谷といった寄せ場に人が存在する時の特有の身体の動かし方として捉える方がいいでしょう。残そうとして残せるものではないですが、寄せ場がしだいに解体されていく中で、そういう体の動かし方というのは、今では釜ヶ崎にはわずかに残っていて、山谷にはもうなくなっているように思います。そのように抵抗や闘いの際の身体の動かし方という観点から見るというのは、運動のあり方を捉える上でとても大事なことのように思います。

「背を向ける」・「立ちすくむ」という拒否の形

●今、沖縄の話から、「抵抗」の際の身体のあり方といった話にだんだんできてきていますが。

●僕がこの間、ずっと考えていることとして、「背を向ける」という「拒否」の形があります。80 年代の初めの頃、子どもたちの「校内暴力」や「いじめ」の問題をめぐって、子どもたちはどのようなところにいるのだろうか、という話をよくしていましたが、その時に、それは「背を向ける」ということをしているのではないかと感じていました。今から思えば、その時期の子どもたちにいち早く現れていた「背を向ける」というあり方が、今、「就活」を拒否するような大学生にまで来ています。先程からの話でいうと、「火をつけて逃げる」というよりも、ただ「無条件に逃げる」ということや、「背を向けて逃げる」ということになっているように思います。

今日の話聞きながら、精神的な領域までも含めた「病」とも関連しながら、そのような「背を向ける」というあり方が、いろんな形でありうるのではないかと感じていました。もしかしたら、そこに現在の人間の身体が現れているという気もしています。

●今の話で思い出したんですが、以前、「アンラーニングⅡ」の集いで、福島原発事故後の反原発デモや街頭アクションについて自分たちとしてはどのように捉えたらいいかをめぐって論議をしたことがあります。その際に、先程も少し触れられていた「官邸前抗議行動」をどう捉えるかということが、主な論議の一つになっていました。「官邸前抗議行動」で数万人規模の群衆が政府の原

原発再稼働の強行に対する抗議・怒りを表明したことの意義を認めた上で、主催者側が警察車両のスピーカーを使って参加者に解散を呼びかけたような「自己規制」的なあり方には違和感を感じるというのが、その時の参加者の共通の意見だったように思います。結局、主催者側は、不安や反対の声を踏みにじって原発を再稼働させる国家に対する人々の怒りや「拒否」を肯定し切れなかったのではないかとということが、その時の論議の中で話されていました。

残念ながら絶版になっていますが、ロベルト・ユングという人が書いた「原子力帝国」という、「3・11/12」後に改めて注目されている本があって、その中に、「アンナ・R」という女性のエピソードが紹介されています。以前、スイスでその後の原発の建設が不可能になった画期的な反原発デモ・集会がありました。その終了後にも彼女はたった一人で会場に残って、その時のデモの余韻に浸っていたのですが、それを警察が不審がって彼女を逮捕し、身体検査まで行きましたが、不当逮捕されたことに対する抗議から彼女は自分の体を動かすことを一切しなかったそうです。

官邸内に進入してそのまま「占拠」すればよかったかどうかは別にして、主催者発表で 20 万人もの大群衆が集まった際に、せめてその場に警察の規制を不可能にするぐらいに無数の「アンナ・R」が出現するということになれば、「官邸前抗議行動」は、もしかしたらまた違った展開になっていたのではないか、と思うところがあります。主催者側は、逮捕者が出ることを恐れて、警察車両のマイクを使って「解散」を呼びかけたのですが、そうではなく、一つの「拒否」の形として、ただ「立ちすくむ」ということがもしかしたらあり得たのではないかと先程からの論議を聞いて思っています。

●それは、限りなく「座り込む」ということに近いように思うんですけども。

●イギリスの国会議事堂前の広場を「占拠」して、2001年から2011年に肺ガンで倒れるまで「戦争反対」を訴えて、仲間を増やしながら反戦活動をしていたブライアン・ホウというイギリス人男性がいます。彼はその後、快復することなく亡くなったのですが、彼のことを日本人の女性監督がドキュメンタリー映画にっていて、私は知人と一緒にその上映会を行ったのですが、そうした「占拠」や「拒否」の形もあるように思います。

沖縄にあって本土にないもの——「歌」

●少し話題を変えますが、「沖縄の人たちは、ブルースピープルだ」という言い方は、面白いと思います。ブルースとはご存じのように、アメリカの黒人音楽のジャンルの一つで、新しく作曲されたものもたくさんありますが、本来は作者不詳で人から人へ歌い継がれていくものでした。そのように、歌に託された情念や思いが個人を超えて受け継がれて行くようなところが、沖縄の闘いにもあるということだと思います。誰かが歌い始めた歌が、そこに新たなメロディが付け加えられたり、歌詞が付け加えられたりするようなイメージで考えてもいいのかもしれませんが。運動というのはどうしてもどう行動したかで見られがちですが、それに留まらず、運動を通じて託される情念や思いもあるわけで、「ブルースピープル」という表現で、そのようなことを言いたいのではないかと思います。

●砂川闘争でデモ隊が「赤とんぼ」の歌を歌ったというのは、逆に言えば歌うべき歌がないという

ことでしょう。そういう意味では、「ブルースピープル」なんて言われる沖縄のことが羨ましいですよ。

そのことに関連していうと、辺野古や高江での座り込みを軸にした「拒否」のスタイルというのは、一種の「予示的政治」、つまり、社会を変えることで自分たちが実現したい社会や人間関係のあり方が、そこへ向かうための運動の中ですでに出現しているもののように思います。座る者同士の「親密圏」があって、そこにある種の「カルチャー」が生まれたりする。「ブルースピープル」という言い方も、そういうものだと思います。「拒否」が持続性をもって展開され、そこにある種の「予示的政治」が成立しているというのは、すばらしいことだと思います。

運動の中で受け継がれるべき情念や思いが貧弱だという意味でも、日本本土の運動には「歌」が乏しいのですが、これだけ巷に歌が氾濫しているのに、実際に運動の場面で一緒に歌える歌が全然ないという意味でも、ヤマトの私たちは、非常に貧しいあり方をしているように思います。

●運動でもそうですが、商業的な音楽の分野でも、皆で共有できるような歌が今、あまりないんですよ。日本の音楽シーンの薄っぺらさというのは、異常だといわれていますが、アメリカなどでのロック音楽の歌詞には、その時々政治・社会問題をテーマにしているような政治的な歌がけっこうあって、音楽業界から圧力をかけられて、発売禁止や放送禁止になったりすることがしょっちゅうあります。そうした環境の中で海外のミュージシャンたちは音楽をやっているのですが、風土の違いもあるのかもしれませんが、そういったことが日本ではあまりにもないように思います。

●「3・11／12」後、斉藤和義という歌手が、自作の歌をパロディー化して「ずっとウソだった」という反原発ソングを歌っているネット上の映像が、一時話題になっていました。それがそんなに注目されたのも、やはり、それだけ歌がないからだだと思います。

『拒否』の〈前〉線のありかをポジティブに考える

●『拒否』の最前線は沖縄にあり」というのは、その通りだと思います。ただ、僕は「最前線」という言葉を気軽には使えないところがあって、いつも、本当にそう言ってしまっているのだろうか、というためらいを感じています。とりわけ沖縄での『拒否』の〈前〉線のあり方が突出していることは間違いないのですが、それを「最前線」と言ってしまうと、やはりどこか違うような気がします。

●今回の報告の最初の方で、「沖縄は、今や、権力中枢部への『進駐』を果たしている」という武藤一羊さんの言葉が、紹介されていました。それはつまり、日米両政府が今後の日米安保体制の問題をどうするかという時に、沖縄という存在を外してそのことを考えることができないということです。そのように、アメリカ政府や日本政府が沖縄のことを無視できないというのは、沖縄の人々の闘いの軌跡を抜きにしてはあり得ないことのように思います。

それに対して、ヤマトの私たち自身が、日本の国家権力が無視できないような存在として、どのように〈前〉線を創り出していくかということが、問われているように思います。「拒否」の〈前〉線を創り出しつつある沖縄の人たちに「応答」するには、ただ単に、沖縄の闘いはすごいとか、沖縄

は日本列島の社会運動の「最前線」だ、と言っているだけでは、あまり意味がないように思います。

今、沖縄の人たちの視線は、確実に、日本本土ではなく、アジアに向かっていていると言ってもいいように思いますが、日本国家からの「離脱」や、新たな独立のあり方をいかに「発明」するかといった論議が沖縄で行われているような状況の中で、このままでは、ヤマトの私たちは沖縄に「見限られる」だけの様な気がします。

沖縄の人たちの闘いに促されながら、日本本土での「拒否」の〈前〉線をどのように生み出すかということが、この列島上での社会運動の共通の課題としてせり上がりつつあるように思います。そのように、「拒否」の〈前〉線のありかを探ることへ向けて、前回の「アンラーニング」では「3・11／12」後の反原発運動がどのように展開されてきたのかを軸に考え合うことをしました。今回は、沖縄での「拒否」の〈前〉線がどのように生み出されようとしているかを探ることを、このような形で試みているわけです。その際に、この列島上の運動が、「拒否」の〈前〉線をどのように生み出すかということを問題にするような段階には到底至っていないという批判は当然あるでしょうが、そのように状況を考えたいという思いが、僕にはあります。

●高江での「座り込み」といったアクションには、もちろん、ヘリパッドの建設を直接行動で阻止するといった具体的な目的があるわけです。しかし、そうしたアクションがどのような運動的な成果を上げたかということとは少し違うレベルのこととして、人々が実際に闘争の現場に自分の身体を置き続けることで、運動が「可視化」されるということの意味も大きいのではないのでしょうか。そのように、運動が見えるものになることで、ヤマトの私たちの側もイメージを喚起されるということがあるように思います。

単に自分の願望を状況に反映させて見るだけではあまりよくないのですが、各地の闘いを繋いでみて、今、運動的な状況がどのようになっているかという「スケッチ」を描くことで見えてくることがあるように思います。それこそ、「星座」というのは、そうでしょう。星座を構成しているそれぞれの星は、実際には距離的に近くにまとまっている星だけではなく、遠く離れたものも含めて人間が勝手に夜空に人や動物の形を思い浮かべているわけです。そのように、ある構図を描いてそれを通して見ることで、別々に存在していることが、一つに繋がって見えるということがあるように思います。

ビエケス島の闘争と沖縄の闘争との「共時性」という話がありましたが、そのような構図で各地の民衆の動きを捉えることで、ヤマトの私たちもそうした「共時性」に繋がるような動きを創り出すことに向けて喚起されるということがあっていいと思います。そのように、各地の闘いに促されて自分たちも体を動かすというのが、私たちにとっての「歌」ではないかと思うのです。

人々の小さな動きの中に〈前〉線化の可能性を見る

●先程、「背を向ける」という話をしましたが、この列島上の社会運動の「拒否」の〈前〉線はどこにあるのかと言う時に、運動的なレベルだけでそのことを考えるのでいいのかなという思いが、一方

ではあります。「本当はここにいたくない」とか、「俺、就活をやめたよ」、「もっとひきこもっていたい」とかそういうところで生きている若者たちが、今、たくさんいて、そこに日本の「拒否」の〈前〉線が生まれる可能性があるかもしれないと思うからです。

ですから、必ずしも大きな運動的な状況だけを見ていればそれでいいということではなくて、一見小さな動きの中に、私たちの思いもよらない可能性があるのかもしれない。そういう意味で、自分の視野の限界をいつでも意識していなければならないし、見えやすいものだけを見て終わるようなことになってはいけないと思います。

●いやな仕事でも働いて稼ぐことを拒否したら生きてはいけないというように思ってきたわけですが、「3・11/12」後の社会というのは、深刻な放射能汚染の中で、社会システムを維持するための労働を従順に行うことが、下手をすれば自分や他者の健康破壊や「死」にさえ繋がるという状況にあります。そのように、「3・11/12」後、社会のあり方をそのまま認めることが「死に至る」ことにもなりかねないという事態の中で、「拒否」ということが、これまでにない「ポジティブ」な意味をもつようになったのではないかと思います。人間を生きさない「システム」に背を向けることが、別の「生」を生きていくことに繋がるような「回路」がどこから生まれるのかと、漠然と思っています。

●福島県の田村市では、政府が住民に線量計を配布しましたが、これはつまり、「国はあなた方を放射能から守ることはしませんので、各自『自己管理』してください」ということで、放射能対策も「自己責任」だという、ネオリベ社会の最たるものだと思います。

前回の「アンラーニング」で「3・11/12」後の反原発運動について報告してもらった際に「放射能自主計測運動」の話がありましたが、田村市の例のように、放射能を測ることが全く逆の意味をもつようになっています。現在の状況を見る時に、そこまで目を行き届かせなければいけないように思います。

●「〈前〉線」というとどうしても目立つ動きにだけ注目することになりがちですが、それは違うと思います。運動としての「拒否」とそれぞれの個人の「拒否」とは、必ずしも同じレベルのことではないのですが、その間にいろんなバリエーションがあるように思うので、その辺のことをきちんと見ていかなければならないと思います。

●どんなに小さな「拒否」の仕草にも、「可能性」はあるのであって、そのことをどこまで相互に尊重し合えるかという問題もあるように思います。自分の間尺に合わない「拒否」のありかたの可能性をつぶし合うようなことになるのであれば、それは非常に良くないことですし、そこは、とりわけ〈68年〉を生きた人間の責任でもあると思います。大事なことは、どんな小さなことであれ、互いにそれを可能性として見ることができるということが大事なんであって、片方からの一方的な視線だけで切り捨てることは意味がないように思います。

●今年4月に東京のフリーター全般労組の人たちが企画した、「3・11 北へ西へ。語るべきだったが語られてこなかったこと」という討論集会がありました。その企画では、福島原発事故後、「北」へ行って福島第一原発の「収束労働」を行った人と、「西」へ「自主避難」して放射能自主計測運動を呼びかけながら「原子力国家」を批判し続けてきた人とを、真正面から論争させることを行いました。それは大変鋭い運動的センスに基づく企画だと思っていますが、「北」へ行った人も「西」へ行った人も、両方ともある意味ではとても大胆なことを言っています。「西」へ行った側は、「福島はすべからく復興させるべきではない」と言い、「北」へ行った側は、「実際に『収束』させることもしないで、何が反原発だ」ということをお互いに遠慮無く言うわけで、どちらが正しいなんて簡単には言えないわけです。

しかし、そのような論争のように、お互いに、避けてはいけない論議を避けていることがたくさんあると思います。そこを抜きにして、なんとなく「野合」していたり、人間関係の問題に解消したりするというのは、非常に良くないことです。本当にきちんとぶつかるべき時にぶつかり合う場を作っていくことも、運動の大事な力量だと思います。

II 「拒否」のメタ論理を考える

アンラーニングプロジェクト・2013 第4回(2013.7.28)

1 「アンラーニングプロジェクト・2013」第2、3回で何が見えてきたか

メタというのは、ギリシャ語で接頭語のひとつです。しいて言うと、「高次な」ということを表す接頭語です。

「拒否」のメタ論理というのは、その意味で、国家権力なり資本の力なりを「拒否」する営みが、ある程度の水準に達しないと、メタ論理として取り出すことは難しいわけです。国家権力のおよんでくることを「拒否」するとか、資本の支配を「拒否」するとかということが、現実的にある種の厚みをもってこななければ、メタということの問題にすることは無意味です。ですから、現在の段階で、「拒否」ということのメタ論理のようなものを、日本の現状に即してどこまで言えるかは、ある意味では危ういところもあります。危ういところでそういうことを問題にするわけですから、非常にきわどいというか、いかがわしいというか、そういう要素をどうしても含まざるを得ないところがあります。

「拒否」のメタ論理というのは、一度そういうものを抽出すればそれで終わりということではなくて、繰り返し巻き返し抽出していかなければいけないことだと思います。しかも、すべての人に普遍的な抽出の仕方があるわけではありませんから、とりあえず私なら私が、現在のこの列島上の「拒否」のありように即して、そこからより高次なあり方を取り出してみようという試みだと思っていただければ、いいと思います。ある一定程度の現実的・具体的な「拒否」の営みが展開されていないかぎり、頭の中でそれを考えるということではないわけですから、展開されているものに即して考えるしかないということがあります。

ただ、それにしても、「反原発運動については・・・」とか、「沖縄における人々の闘いは・・・」とか、「反貧困の領域では・・・」というふうに、一つひとつの領域にもどった話をするのであれば、個々の運動の課題を考えればいいことになってしまいます。それを更にもう一つ抽象化するところで考えるわけですから、私自身は必ずしもそれが悪いことではないと思うところもありますが、どうしても話が抽象的になることがあるかと思しますので、また、ご批判をいただければと思います。

この「アンラーニングプロジェクト・2013」の第2回では、とりわけ「3・11／12」以後から現在までの反原発運動のあり方を報告者自身の経験を交えて時間軸に沿ってたどり直すことをしてもらいました。また、併せて、「3・11／12」

後の反原発運動の「潮流」がどのように展開されてきたかをめぐって報告してもらいました。

また、「アンラーニング・2013」の第3回では、現在の沖縄での闘いを、戦後の沖縄での民衆闘争の軌跡と重ね合わせながら、世界各地の運動との「同時代性」や「共時性」という視点から改めて捉え直しました。この間私・たちは、「沖縄セミナー」というかたちで、「自己決定権の樹立」という新たな地平を拓きつつある沖縄の人々の闘いにヤマトの私たちが連帯するということがいかにありうるかという、ある意味で抽象的なレベルで「問い」を立てようとしてきました。第3回の集いでは、具体的に辺野古や高江での反対運動の有り様に注目することで、闘いの中での人々の〈身体〉の動かし方というレベルで沖縄の運動を改めて捉え直すことを試みました。その集いでは、昨年9月にオスプレイの配備に抗議して計4日間にわたって続けられた普天間基地のゲートの封鎖・占拠も含めて、「座り込み」という民衆の抵抗のための〈身体〉の動かし方が、沖縄の民衆の戦後の苦闘の軌跡の中でどのように累積され、現在までに至っているのかをめぐって報告が行われました。

そのように、「アンラーニング・2013」の第2回と第3回の集いでは、「3・11／12」後の反原発運動や、この間の沖縄での闘いの中の「拒否」の〈前〉線のありかを探ることを試みました。もちろん、現在、この列島上で日本国家・社会のあり方に「拒否」を突きつけるような動きが他に全くないわけではありませんが、残念ながら、「拒否」の「動線」が明確に見えるような領域というのは必ずしも顕著ではありません。ただ、「3・11／12」後の反原発運動の中にもいろんな「動線」がありますし、それ以外にも、私たちが注目していることと言えば、「フリーター」系の労働組合の動きや、沖縄の基地の問題を含む「日米安保体制」そのものを問うような動きもあります。ただ、そういった運動が、「拒否」の〈前〉線ということの問題にするような段階にあるかということ、必ずしもそうとは言えません。そのような意味で、現在、この列島上で展開されている「拒否」の「動線」の有り様を見据えながら、「拒否」のメタ論理を考えていきたいと思えます。

2 「拒否」の原基＝「Ya Basta！」

ちょうどNAFTA（北米自由貿易協定）が発効した1994年1月1日に、メキシコのチアパス州で「サパティスタ民族解放戦線」の武装蜂起がありました。それは、前世紀の終わりに世界各地で展開された反グローバリズム運動に非常に大きなインパクトを与えましたが、その後、反グローバリズム運動の中で、「Ya Basta！」というサパティスタのスローガンがよく使われていました。「Ya Basta！」というのは、日本語に訳すと「もうたくさんだ！」とか「もうごめんだ！」といった意味なのですが、私が考える「拒否」というのは、例えば、そのような〈声〉として現れているよう

に思います。

「もうたくさんだ！」とか「もうごめんだ！」とかいった〈声〉が、いろんな人たちから発せられることで、それが一つの「共同主観」性として成立するという経緯が、「拒否」ということが表現されていく際、の原基のようなものとして、この世界の至る所に存在しているように思います。非常に抽象的な言い方になりますが、私たちの「生」の尊厳が様々な形で蹂躪されていく時に、「もうたくさんだ！」という〈声〉は、歴史的にいろんな形で表現されてきました。それは、ある時には歴史に残るような闘いとして現れたし、また、必ずしも歴史に残るようなことにはならなくても、そうした〈声〉が表現されるということはこれまでにたくさんあったはずで、もちろん、それらの中には、どんなに精一杯〈声〉をあげても、残念ながら、「共同主観」にまで至ることのないまま、途中で中断されてしまったものも数多くあったでしょうし、そうした無数の「もうたくさんだ！」という〈声〉の堆積が人間の歴史の根底に流れているように思います。

そのように、人間の「生」の尊厳を踏みにじる巨大な力や権力に対して、「もうたくさんだ！」という〈声〉があがり、その〈声〉が「共同主観」化していくということが、「拒否」の原基としてあるように思います。そのような〈声〉の「共同主観」性が成立するような時には、人が「国民」であったり、「民族」であったり、あるいはまた、「市民」であったりするといった、〈声〉を発しているそれ・ぞれの人を社会的に規定していた様々な規定が壊れていくわけです。

人がこの世界の中で存在するあり方について、いろんな名称がありますがけれども、そういう名称が取り払われていき、ある種の「無名性」のようなものが、そこに現出してくる。「もうたくさんだ！」「Ya Basta！」という〈声〉をあげているのは、現実的には個人ですけれども、それが〈声〉として成立する時には、「共同主観」性として存在しているわけですから、そうした〈声〉が誰に帰属するかといっても意味がないことです。そういう集団的あるいは集合名詞的なものとして、「もうたくさんだ！」という〈声〉があげられていく。歴史的には、それは「蜂起」という形になることが多いのですが、そういうことの中で「拒否」というものが一つの動きになっていく。

現在のこの世界の中でのリアルな民衆の動きをどういう概念でつかんでいくか、ということは非常に難しいことですが、今、私・たちは、それをとりあえず「拒否」という言葉で捉えたいと考えています。

3 「拒否」の表出形態(その1)

自分の視野がすべてにゆきわたっているわけではないので、あくまでこの列島上で自分が見聞きできるもの、あるいは若干経験しているものに話は限定されますが、

先程から言っている「拒否」というものがどのように表出されているかということの現れに即して、「拒否」ということのあり方を探りたい。

それは時間軸をずっとさかのぼって考えてみるということではなく、とりわけ2011年の「3・11／12」以降のことを中心に考えていきたいと思います。

「拒否」の〈前〉線という言い方をすると、どうしても、社会運動として表出されるような「拒否」というものを軸に考えることになってしまいます。たとえば、沖縄における反基地の闘いの延長線上に、現在、沖縄の人々は、日本国家自体を「拒否」するようなところまで踏み込もうとしています。また、「3・11／12」以降の反原発運動では、多くの都市の街頭で「再稼働阻止！」や、「原発いらぬ！」という声をあげるデモや街頭アクションがかつてない規模で展開されてきています。ともすれば、そのように、社会運動という形態をとった「拒否」の表出の形にだけ目がいきがちです。しかし、まだまだ十分に自分の言葉にできてはいませんが、もっと違った「拒否」の表出の形というものが、そうした運動の対極にあるように思います。これは、私の大変主観的な捉え方になりますので、またそれについては、皆さんの意見を伺いたいと思います。

ごく最近、参議院選挙がありました。今回の選挙でどこが勝利したかというところ、「棄権」党が勝利した、と言ってもいいのではないかと思います。「勝利した」と言ってしまうのは語弊があるかもしれませんが、「投票しない」という行為は、間違いなくあるピークを成しています。「～党を支持するとか、〇〇議員を支持するなんてのは、やってられないよ!!」、「そんなことじゃまにあわないよ!!」という気分が私にはありますし、本当はどうでもいいことではないはずなのに、「そんなことは全然どうでもいいよ!!」というふうに言わなきゃならないということがあるのではないのでしょうか。そういう「拒否」のあり方というのは、日本列島の中で、ある程度広く存在しているように思います。

それをもう少し人間の存在のあり方に即して見るとすれば、抽象的な言い方になりますが、「ミクロ政治」における「拒否」の「動線」ということになるように思います。「ミクロ政治」というのは、人が生きていくことの中で具体的にいろんな関係を結ぶといったあり方を、ひとつの「政治」として捉えるわけです。関係をどのように創っていくとか、そうした関係がどのようにあるとかといったことを、「ミクロ政治」として捉えようとするならば、そこにおける「拒否」のあり方があって、それはある種の「動線」を成しています。そうした「拒否」の「動線」というものが、ほんの少しずつですが、見えてくる。

そのことに一番近いと思う事例を話します。

かつては日本の若者たちが高校を卒業する頃から社会に出るまでの間が、ある種の「モラトリアム」や、猶予の時間として認められていた時期がありました。もちろん、これは、大学に進学するような人の話であって、高校までしか行かないとか

中学までしか行かないという人もいたわけですが、間違いなく社会的な猶予の時間のようなものが存在していた時代があります。それは日本に即して言うと、高度成長期や、「フォーディズム」の時代です。

その後、「バブル」が崩壊し、低成長期に入って、「ポストフォーディズム」の時代に入る。その頃からずっと、若者たちの「モラトリアム」の時間というものが、社会のあり方の変化によってだんだん変わってくるわけです。私もそんなに細かく知っているわけではないのですが、現在、大学というところは、個々の授業の内容を云々する以前に、入学した時から「就活」のためにひたすら追い立てられるというようになっているらしい。現在、大学のキャンパスは、まったくの「無風状態」になってしまって、かつての学生運動のなごりは全く何もなくなってしまっています。大学生が、大学当局に向かって、「俺たちのやっていることを規制するな!」といった抗議の声をあげるようなことは、ほとんどなくなって、ビラの1枚も撒けなくなっている。そのような大学の状態と、学生が「就活」に追いまかれることとは、表裏一体のことであるように思います。

「就職活動」という言葉は昔からありましたが、「就活」というふうにそれを省略して、それが当たり前言葉になってくるのは、そう昔のことではない。現在ではもう大学というところは、「就活」のための単なる準備期間です。昔から大学というのは社会に出るための予備的な期間ですから、最初から企業に入るということを「金科玉条」として学生時代を送る人も全くいないわけではなかった。しかし、例えば、かつての「全共闘運動」の時代のように、学生が「自分はいったい何してんだろう?」と自分で自分に問いかけるような猶予期間をもつことが、社会的に許容されていた時期があったわけです。それと比べれば、現在はそういう「問い」がきちんと成立しない。むしろ、「私はこれで、みんなと同じ流れにちゃんと乗っているんだろうか?」という問いだけが、絶えず若い人たちの心を脅かし続けている。そのようなことが、ずっと進行しているように思います。

そのような状況の中で、2011年の11月末に「就活ぶっ壊せデモ」というのをやった若者たちがいます。若い人たちが大学を卒業しても、「終身雇用」制度は崩壊しているし、不安定雇用労働者が全労働者の4割近くになっている。そういう状況が誰の目にも明らかになっただけで、とにかく「就活」にしか行き(生き)ようがないということはありませんが、そのデモのように、「就活」自体に対して、「もういいんじゃないか」と思う若い人たちが、年々少しずつ増えているように思います。

「フリーター」という言葉が日本社会で最初に使われ始めた80年代の終わりのほんの短い間ですが、自分の意志で自由に仕事に就いたり辞めたりする、フリーというところにアクセントを置いて、「フリーター」という言葉が使われていた時期がありました。それが、その後間もなく完全に逆転します。80年代末に「バブル」経済が崩壊して、90年代に入ってすぐに、ネオリベ的な雇用政策が一挙に進めら

れるのですが、ちょうどその頃から、「フリーター」という言葉が、いつでも解雇可能な「不自由」な若年労働者を指す言葉になっていきました。それからほぼ20年後の現在、『フリーター』という言葉をもう一度、当初もっていたような意味を込めて逆転させることをしなきゃ、生きていられないよ!!」と思う若者たちが、決して少なくないように思います。

その一方では、「バブル」崩壊以前は、どちらかという小・中・高校生ぐらいの子どもたちの問題であった「ひきこもり」というあり方が、現在では30代や40代の人たちにまで「高齢化」しています。「あれはなんだ!?!」と思う年配の人たちからの不審の「まなざし」が決して減ったとは思いませんが、ひきこもる人たちは、現在の日本社会では決して例外的な存在ではありません。自分・たちが納得できないことから身を引きたいという「気分」が、うっすらと若い人たちに浸透していることは間違いないように思います。

つまり、人生の時間の区切りが大きく変容し、そのことによって就労のあり方も変わってきていて、「できることなら『就活』なんかしないで生きていたいのですが…」とか、『就活』なんてどうでもいいようなところで、私は生きていたいと思うのですが…」とかいった気分が、現在の若者たちの間に少しずつ広がっているのではないかと思います。しいて言えば、この社会の中の主流な生き方に対して「背を向ける」・「降りる」・「逃げる」・「離脱する」というような〈ベクトル〉が、まだそれほどはっきりとは現れていないにせよ、若者たちの間に存在しているように思います。そのことが、この列島上のいろんな社会運動に結びついているようには思いませんが、一方、社会運動の側がそうしたうっすらとした「背を向ける」ことへの〈ベクトル〉を本当に受け入れるだけの度量をもっているかということ、必ずしもそうとは言えないように思います。

現在、この列島上の「拒否」の表出形態の一つとして、そのような「マイクロ政治」における「拒否」の「動線」というものが、少しずつ浮上してきているような状況ではないでしょうか。そのことは、今後、私たちがこの列島社会をどうしていくのかを考える際に、とても重要なファクターの一つになるのではないかと考えています。

アメリカの小説家で、「白鯨」という有名な小説を書いたハーマン・メルヴィルという作家がいます。彼は、それとは別に「書記バートルビー」という短編小説を書いています。この「バートルビー」という短編小説は、いろんな思想家がそれぞれ独自の解釈を行っていて、現代思想・哲学の分野で大変注目されているものです。

そのあらすじを簡単に言うと、バートルビーという一人の青年が、ある弁護士事務所で雇われるのです。その弁護士事務所で、彼は「ちょっと、これをやってくれ」といった小さな用事を頼まれるわけですが、その際にバートルビーは、一貫して「できれば、やらないで済ましたいのですが…」という返事しかしないのです。彼は全

く仕事をしなくなってしまうので、その弁護士事務所をクビになります。それでもそこに居座り続けるので、逮捕されて刑務所に入れられるのですが、そこで食事を取ることを拒否して餓死してしまうのです。

私は英語のニュアンスをうまく伝えられないのですが、その話の中で、パートルビーは、“I would prefer not to.”（～しない方がいいのですが…）と言い続けるわけです。これは、何かに立ち向かっているというスタンスではありません。

現在、そのような極めてネガティブな「拒否」のあり方が、「こんな非常に残酷な世界に、できれば生きていたくないのですが…」とか、「就活しなくてもいいのならしない方がいいのですが…」とかいったような気分として広く存在しているように思います。とりわけ「3・11／12」以後、主婦や子どもをもった女性たちの間で、「放射能によって汚染された野菜を、食べなくて済むのなら食べない方がいいのですが…」というようなあり方が、徐々に姿を現してきている気がします。そのような「マイクロ政治」における「拒否」の「動線」を、いま、この列島上の「拒否」の表出の重要な形態の一つとしてきちんと捉えなければならぬように思います。

「新型うつ」と呼ばれているようですが、今、精神医療の領域では、古典的なうつ病とは違ったうつ病があることが指摘されています。全体としては、自殺者の数が3万人台から若干減ったと言われていますが、この間、とりわけ若年層の自殺率が非常に高くなっています。今のところ、「ひきこもり」や、「新型うつ」、「自殺」というのが、間違いなくこの国の若者たちの生き難さの現れとしてあるように思いますし、そのようなことも含めて「マイクロ政治」における「拒否」の「動線」として捉えるべきではないかと思えます。

もう少しポジティブな「拒否」の「動線」がどのように生み出されているかよくわからないのですが、「できることなら、いろんなことをシェアしようよ！」とかいうようなことが、とりわけ都市部の若者の間で広がっているようです。かつてのように、無理をして何百万円もするような高価な車を買うということが、若い人たちの間であまり普通なことではなくなっています。また、立派な住居ではなくても、誰かと一緒に「ルームシェア」して生活してもいいということが、少しずつ進んできているように思います。

また、ヨーロッパなどでは、若者たちが空きビルを占拠して「フリースペース」を作ったり、そこに住み込むといった「スクウォッティング」を、60年代からずっと行っています。日本の場合は法律上の問題があつて、簡単にはいきませんが、自分たちで勝手にオープンスペースやフリースペースを創って、そこを拠点にして集まって楽しむということが、少しずつ各地で行われています。

そのような意味で、先程の「マイクロ政治」における「拒否」の「動線」をもう少しポジティブな方向で広げていく先に、「ハウスシェア」や「ルームシェア」であるとか、様々なオープンスペースやフリースペースを創っていくという営みが、一つ

の「拒否」の表出形態としてあるように思います。

「バブル崩壊」後の80年代末から90年代初めにかけて、東京を中心にして活動していた「だめ連」という、大変ユニークなグループがありましたが、その中から「在野」の思想家になった人がいたりするなど、そこに関わっていた人たちが現在もいろんな社会的・運動的な分野で活躍している人たちがたくさんいます。「だめ連」という集団は、「平日昼間にぶらぶらしている人間が、引け目をもたないで集まって遊ぶ」ためのものだとそのメンバーの人たちは言っていました。それは、先程から言っているような「ミクロ政治」における「拒否」の「動線」の一つの突出した表出のあり方だったように思います。ここでは「まったり」という言葉が一つの合い言葉になっていましたが、「誰でもここへ来て、何でもぼやいたり、つぶやいたりしてもいいんだよ」ということを、「居場所」がない者たち同士の共有の営みにしようとしていました。そういう流れが、現在でもある程度存在しているように思います。

「拒否」の表出形態(その2)

次に、「ミクロ政治」における「拒否」の「動線」に対して、「マクロな政治」における「拒否」の「動線」ということについて話したいと思いますが、問題は、後者が前者を自らの「対極」としてきちんと対置することができるかどうかということにあります。

「マクロな政治」における「拒否」の「動線」としては、「3・11/12」以降の反原発運動の「拒否」の「動線」や、反基地運動を出発点として、現在では「日米安保体制」そのものを問いながら、日本国家からの「離脱」までも射程に含むところにまで踏み出している沖縄での「拒否」の「動線」があります。後で触れるように、「拒否」の「動線」というのも、累積や蓄積のプロセスを通じて、違った段階に入っていくということになりますが、現在、様々な「拒否」の「動線」がこの列島上に存在しているように思います。とりわけ、「3・11/12」以後、反原発運動の「動線」は、いろんな形で展開されてきています。

さらに、そうした「動線」が生み出されることを促す一方で、私たちに新たな運動のイメージを与えてくれたものとして、2011年を中心に全世界的に繰り広げられた「オキュパイ運動」がありました。それは、チュニジアやエジプトから始まってスペインやイギリスといったヨーロッパの国々や、カナダやアメリカにまで「バトン」を受け渡すように、運動がずっと連鎖していきました。ただ、それぞれの国での「オキュパイ運動」で何に対して反対をしているのかということは、必ずしも同じではありませんでした。その中で生まれた「1%対99%」や「私たちは99%だ!」という有名なスローガンがありますが、日本の私たちにとっては、ニューヨ

ークのウォール街のズコッティ公園の「占拠」が、一番身近に感じられたのではないかと思います。

とりわけ、この「オキュパイ運動」の中で象徴的なことは、ある場所を占拠したら、必ずそこに来るべき社会の「ひな形」のような共同の空間が生み出されるということです。運動を通じて遠い未来に実現しようとしていたことが、実際に運動の中で実現するというあり方を「予示的政治」と呼んでいます。そこに参加している人たちが、性別や人種、社会的なポジションに関係なく、いろんな形で運動に関わることができて、そこにある種の「コミュニティ」のようなものが生まれています。ウォール街での「オキュパイ運動」では、当局によって拡声器の使用が禁止されたのですが、それを逆手に取って、話し手がスピーチすると、それを聞いた人が後ろの人に順々に伝えていくという「人間スピーカー」という手法が生み出されました。また、何かを意思決定したり、運動の方針を決める際に、意思表示のサインを決めながら、そこに参加したい人が誰でも来て議論するといったように、直接民主主義的な実践がその中で行われていました。

「オキュパイ運動」は、間違いなく「拒否」の蜂起なのですが、そこではいわゆる古典的な蜂起のイメージとは大きく異なった運動の形が生まれていたように思います。20世紀の終わりから今世紀初頭にかけて全世界的に展開された反グローバリズム運動では、WTO総会といった国際会議やG8の首脳会議の開催地に大挙して活動家が集まって抗議行動を行うという運動のスタイルでした。しかし、「オキュパイ運動」は、闘争の時間に対する「政治的な自律性」をもち、「占拠」をいつまで続けるかということ自体を運動の参加者が決めています。そのようなことが、2011年から2012年にかけての全世界的なレベルの「拒否」の表出形態として、顕著に現れていました。

私のような古い世代の人間は、かつての〈68年〉の運動のイメージからなかなか脱け出すことができないのですが、それから40年以上経って、それと同じではないにしても、人々が騒然と動き出すということ、自分が生きているうちに再び経験することができたことは、やはりうれしいことです。そのことは、とりわけ、現在、「3・11／12」以降の反原発運動として展開されているように思います。

先程も言ったように、昨年9月に沖縄ではオスプレイの強行配備に抗議して沖縄の人々が普天間基地のゲートを封鎖するということがあったのですが、その年の夏には、本土でも大飯原発前のゲートを「非暴力・直接行動」で占拠・封鎖するという「大飯原発再稼働阻止闘争」がありました。そのように、「拒否」ということを〈身体〉の動かし方として表出するということが、沖縄に限らず、ヤマトの側の運動でも現れつつあるのではないかと思います。次に、その辺のことをもう少し抽象化してお話ししたいと思います。

4 動線—〈前〉線—前線

人間が国家権力なり資本に従うことを「拒否」する際に、それが「共同主観」性をもった〈声〉や〈身体〉の動かし方として現れる際の軌跡を、先程から「動線」と呼んでいます。しかし、「動線」があれば、それがすぐに〈前〉線になるということではないように思います。

「漢和辞典」で「ゼン」と引くと、いろんな「ゼン」があります。最近使われていないものもあるし、意味がよく分からないものもたくさんあります。

今、「ゼンセン」といっても、いろんな「ゼンセン」があるように思います。例えば、「燃線」ですが、これは自然の「ゼン」です。とりわけ、「3・11／12」以降、原発というものが日本列島全体に対して非常に破壊的な作用を及ぼしています。それに対して、「いったいこれはなんだ！」とか、「こういうことにさらされているのはもうごめんだ！」とかいうことが、まさに「拒否」の出発点です。

そのように、「もうごめんだ！」とか、「もういやだ！」とかいった人々の〈声〉や動きが現れてくる。そのようなことの始まりを、仮に「燃線」と呼んでもいいように思います。それが、ある程度の広がりをもつようになって、「漸線」になっていく。これは徐々にという意味です。その次が「蠕線」ですが、これは、胃腸が蠕動するとかいう時の「ゼン」で、これも、徐々にとか、蠢（うごめ）くという意味です。そのように、人々の動きが、徐々に広がりや厚みを持ち始め、ゆっくりと蠢き出すことで、間違いなく「動線」が引かれていくわけです。そういうことの延長線上に、「燃線」が生まれるのですが、これは、燃えるということにかなり近いような運動の段階に行くわけです。「敵」とは言わないまでも、相手というものが、厳然と存在し、相手とのぶつかり合いとか、いろんなやり方を通して相手を威嚇するということに入るような段階です。私の捉え方で言うと、「燃線」までは、しいて言えばひとつの「自然過程」です。

それに対して、「自分たちはこういうことをやってきたが、これはいったい、何をやっていることなんだろう」とか、「隣りにいる人たちは、何をやっていて、それと自分のやっていることとは、どういう関わりがあるんだろう」とかいうようなことが、意識的に問題にされる段階に入ることがあるように思います。そのように、「自然過程」として進んできた「動線」が、ある段階で目的意識的なものに変容するという「意識過程」に入るかどうかということが、まさに運動の大きな「分岐点」になるように思います。その際に、いろんな「動線」がいろんな形で絡み合っていていき、「ここに間違いなく一つの〈線〉が生まれてきている！」ということが、政治的・社会的に認知されていくという段階がある。そうなった段階が、「〈前〉線」化ということではないかと思えます。その一番典型的なものは、先程も少し触れた「大飯原発再稼働阻止闘争」です。

この国の反原発運動が、さまざまな「動線」を孕んで展開されている中で、2012年6月30日から7月2日にかけて、「大飯原発再稼働阻止闘争」が、大飯原発のゲート前で30時間以上にわたって展開されました。私は、それをこの間の列島上の反原発運動の一つの「〈前〉線」化の現出として捉えたいと思っています。

「3・11／12」以後の反原発運動が、それ以前のものとは何が一番大きく違っているかという点、それは、「現地」という概念が変わったことだと思います。例えば、私たちの身近なことで言えば、かつては、原発に反対する闘いというのは、原発が立地される地域の住民によって「反原発地域住民闘争」として闘われてきたわけですが。チェルノブイリ原発事故後、反原発運動は一時期かなりの高揚を見せますが、残念ながら、それ以後は、地道に続けられてきてはいても、それほど顕著な動きはありませんでした。私たちに身近な能登半島の志賀原発の場合で言っても、90年代に入ってから、反対運動は「裁判闘争」が中心になり、「現地住民闘争」という範疇がそのままでは存在できないという状況でした。しかし、「3・11／12」以後、非常に悲劇的な形で「現地」概念が破綻し、国家や電力資本の側が想定する「現地」というものが、もはや成り立たなくなりました。そうした事態に対応するような反原発運動の「陣型」をいかに創るかということが、それ以後、大きな運動的な課題になっています。

2012年5月の段階で、この列島上のすべての原発が停止したと思ったら、すぐに原発を再稼働させるということが、電力資本だけではなく、ほぼ日本の総資本の意思として、当時の野田首相をがんじがらめにしました。そのように、原発が停止したと思ったら、ただちに再稼働の話が政治的な日程にのぼり始めるということの最初が、大飯原発でした。そのような意味で、大飯原発をどうするかというより、問題は若狭湾一帯の原発をどうするかということだったのです。

中野哲演さんという反原発で有名な宗教者がいますが、そういった人たちが若狭で、ずっと地道に反原発運動を続けてきました。残念ながら、そのことの波及力は、この間、薄れてきていましたが、それが、もう一度蘇ってきています。蘇ってきたのは、若狭の地元の人たちの反原発運動だけではなくて、私たちが知っている範囲でいうと、関西地方の中でも、とりわけ京都の人たちが、かなり意識的に2012年のある段階からずっと現地に入り込んでいましたが、その時には京都も「現地」であるという認識に立っているわけです。「問題は、『現地闘争』をいかに構築するか、だ」というように、かなり意識的に運動を組み立てることを考えていたグループがありました。その人たちは絶えず、「どうやったら、自分たちの運動の舞台にできるか」を考えながら、以前から運動をやっている人たちとも接触しながら、かなり意識的に大飯原発現地や若狭に通い続けていました。

かつての新左翼の政治組織として「ブント」（共産主義者同盟）がありましたが、その中でも「関西ブント」というのは、他と違った色合いをもった、一種独特な組

織でした。その系譜を引く人たちが、結構がんばっていて、「9条改憲阻止の会」というものをつくっていて、経産省前の「テントひろば」の運営を担っています。その流れを汲む人たちが2006年の第一次安倍内閣の頃から「反戦・反貧困・反差別共同行動in京都」を毎年1回行って、毎回700人とか800人ぐらいの人を集めているそうです。京都というのは共産党が強い地域ですが、それとは別に、自分たちは違った動き方ができる存在だということをはっきりと示すことを、そのようにかなり意識的に追及してきた人たちがいます。

「反戦・反貧困・反差別共同行動」の代表世話人の一人に、京都大学の原子力研究所の小林圭二さんという人がいますので、原発の問題は、その人たちにしても決して無縁なことではなかったようです。その人たちが、「3・11/12」以後、「現地」という概念を拡大していき、自分たちの「現地闘争」として大飯原発の問題に取り組むことをかなり意識的に進めてきています。

今回の参院選で、「緑の党」というのが名乗りを上げました。これは、西ドイツの「緑の党」に近い「みどりの政治」を純粋にめざすものです。今まで、日本では、「緑」というのは、一つの自立した勢力になっていません。それをあえてがんばってやろうという人たちが、とりわけ、京都ではその人たちと見事につながっていきます。「反戦・反貧困・反差別」ということに取り組んできた人たちがもっている柔軟な考えが、そのような「みどりの政治」を目指す人たちとも接点をもてるような幅もっているのだらうと思います。今回の選挙にも立候補した長谷川羽衣子さんという女性がいますが、彼女は「緑の党」の共同代表の一人です。

そのような組み合わせが、京都で生まれていて、毎年800人もの人を集めることのできる人たちですから、いざという時に動員力があって、新しい「現地」概念に即して、自分たちを「現地闘争」の主体にしていくということが、間違いなく京都周辺で進んでいくわけです。

また、2012年11月に、「再稼働阻止全国ネットワーク」ができますが、その中心にいたのが、東京の「たんぼぼ舎」です。そこの人たちは、大きな全国結集的な動きがある時には、東京からバスを仕立てて行くことをしています。同時に、「たんぼぼ舎」では、経産省前の「テントひろば」からもそういった共同行動への呼びかけを発信していますが、そのような反原発運動の「陣型」が、「3・11/12」以後創られてきました。

「わいわいやるんなら、どこへでも行くよ！」というような身軽な青年たちがこの列島上にそれなりにいて、それに関西方面から来た人たちも加わって、大飯原発の地元の総合運動公園に「テント村」をつくります。その他、先程から触れてきた京都の人たちは、「STOP★大飯原発再稼働 現地アクション」の現地事務所を作ります。2012年4月に、関西電力側のスケジュールとして「住民説明会」があって、もちろん、それに対して抗議の声をあげることに併せて、5月に反原発運動の側は、「もう

一つの住民説明会」を開催するのですが、それは、それまでの若狭湾周辺での反原発運動にはない画期的なものだったようです。そうした取り組みが、「3・11／12」以後、「現地」という概念が否応なく拡大するという事態に対応するような成果を生み出したと書いていいように思います。

大飯原発再稼働直前の6月29日には、「官邸前抗議行動」では、主催者発表で20万人もの人々が参加して「再稼働反対！」の声を上げたといったことも含めて反原発運動の「陣型」が成立する中で、初めて、大飯原発のゲート前での「攻防」が可能になったわけです。そのように、「大飯原発再稼働阻止闘争」は、「3・11／12」以降の反原発運動の中の様々な「動線」が「〈前〉線」化することに向けた一つのあり方を、明確に示すものだったように思います。

そういう意味で、今後再び原発の再稼働攻撃が始まるかどうかというところに来ていますが、大飯の闘いを「〈前〉線」化への一つの範型としてきちんと認識して、その闘いを各地で引き継ぐような動きをどうやって創り出していくか、ということが、現在、反原発運動の大きな焦点になってきているのではないかと思います。

ここで、今後の再稼働攻勢にどう立ち向かうかについて、少しだけ触れたいと思います。

一番早く再稼働しようとしているのは、伊方原発か泊原発ではないかと言われていますが、伊方原発の現地には、かつての地域住民闘争の時代から反対運動に取り組んでいる人たちが、かなりがんばっています。また、四国や、瀬戸内海をはさんだ中国地方でも、古くから原発に反対している人たちによって運動の形ができていて、伊方原発の再稼働をめぐる種の「陣型」が生まれるのではないかと思います。泊原発の周辺にもかつての地域住民闘争から関わっている人たちがいるし、札幌でも新しい動きをつくらうとしています。

それから、もう一つは柏崎原発ですが、柏崎では、長い反原発運動の積み重ねがあります。日本海側特有の社民党政治的なものは、まだその良質な部分が残っているのが新潟ですから、そういう意味で、柏崎は、再稼働阻止に向けた「陣型」を生み出すことに進むのではないかと思います。また、鹿児島島の川内原発ですが、今日、川内原発の現地で原発反対の集会があつて、私たちの仲間もそこに行っています。そのように見ていくと、どう考えても、私たちの身近にある志賀原発をめぐる再稼働阻止の動きは少し弱いように思います。もちろん個々の地域のことは、個々の地域ごとに創りだすしかないのですが、どうしても運動の強弱があつて、今、「再稼働阻止全国ネットワーク」が、そこをどう補強するかを真剣に考えるべきところへ来ていると思います。本当に現地でのピラマキといったことも含めて、各地から支援に来る人たちが具体的にどのように関わるかといったところにまで踏み込んで、それぞれの原発現地での反対運動を有機的に組み立てなければ、運動の力がつくれません。そういう意味で、「大飯の闘いはすごかった」とだけ書いてみても意味がありま

せん。

反原発運動の中のいろんな「動線」が一点に集中していき、「動線」から「〈前〉線」化へと至るといふあり方を私たちの目の前で見事に表したのが、「大飯原発再稼働阻止闘争」だったと思います。それを一つの「範型」としながら、後に続く地域が、いかにそのような「陣型」を更に豊かに創り出すのかということが、はっきりと示されたように思います。そのように、「〈前〉線」化というのは、繰り返し行われるべきものであって、地域ごとにそのことには当然違いがあるという意味で、繰り返し変わりながら、「〈前〉線」化を各原発現地で進めていくことが、現在、強く求められているように思います。

それに対して、沖縄は、「〈前〉線」化が累積されているという意味で、沖縄は「前線」の生成の段階に入っていると考えるのもいいように思います。そのような意味で、この列島上で繰り返し広げられている社会運動の中で、間違いなく沖縄の運動は突出しています。それこそ何十年にもわたる沖縄の人々の長い苦難に満ちた闘いが「〈前〉線」化を累積させてきているのですが、そこから更に「前線」を形成しようとする段階にまで踏み込もうとしているように思います。

もう一度整理し直して言えば、「動線」→〈前〉線→「前線」といった筋道を描くことで、「拒否」を表出するアクションや運動がどのような地平を切り拓くのかということをも明らかにしたいということです。

「前線」というのは、本当に「敵」と真正面から対峙して、勝つか負けるかが明確になるようなあり方だと言ってもいいでしょう。そういった「前線」の予兆のようなものが〈前〉線ですが、それを違った言い方で言うと、「述語の氾濫」ということになるでしょう。それはどのようなことかということ、「原発に反対であることは、再稼働を阻止することである」、「原発に反対であることは、瓦礫を自由に焼却させないことである」、「原発に反対であることは、放射能汚染を可能なかぎり避けることである」といったように、「原発に反対であることは」という主語の後の「～である」というところに、「3・11／12」以降の反原発運動のいろんな運動の中のいろんな課題が「述語」として入るようになっていくわけです。そういう意味で、〈前〉線というのは、「述語が氾濫する」ということの中で生まれるものだと言ってもいいでしょう。

そのように、〈前〉線が生み出されていくことの中で、そこに、自分たちが望む生活や生き方が、たとえほんの小さなことであっても、実現されるということが起きます。前回の「アンラーニング・2013」の集いの沖縄の闘いをめぐる報告の中で、辺野古や高江での「座り込み」の中で、お互い見知らぬ人間同士や、かつては特に親密ではなかった地域の中の間人間関係が変わって行って、お互いがお互いを必要とするような関係がそこに生まれてくるということが話されていたと思います。先程言った言葉で言えば、そうしたあり方を「予示的政治」と呼んでもいいように思います

が、〈前〉線がつくられていく中で、そうした新たな関係が生み出されるということがあると思います。

そうした多様な〈前〉線がいろんな形で生み出されていく中で、今、この列島上では沖縄だけが、「前線」の方へ間違いなく踏み出しているわけです。前回の「アンラーニング」の集いで紹介されていた武藤一羊さんの言葉を借りて、それをもう少し積極的に言うと、「沖縄は、今や、権力中枢部への『進駐』を果たしている」ということになるでしょう。「権力中枢部」というのは、この場合は、日米安保体制ということになりますが、沖縄の民衆の意思を無視してそれをどうするかを日米の政府が決められないような地点にまで、沖縄の闘いが入っていると捉えてもいいように思います。間違いなく、辺野古をめぐる闘いというのは、そのような段階になってきていますし、それを「前線」の生成と言っていいのではないかと思います。

沖縄の状況に即していえば、「沖縄の自立」や「自己決定権の樹立」、あるいは、もう少し積極的な言い方をすれば、沖縄の日本国家からの「離脱」ということが射程に入るようなところに来ている。つまり、沖縄の「拒否」の〈前〉線が、間違いなくこの列島上での「認知」を獲得していると言ってもいいのではないかと思います。

日本列島社会をどうするかを考えるということを、下からの民衆による「アジェンダ」の形成として捉えるならば、〈前〉線から「前線」の生成へと踏み出していく中で、まさに、そのことが進められていくような段階に入らなければならない。しかし、残念ながら、この列島上の社会運動は、今、ようやく、そのかなり手前の更に手前のようなところに来ているように思います。それは、私・たちの言葉で言うと、「日本の『構成』的解体」をめぐる「アジェンダ」の形成力と言いますか、民衆の側から日本列島社会を変えていくということの「主導権」を握るということではないかと思います。つまり、日本列島国家・列島社会をどうするかということ、沖縄の人たちだけにまかせるわけにはいかないということです。ヤマトの私たちの側もそれに応答するような日本国家・日本社会の「解体」を自分たちなりにどう進めるかを考えるようなところに入れたい限り、次の段階には入れないように思います。最後に、今まで言ってきたことをもう一度整理し直してみたいと思います。

5 「拒否」が拓く地平の現在

先程から何度も言っていますが、戦後の沖縄の68年間にわたる抵抗と拒否の累積は、間違いなく、沖縄の民衆を日米同盟をどうするかということの「当事者」にまで押し上げてきています。沖縄では、沖縄の自立と解放を求める「前線」が生成されつつあると言っていいと思います。そこから、日本国家からの「離脱」への動きが、どのように更に〈形成〉されていくか。また、民衆レベルでの東アジアとの連帯が、具体的に〈形成〉されていくか。そういう意味で、「前線」が生成されていき、

それが更にどのように転成していくかということが、今後の沖縄の闘いの大きな課題になってくると思います。

さらに、「3・11／12」以降の反原発運動の多様な「動線」がありますが、それらは、交錯しているようで交錯していなかったり、出会っているようで出会い損ねているといったようなことも含めて、「〈前〉線」化の蓄積と拡大をどのように進めていくかということが、これから先の反原発運動の課題としてあると思います。

「反原発」に関わっているような運動がありますが、象徴的に言うと、例えば次の3つの「動線」があると思います。

一つには、先程から言っているような「再稼働阻止」に向けた「動線」があります。もう一つには、具体的な動きで言えば、「瓦礫の焼却に反対する」とか、「放射能を測定し、子どもの未来をいかに放射能から守るか」とかといった運動で動いている人たちの動きがもっている〈ベクトル〉があります。そのように、「ゼロベクレル運動」とでも言うような運動が一方であります。何ベクレルならいいという話ではなく、自分たちが求めているのは「ゼロベクレル」だというところで、日本国家・日本社会の組み立て自体を壊していくような「動線」があるように思います。

また、福島第一原発の「収束」作業は、全く進んでいないのですが、それに加えて、この間、「汚染水」のことが新たに大きな問題になっています。その「収束労働」をやっている「被曝労働者」がいるわけですが、その人たちをどうするかということは、今後の日本国家・社会の行方にとって、きわめて大きな問題だろうと思います。現在、「収束労働」に、たくさんの労働者が狩り出されていますが、その際に、日本に古くからあるかつての寄せ場の背後にあった「闇の労働力」を集めるシステムが、今でも「被曝労働者」を生み出すものとして存在しているわけです。

その中で間違いなく、多くの「被曝労働者」が、生命の危機に絶えずさらされながら、かろうじて、「収束労働」が続けられていて、「収束労働」に狩り出される人たちがどんどん底をついてきている。そうなってくると、福島第一原発はどうなるんだという話になります。放っておけば、ますます大変なことになるわけです。実際にそこで「収束労働」をしている人たちからすれば、『「反原発」と一所懸命言うけれども、自分たちがやっているようなことをどうするつもりか』ということがあるわけです。これはもう本当にリアルな問題で、どうにも避けようがないような重さで私たちに突き付けられているように思います。

2012年秋に「被ばく労働を考えるネットワーク」が結成されましたが、これは、昔から寄せ場の労働運動に関わってきた人がいたり、「フリーター」系の労働組合の人がいたりするとか、いろいろな人が集まってネットワークをつくっていますが、それは、まだ大きな「動線」を生み出してはいません。個々の「被曝労働者」の雇用形態は「多重下請け」構造の中で訳が分からないものになっています。それを一つひとつ解きほぐして、労働者にとって有利になるように交渉しようとすることを小さ

な「フリーター」系の労働組合が地道に取り組んでいるのですが、残念ながら、雇用者側に避けられてしまうという現実があります。

そうした「再稼働阻止」の「動線」や、「ゼロベクレル」を求める「動線」、「被曝労働者」の問題を考える「動線」のそれぞれが、今、本当に出会えているかと言えば、残念ながら、そうはなっていません。「大飯原発再稼働阻止闘争」のように、「再稼働阻止」の「動線」の一部が「〈前〉線」化していることはありますが、それが、「被曝労働者」の問題と出会ってはいない。そのように、いろんな「動線」が交錯し、出会っていくということなしに、先程から言っているような日本国家・日本社会の『『構成』的解体』ということは、到底言えないわけです。その問題が解決していかないと、『拒否』の〈前〉線』と言ってみたところで、結局、言葉遊びに過ぎないことになってしまいます。そこを何とかして打開したいし、自分たちもできるだけのことをしていかなければならないと思います。

先程から何度も言っていますが、沖縄を含めたこの列島上のいろんな「動線」が、交錯し、出会い、その中から「動線」が一部「〈前〉線」化し、さらに「前線」になっていくことで、初めて、「日本の『構成』的解体」への〈ベクトル〉というものが、実線では描けなくても、少なくとも点線で描けるというようなところに本当に進めるかどうか、問われるのではないかと思います。

昨年末の国政選挙の結果、安倍政権が登場していますが、安倍は、いろんなところで「二枚舌」を使いつつ、しかし、確実に「戦後レジーム」を解体していく方向へ向かっています。それに対する「抵抗線」が、この列島上のどこで生まれているかと言えば、残念ながら、いろんな「動線」はあるけれども、「抵抗線を創る」というところにまで「動線」が成立してはいません。そここのところをどうするかということが、今後、非常に重要なわけです。

安倍が、あれだけ露骨に「戦後憲法」の「改憲」を言い出していますから、「改憲」に対して「護憲」という打ち出し方をしようとする人たちは、今でも間違いなくいます。しかし、私たちが、憲法「改憲」に対して、「護憲」という発想で対抗するということは、命脈が尽きているように思います。

問題は、「戦後憲法」の〈むこう〉へどうやっていけるのか、ということです。戦後憲法の〈むこう〉へ行くということは、もうすでに沖縄がいち早く、そのような段階に入ろうとしています。日本「復帰」からおおよそ10年後に、いわゆる「反復帰論者」の一人である川満信一が、国家の廃絶を掲げる「琉球共和社会憲法C私（試）案」を提起しています。それから、30年余り経った現在、それが、単なる「夢物語」ではなく、沖縄の状況の中である種のリアリティーを獲得するところにまで来ている。そのように、自分たちの「抵抗線」を見えるものにしていくということが、先程から言っている、下からの民衆による「アジェンダ」の形成の一つの在り方なわけです。そうした意味で、ヤマトの私たちは、今、「戦後憲法」の枠組みを超えて、列

島社会の「憲法草案」を生み出すような「前線」の生成をどこまで進めることができるかが問われているように思います。

私・たちはずっと、沖縄の「自立／自己決定権の樹立」へ向かおうとする動きに対してどのように「応答」できるかを考えようとしてきましたが、これは単に頭で考えて済むような問題ではなくて、そういう沖縄とヤマトの運動の「動線」を二重の焦点にもつような楕円が生み出されなにかぎり、「戦後憲法」の〈むこう〉へ行くというようなことは到底問題になりません。支配層の側が、安倍をもう一度再登場させた。だったら私・たちの側はなにをもって、それに向きあうのか。個々の「動線」の単なる延長線上にあるようなことではない問題として、現在、改めて、そのことをどのように考えるかということが、私・たちにとっての大きな課題になってきていると思います。

その一方で、「反原発」ということで、どこまで状況を捉えることができるかということがあるわけです。「3・11／12」から2年数ヶ月経った今、この列島の反原発運動が、「2周目の新自由主義」（平井玄さん）と、本当にどのように向きあえるのか、更には、反原発運動が「戦後憲法」の〈むこう〉へ行く運動になるというところにまで本当にどうやったらいけるかということが、改めて問われているように思います。

私・たちが、この間、ずっと問題にしてきた「日本の『構成』的解体」というものを、ある動きをもった〈ベクトル〉として捉えていくと同時に、それは最初は点線ではしか表せないものだとしても、それを描き出すという課題に、今こそ、私・たちが向きあっていかなければならないように思います。私・たちは、安倍と「無理心中」するわけにはいかないとすれば、自分たちはこういうものをこそ、つかみ取りたいということを、明確にするしかないと思います。

抽象的なことを十分に整理することのないまま話したように思います。しかし、自分たちを立たせるためには、自分たちはどのような状況にいるのかということを一方向できちんと確かめながら、今、自分たちに何が問われているのかを自分の言葉で明らかにしていかなければいけない。それが本当にゼロから始めなければいけないというところに、私・たちはいるように思います。

「拒否」のつぶやきは、いつでも本当に小さな〈声〉から始まります。しかし、それがあつた時代を動かし、社会を動かすものになるためには、いろんな形態をとらなければいけないし、多様な「動線」が出会い、結合しなければいけない。「大きな会社なんかには就職しなくても生きていけるんなら生きていきたいんですが…」といったつぶやきから、「日本列島に原発はいらない！」という街頭でのアピールまで、いろんな「拒否」の〈声〉が「共同主観」性を獲得していくということがどうしたらありうるかということが、現在、私・たちにとっての大きな課題としてあるように思います。

6 終わりに——少し長めの補足

以下は、「アンラーニングプロジェクト・2013」の第4回の後で、そこで話したことを補足するために、加筆したものである。

以上、いま、この列島上の「拒否」の動線—〈前〉線がどのようなものとしてあるか、そのメタ論理のありようについて、話してみました。

しかし、以上の話がきわめて乱暴で、抽象的であることとは別に、「お前の話は、羊頭狗肉なのではないか？」と感じておられるのではないかと、思います。大変不謹慎なことですが、話している私自身がそう感じています。具体的に言えば、私が話したのは、メタ論理ではなく、1/2メタ論理にすぎない、ということです。1/2というのは、メタのありようを抽出するスフィア（範囲）が1/2でしかない。この列島上の「拒否」の動線—〈前〉線が生起するスフィアをトータルにつかまないうまま、言ってみれば、その半分しか捉えていないところで、メタ論理を抽出しようとしている、ということです。

それなら、メタ論理などと大仰なことを言うのはよせ、ということになるでしょうか？ここがとても大事なところだと思うのですが、私は、そうは思っていないと思います。たとえこの列島上の「拒否」の動線—〈前〉線をトータルに捉えきれていないとしても、というよりは捉えきれていないからこそ、「拒否」のメタ論理をとり出してみること、語ってみることが大事なのではないかと、思うからです。それが1/2メタ論理でしかないなら、残りの1/2を捉え、それとその残りの1/2とをどのように〈接続〉することが可能なのか、その〈接続〉の動線のありようをみさだめる以外に、文字通りの「拒否」のメタ論理のありようを捉えることはできません。

誤解はないでしょうが、ここでみさだめるとか、捉えるとか言っているのは、それを思考操作的に行うということではありません。「拒否」の動線—〈前〉線の現実が、それが抽出されることを求めている。その求めに応ずることによって、メタ論理を抽出させることが可能になるのであって、それ自体が動線—〈前〉線の一部を成す運動上・実践上の営みです。ですから、私の話が、1/2メタ論理でしかないとすれば、残りの1/2はどのようなものとして、どこに存在するのか？ それはどのような「拒否」の動線—〈前〉線として現出しているか？ さらには、それぞれの1/2は

どのようにして1と成ることが可能か？を、見定めなければならないことになる。

お気づきの方は、すでにおわかりでしょうが、私は、言ってみれば「福島から」(＝「福島から始まって」／「福島を契機に」)という動線—〈前〉線のスフィアー(範囲)から「拒否」のメタ論理をとり出そうとしているのであって、言ってみれば「福島へ／福島で」(＝「福島へ向けて」／「福島で生きて」)というスフィアーについては、なお捉えそこねています。そうであるかぎりにおいて、私の話は、「羊頭狗肉」のものであると言わざるを得ません。しかし、ここで嘆いているわけにはいきません。どうかもう少し辛抱して、私・たちがこの列島上の「拒否」の動線—〈前〉線のメタ論理をつかむことへむけて、なんとかにじり寄ろうとしてきた／している営みの痕跡をたどることに、つきあってください。

① 繰り返しふれてきましたが、私・たちが、「アンラーニングプロジェクト・2011」を「沖縄セミナー」という形で行うことを準備している過程で、「3・11」が^{しゅつたい}出来しました。この驚天動地の出来事になんとか向きあいたいという思いから、「〈エクソダス〉2011」という試みを、2011年4月からスタートさせました。この間の経緯については、『拒否』の〈前〉線情報 No.1の「FOCUS」でふれています。この試みのモチーフは、ただただ「沖縄と福島、そして私・たちがひとつに連なる〈声〉の蜂起を！」ということに尽きます。このモチーフは、それから1～2年の間、この列島上でいくつもの試みで異口同音に表現されました。私・たちは、このモチーフをほぼ同時並行して進めた「沖縄セミナー」ともども、「日本の『構成』的解体」という言辞にそのモチーフを仮託してきました。この点については、「〈エクソダス〉2011 通信」を参照してほしいのですが、ここでは、未練がましく、「日本の『構成』的解体」という言辞に、私・たちが何を含意させようとしたのかを示すために、その「通信」からの〈引用〉を掲げておきます。

『現在、東北地方太平洋沿岸では、地震／津波／放射能汚染という三重の苦難の下で多数の人々が呻吟している一方で、沖縄の人々は、日本「復帰」後、ほぼ40年を経た今なお、基地の存在を強制され続けることによって、「生」の根底までも侵害されるという状況が続いています。しかし、沖縄のことは沖縄のことで、東北のことは東北のことだとして問題を立てる限り、私・たちが、大きな苦しみの中にいる東北や沖縄の人々と共につながり合うということは、ありえないのではないかと。そこから一步を踏み出し、多くの人々の「生の困難」を生み出しているこの国のあり方を大きく創りかえていくことへの一つの手がかりとして、「沖縄と、東北、そして私・たちがひと連なりに

〈声〉を上げるという「〈声〉の蜂起」をどのように成し遂げるかを考え合いたい。(後略)

(前略) そのように、「沖縄と東北、そして私・たち自身がひとつに連なるもの」として捉えようとする。その時に、そうしたつながりをどのような言葉で呼んだらいいのかということが、私・たちにとって、大きな課題としてあるように思う。(後略) そのことを本当に問題にするためにも、「ひとつに連なる」とはどのようなことであるのか、そして、そこから発せられる〈声〉はどのようなところにあるのか、を考える必要があるように思う。

「軍事植民地」としての沖縄を、もう一度自らの手に取り戻すための苦難に満ちた闘いの中で、先程も言ったように、〈琉球弧〉という呼び方が改めて「発明」されているが、それに対して、「電力植民地」である列島の東北部は、そのような呼び名を獲得できてはいない。

その一方で、この間、沖縄の人たちは、日本という国民国家の「尺度」の外に出ようとする動きを示し始めているように思うし、それが、現在、沖縄の「自己決定権の樹立」といった言葉に象徴されるような段階にまで、向かおうとしているように見える。

一方、「電力植民地」であり続けてきた東北は、大地震／津波／原発事故という三重苦の下で呻吟している。そこから生み出されようとしていることに、私・たちがどのように参加できるかが、今、問われているように思う。現在の沖縄での動きに現れているような、国家の「尺度」の外に踏み出すことを東北の人たちに求めたり、私・たちが東北に向けてそうしたアクションを展開するということは非常に難しい。だが、少なくとも、日本国家の「尺度」をいかに揺るがし、また、それを「異化」することができるかということは、東北の人たちと同様に、私たちの課題としてもあるように思う。

そのような東北の今後をどう考えていくかという課題と、〈琉球弧〉の「自己決定権の樹立」を求める動きをひとつに連ねることとして、この日本という国民国家から、私・たちがいかに「エクソダス(脱出)」できるかということが、大きな課題になってくるように思う。私・たちは、そのことを、「日本(国家－社会)の『構成』的解体」と呼んでいる。それは、わかりやすく言えば、日本という国民国家の「解任」ということだが、それは、例えば、私・たちの電力供給者としての北電や東電を「解任」するということでもあるだろう。つまりは、アルゼンチンの民衆蜂起でのスローガンのように、「皆、消えろ！一人も残るな！」ということにつけるわけだが、そのことを単なるスローガンに止めておくのではなく、運動としてどのように展開できるかが、まさに問われているように思う。(後略)』

(「〈エクソダス〉2011 通信2号」(2011/5/29))

『今年の初めから、この間沖縄で拓かれつつある新しい地平への挑戦——自己決定権の〈発明〉!!との連帯を模索する試みとして、〈沖縄セミナー〉の企画を進めてきた。そして、その試みが成り立つべき地平を、「日本(国家－社会)の『構成』的解体」という生硬で／少しも熟しておらず

／生半可な表現で示そうとしてきた。

改めていうまでもなく、それは、A. ネグリのいう「構成的権力」に由来しているが、その概念を十分に自分のものとすることができていないために、充分使い切れない。

その一方で、D. グレーバーの「脱構成的趨勢」という概念が、この課題の背中を押してくれていることを、感じている。D. グレーバーは、次のように述べている。（「資本主義後の世界のために」(高祖岩三郎訳・構成／以文社／2009)）

「ネグリは、「この構成的権力を一あらゆる制度の合法性がそこに起因するこの民衆の力を一どのように制度化しえるのか？」と問います。しかしこれも誤った設問なのです。なぜなら「構成的権力」なるものは反制度化の力だからです。突然、民衆的想像力が、それまでの制度的枠組みから自由になります。それは同時に危機的な状況であり、だからそこで民衆は世界を再創造することを余儀なくされるのです。アルゼンチンのコレクティボ・シトウアシオネスのメンバーは、これを「脱構成的趨勢 (destituent power)」と呼んでいます。」

D. グレーバーは、この「脱構成的趨勢」という概念について、さらに矢部史郎との「対話－資本主義づくりをやめる」の中で、次のように敷衍している。

「この「脱構成的趨勢」という概念は、イタリアのオートノミストの中でも傍系にあるラファエル・ラウダーニや、アルゼンチンの活動家／知識人グループ、コレクティボ・シトウアシオネスが積極的に使っている概念です。「構成的権力」の概念の場合、現実に関与を経験する人びとが、ある種の国民的な統合や形式に向かわざるを得ないといった宿命的なニュアンスを持っているのに対し、「脱構成的趨勢」は、そうではない遠心力のようなものの可能性、つまりある種の形成性、集合性を持ちながらも、国民的な統合といったものとは異なる方向があるのではないかといった捉え方です。

宿命的に国家経済に取り込まれることを想定する「構成的権力」との差異として考えると、「脱構成的趨勢」の特徴は、何らかのきっかけがあると、常に創造的な力が噴出するという点にあります。例えばニューオーリンズの台風被害の際や、地震などの自然災害が起こったとき、民衆の創造的な力が噴出する状況に力点を置いて考える。災害などによって、行政機構が崩壊した隙間から共同体が形成されたり、さまざまな新しい生活が生まれる、そういったものが噴出する状況について考えようということなんです。」

また、D. グレーバーにもふれて、友常勉は、その著作の表題である「脱構成的反乱」(東京外語大出版局／2010)について、次のように述べている。

「本書の表題である〈脱構成的叛乱 (destituent insurgency)〉という語から、読者は何を思い浮かべるだろうか。なるほどこれは、既成権力である「構成された権力 (pouvoir constitué / constituted power)」と区別される、グローバル資本に対抗する民衆の能動的な生

の力を指すアントニオ・ネグリの概念である「構成的権力(pouvoir constituant / constituent power)」との関連を意識した語である。

ネグリは構成的権力(構成する権力)を自律的かつ能動的に自己を組織する民衆の生の力を指すものとして用いている。では、「構成的」ではなく、〈脱構成的(de+stituent)〉とはどういうことか。この語の直接的な出自を知るためには、アルゼンチンのコレクティボ・シトウアシオネスの説明が必要である。2001年12月、アルゼンチンの政治的危機に対する近隣住民集会や路上闘争などの広汎な社会運動それは大統領を辞職に追い込んだのダイナミクスのなかで広まった「みんな去れ」というスローガンについて、コレクティボ・シトウアシオネスのメンバーたちは政治的代表的ものの「解任(destituyente)」という意味づけをおこなった。すなわち、ここで表現を付与されたのは、民衆の反制度化の力である。しかしそれは制度的構造が崩壊した結果、生が制度化と非制度化のあいだで宙吊りになる瞬間でもある。そして、このアルゼンチンに固有の経験の、しかも特定の瞬間を表現する言葉として〈脱構成的叛乱(destituent insurgency)〉という語が与えられた。本書の表題に〈脱構成的叛乱〉という語を選んだのは、この対抗的な生の力への注目をひとつの理由としている。」

「脱構成的趨勢」にせよ、「脱構成的反乱」にせよ、それは、いずれもすでにふれたA. ネグリの「構成的権力」への我が躓きと、遠く呼応するところがあると思ひ込みたい。また、とりわけこのたびの東日本大震災・福島原発大爆発との関わりで言うなら、D. グレーバーの言う「民衆の想像力の噴出」こそ、「日本の『構成』的解体」へ向けての「〈声〉の蜂起」を可能とするものであるだろう。

以上、極めて身勝手な「我田引用」を行ってきたが、それを通じて、「日本の『構成』的解体」という表現の生硬さ／未熟さ／生半可さから、少しは解き放たれるといいのだが……。

先に、思わず思っただけが先走って、「われら福島『国民』／被災・被曝圏民」の「自己決定権」、というようなことを口走ったが、我が想念のうちでは、それら「自己決定権の確立」への志向は、一方での、沖縄の「自己決定権の樹立」の動向と〈接続〉することで、「日本の『構成』的解体」は、はじめて、私・たちにとって〈未〉成の課題として、立ち上がることになるだろう』。

(「〈エクソダス〉2011 通信5号」(2011/7/16))

② 上でふれた試みの後、2011年夏、私・たちは、一方で、県内自治体に、既成の行政区画を〈越境〉して「原子力防災計画」を策定することへ挑戦するように促す営み（それは地方自治体が地域自治体へ転成することを促すことでもある）を進めながら、他方で、「反原発ラウンドテーブル」という小さな試みを進めま

した。——「3・11」以後の「食品の放射能汚染」／「3・12」直後の「現地取材体験」／能登原発反対運動の残したもの／「3・11と女性・たち」などのテーマをたどりつつ、その一環として「避難論」というテーマにもふれました。ここでは、そのテーマの末尾にあたる部分を、〈引用〉しておこうと思います。

『(前略) 言うまでもなく、"Here"「ここ」というのは、富山の私・たちであり、"There"「あそこ」というのは、福島原発災害の被災地の人々ということになるが、現在の段階では、「富山の私・たちと福島の彼ら／彼女ら」と言うことができるようなつながりが充分、成立してはいない。そのような意味で、「こことあそこ」という場合の「と」とは、残念ながら、結びつきや結合を示す「と」ではないし、また、富山の私・たちと福島の人々が直接的に対立する関係にはないということでは、敵対の「と」でもない。それをあえて言えば、「向きあうこと」の「と」だということになると思うが、そのように、「福島と私・たち」と言うときの「と」を、いかに「向きあうこと」の「と」へと転じるのかということが、私・たち自身にとっても大きな課題としてある。

現在、この国の各地で反／脱原発をめぐるアクションが展開されているが、それを大きく捉えると、3つの潮流があるように思う。

1つには、この間、主に東京など大都市で、「原子力レジーム」からの解放を求めて展開されている街頭アクションがある。(中略)2つ目には、私・たち自身もそうだが、80年代・90年代から、自分たちの生きる地域や、そこに隣接する原発に対する取り組みを展開してきた運動の潮流がある。(中略)3つ目の潮流としては、反／脱原発アクションというよりも、まさに生きることそれ自体だと言ってもいいと思うが、福島やその周辺原発災害の被災地の人々による、食品の放射能汚染を通じた「内部被曝」の問題への取り組みや、放射能の影響を受けやすい幼い子どもたちの「集団疎開」を求めること等を軸にした、非(脱)被曝を求めるアクションや直接行動がある。

そうした3つの潮流が、現在、間違いなく、この列島に存在しているのだが、それらが相互に結びつきあって、さらにトータルな運動として前に進もうとしているかと言うと、残念ながら、必ずしもそうとは言えないのが現状だ。そうであれば、なおさら、先程も言ったように、「福島と私たち」との間で、いかに「向きあうこと」の「と」を創りだしていくのか、が問われているように思う。(中略)

アンティエウの文学者エドゥアール・グリッサンが、「群島的接続」という概念を提唱している。(中略)先程、大都市の街頭で展開されている「原子力レジーム」からの解放を求める動きや、地域に軸を置く反原発運動、女性たちを中心とする非(脱)被曝のための直接行動といった、反／脱原発運動の3つの潮流をめぐって話をした。そういった動きが実際に「群島」を構成する「島」として存在するためにも、それを浮かべる「海」が必要なわけで、3つの潮流のそれぞれがお互いに「海」となって他の運動を支えあうということが、強く求められているように思う。(中略)

原発事故をめぐって論じる際に、「フクシマ」とカタカナ書きにされる場合と、「福島」と漢字で書く場合とがある。現在、数百kmといった距離を超えて、この国の各地で原発由来の放射能が大気や雨水から検出され、放射能汚染された農産物が知らないうちに流通しているということでは、原発事故の影響を完全に免れているような地域は日本のどこにもない。そのような状況の中に日本全体があるということが、私がカタカナで書く時の「フクシマ」だが、一方、漢字で「福島」と書くのが、原発事故の現地である本来の意味の福島ということになる。「こことあそこ」との「接続」を問題にしようとするならば、この2つの区別をきちんとつけることが不可欠のように思う。

世界中で避難生活を送るパレスティナ人の、国境を越えた解放運動のための組織として、PLO(パレスティナ解放機構)がある。そのように、「フクシマ解放機構」と「福島解放機構」のそれぞれが、互いに連携しあいながら、私・たちの「無関心の包囲網」が支える「原子力レジーム」からの解放を進めるということがいかにありうるか、ということ、この「驚天動地」の事態の中で「夢想」している。』
(「反原発ラウンドテーブル 通信3号」(2011/10/20))

③ 私は、自らの力不足で流産させてしまった「死児のよわい」を数えるようなことをしていることになるでしょうか。確かにとっても未練がましいことです。私・たちの「沖縄と福島、そして私・たちがひとつに連なる〈声〉の蜂起を！」というモチーフが、たとえよき思いから発していたにせよ、点線で中絶したことをたどり返すというようなことは。しかし、私・たちはその点線の記憶を手放すことなく、2012年にかけて「沖縄セミナー」を進め、「アンラーニングプロジェクト・2012」では、さらに「日本の『構成』的解体」の方へにじり寄ることを試みてきました。——この間の経緯については、先にふれた『「拒否」の〈前〉線情報』を参照してください。

そして、今年、2013年です。私・たちは一方で、現にこうして顔を合わせている「アンラーニング・2013」を、この列島上の「拒否」の動線—〈前〉線のありようをみさだめ、それらが拓く地平に「日本の『構成』的解体」のベクトルを描く試みとしたい、と思っています。そして、他方で、その試みを多くの人々に共有してもらうことにむけて、『「拒否」の〈前〉線情報No.1』という小冊子のかたちで、発信しようとしています。

その小冊子の『「拒否」の〈前〉線情報』(というコーナー)で、私・たちは以下のようなテーマに取り組むことを予定しています。

第1号：「フリーター全般労組・反原発企画：『3・11北へ西へ。…』をめぐって」

第2号：「再訪・大飯原発再稼働阻止闘争」

第3号：『原発いらない福島の女たち』の軌跡／動線」

第4号：「ミクロ政治における『拒否』の動線」

第5号：「福島の現在：福島の生存線／福島への支援線の交錯としての福島」

どうか、「死児のよわい」を数え上げようとしたあとは、「未成の胎児のよわい」を指折り数え上げようとするのか、などと思わないでください。私・たちは、この列島上の「拒否」の動線—〈前〉線のありようを、愚直にたどり、「原発いらない福島の女たち」の鮮烈な軌跡—反原発の諸動線の間を〈と〉として運動する〈接続〉の動線を折り返し線として、「福島から」のスフィア—における動線—〈前〉線と、「福島へ／福島で」のスフィア—における動線—〈前〉線の〈接続〉を問題にすることへ進み出たい、と思っています。

この列島における「反原発」の前線は、「福島から」のスフィア—における動線—〈前〉線化の累積が、「福島へ／福島で」の動線—〈前〉線化と〈接続〉／出会うことにおいて、初めて現出するでしょう。私・たち〈と〉福島、西に行った人〈と〉北に行った人、「福島から」〈と〉「福島へ／福島で」、この〈と〉・〈と〉・〈と〉の動線こそが、この列島の「反原発」の前線となるでしょう。

さらに、言いつのれば、この列島における戦線は、まさに、「沖縄と福島、そして私・たちがひとつに連なる戦線！」として創出されなければならないでしょうし、創出されるでしょう。その創出こそが、「日本の『構成』的解体」の点線が実線化することに、他なりません。

以上、「ルール違反」をおかしながら、「アンラーニングプロジェクト・2013」の第4回で話したことの補足とします。

IN/OUT

「素朴な叫びよりもさりげない
はるかな暗号のように響き合う
言葉」(清田政信「遠い朝・眼の
歩み」)

仲里 効:「沖縄トワイライト」 ——重層する〈否〉の力動

7月13日の新聞には気が滅入ってくるような記事が載っていた。「非正規割合沖縄が最高」という見出しのそれは、5年ごとに行われている「就業構造基本調査」(総務省)の結果を報じたものであるが、前回に比べ非正規雇用が152万人増え、はじめて2000万人を越え、雇用者全体に占める割合も2.7%上昇、38.2%になったという。そのなかでも沖縄は非正規の割合が最も高く、四四・五%になっている。驚くべき数値である。このことの構造的問題は、野も山も人も破壊し尽した沖縄戦と長いむき出しのアメリカの占領によってもたらされた歪みが解消されないまま、日本の政治経済システムのなかに入り込まれたことによるインパクトの大きさにかかわっていると見えようが、直接的には86年の労働者派遣法、99年の派遣範囲の原則自由化、03年には製造業への派遣が解禁されることによって派遣労働者が一気に増大したことに原因を求めることができるだろう。沖縄が抱えるバイアスはその影響を最も強く受けたということになる。

非正規雇用率44.5%の背後には、沖縄に集中する1位と47位(最下位)の指標がひしめき合っている。すぐに思い浮かぶのは、完全失業率(全国の約2倍で1位)、年間平均収入(全国の7割で47位)、そして在日米軍基地施設面積(全国の7割で1位)などだが、『百の指標からみた沖縄県のすがた』の最新版を開いてみると以下のような数字が飛び込んでくる。すなわち出生率、人口増加率、死亡率(1位)、婚姻率(2位)と離婚率(1位)、第三次産業構成比(1位)と第二次産業構成比(47位)、財政力指数42位、自主財源45位、生活保護被保護世帯6位、高校、大学進学率47位などである。さらに細かく見ていくと、収入にかかわる貯蓄年収比率、可処分所得はいずれも47位で、死亡率のなかでは悪性新生物、脳血管、心疾患などによる死亡がいずれ

も一位であるのが目を引く。

これらの指標は「日本のなかの沖縄」を前提としているが、その結果は前提そのものを揺るがす内実をもっている。他に較べ高い1位と47位の密度から見えてくるのは、日本国家のなかに取り込まれながらも排除されている〈異物〉のような沖縄の存在である。トワイライトゾーン、そんな言葉さえ浮かんでくる。「県」という行政的な単位にはくくれない〈内国植民地〉としての沖縄の姿がそこにはあった。

ところで、この「百の指標」には拾われていないが、〈異物としての沖縄〉をもっとも象徴的に示すもうひとつの指標があることを知らされたのは、『沖縄の米軍基地と軍用地料』（来間泰男、榕樹書林、2012年）であった。基地の面積と軍用地料の変遷をたどりながら、沖縄に隠されている「内なる基地容認勢力」を批判して示唆に富む。戦後14年間は地主の受難時代であったにしても、島ぐるみの土地闘争を経て1959年に地料が引き上げられることによって土地を取られた人と取られなかった人との立場が逆転したこと、72年の「復帰」後は大幅に地料が上がり、今も上がり続け、沖縄社会に無視できない影を落としている問題に分け入っていた。たしかに新聞には「軍用地買います」の三行広告が載らない日はないし、銀行では「軍用地ローン」や「軍用地預金」の案内が薄ら笑いを浮かべて庶民の通帳を射すくめる。著者はこうした「高い」軍用地料＝増え続ける不労所得の諸問題として、一般地価の引き上げ、勤労意欲の減退、非効率な営業、贅沢と遊興、投機・詐欺の横行、相続争いなどを挙げ、そのうえで「すでに、沖縄には『地主階級』の分厚い層が形成されている。沖縄は『農業県』であるよりはるかに『軍用地料県』なのである」と述べていた。ちなみに08年の統計では、沖縄県全体の農業所得は408億円で、軍用地料907億円の45%にしかないという。ここには軍事植民地としてのもうひとつの沖縄の顔がある。

「すでに、沖縄には『地主階級』の分厚い層が形成されている」——この断言は衝撃的だが、正鵠を射抜いている。95年に3名のアメリカ海兵隊員による少女への陵辱をきっかけにして立ち上げられた反基地や社会変革へのうねりが、日本政府の振興策によって懐柔されていった過程は、沖縄社会を蝕む根っこの問題を明らかにした。こうした基地維持を補強する「振興策」や「軍用地主階級」と「軍用地料県」の病根を内側から鋭く抉り出していった一人に目取真俊がいる。

掌編「希望」には〈95年〉という年の出来事の決定的な意味が刻印されていて、それを3歳のアメリカ人幼児を殺害し、自らも焼身自殺で果てる主人公の青年（だと思われる）の絶望的な意識と行動によって抉り出していた。青年

を行動に駆り立てているのは沖縄社会がスポイルした〈悪意〉である。「今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ」という倒錯した意識と「最低の方法だけが有効なのだ」という零度の方法の内部には「反戦だの反基地だの言ったところで、せいぜいが集会を開き、お行儀のいいデモをやってお茶を濁すだけのおとなしい民族。(中略)軍用地料だの補助金だの基地がひり落とす糞のような金に群がる蛆虫のような沖縄人」という暗い底なしの情動が獣のように住み着いていた。青年のひりつくような方法は強い鋭角的な光源を持ってアメリカを否定し、同時に沖縄と沖縄人を否定する。そしてさらにそのような自己をも否定する。この重層する否の力動が「希望」というのなら、なんといたましい逆説だろう。いや、そうではなく、「希望」とは「絶望」の闘での命がけの飛躍なのかもしれない。

だとすれば、目取真俊の掌編「希望」の方法は、魯迅の『野草』に収められた散文詩「希望」のなかの「絶望の虚妄なることは正に希望と相同じい」という不明不暗の虚無点と重なっていると見做してもよいだろう。それともこう言うべきだろうか。「希望」の否定の弁証法は、「人間を食うのがおれの兄貴だ。／おれは人間を食う人間の弟だ。／おれ自身が食われてしまっても、おれは依然として人間を食う人間の弟だ」という被害と加害がねじり合わされた「狂人日記」の根源的な自覚の、時を隔てた分有だと。この場所から「この沖縄は政治も文化も貧しいシマだ。政府から金をもらうためには少女が軍隊に暴行されても最後は泣き寝入りしてしまう新しい生贄を捧げるシマだ。(中略)軍用地料という不労所得の旨味を味わい、自立しようという気概もないこの沖縄の貧しさ。少なくとも、この貧しさを直視するところから小説を書きたい」という「沖縄の文化状況の現在について」(『沖縄／草の根・根の意志』、世織書房、2001年)のなかの態度が選り取られたとしてもなんら不思議ではない。

だが、沖縄の文化状況は「貧しさを直視する」よりも、貧しさそのものを抵抗の身振りにすりかえる擬態を演じているのではないだろうか。そしてその身振りを物理的に保証しているのがほかならぬ不労所得としての軍用地料であるとなれば、貧しさと擬態は二重に翳っていくのがわかる。沖縄の文化状況で分泌しはじめた軍用地主〈階級〉の自己愛の影。

「希望」の青年のたそがれていく否の荒野には、44.5%を占めるワーキングプアの無名の群像が、流れ来ては流れ去る。「軍用地料だの補助金だの基地がひり落とす糞のような金に群がる蛆虫のような沖縄人」——私たちは地の底の泥のようなニヒリズムに濡れた声を聴く耳をもっているのだろうか。「人間

を食ったことのない子どもは、まだいるかしら？／せめて子どもを……」と「狂人日記」の最後のように、もしも「絶望」の閥から木霊してくる「希望」をつぶやくことができるとするならば、虚無の融点と格闘することなしにはありえないだろう。内国植民地と軍事植民地沖繩のトワイライトゾーン、そこには民族と階級の実存が互いに互いの尻尾を噛み合っただうつ修羅がある。沖繩の脱植民地化と自立・独立は、こうしたトワイライトゾーンに降り立ち、くぐり、内破を方法とする構成的力能なしにはありえないことを知らされる。

欧米や日本などによる中国分割と、他方、中国社会の半封建・植民地状況にあって、魯迅はほの暗い民衆のなかに分け入り、民衆自身が根源的に変るための方法を探りあてた。内破であり、重層する否である。その内破と重層する否を方法とすることによって〈狂人〉と〈阿Q〉は造型されたといえよう。そうといった意味で、〈狂人〉と〈阿Q〉は実体である以上に根源的な像である。中国の民族と階級の実存であることに間違いはないが、それ以上に関係概念であり方法である、といえよう。

沖繩は根源的に変っていくために一人の〈狂人〉と〈阿Q〉をもつことができただろうか。これまで不問にしていたことを明らかにしなければならない。それというのは、掌編「希望」の主人公を「青年」と見立ててきたが、特定の主体の人称をもっているわけではなかった。非人称の主人公とは何か、いや、誰か？ 非人称の主人公とは、実は、この沖繩で〈狂人〉と〈阿Q〉を孕む、つまり沖繩自身が変わるための根源像を獲得するための、重層する否の構成する力動だったのではなかったか。なぜなら「希望」のモチーフはまぎれもない〈変身〉であるのだから。民族と階級の実存が互いに互いの尻尾を噛み合っただうつ修羅の向こうに、視えてくるのはいったい何だろう。

「拒否」の〈前〉線情報

この列島の反転へ向かう未成の「拒否」の前線—その予兆としての〈前〉線＝色とりどりの『身体の述語たち』の軌跡／動線を「寄せ木細工」する試み

再訪「大飯原発再稼働阻止闘争」

はじめに

1. 求められる「全国陣型」の創出

「3・11」から2年半。現状を無視した「収束宣言」後も、「汚染水」の海洋への流出は止められず、すでに「収束計画」そのものが破綻してしまっており、「事故」はむしろ拡大し続けている。

一方で、きわめて政治的かつ強引な住民「帰還」計画が強行され、被曝についての住民への「自己責任」の押しつけばかりが横行する。肝心な住民、とりわけ子どもたちに対する医療支援はほとんど進まず、住民間の分断ばかりが図られている。

これでは「3・11事故」の被害者はまるで日本という国家から見捨てられた「棄民」同然ではないか。

政権発足後、安倍首相は自らが原発輸出のトップセールスに立ち、あらゆる外交的機会を使って、アジア・ヨーロッパ各国に「日の丸原発」とその附帯技術や関連インフラを売りまくる。原子力産業の代理人のごとく振る舞っている。電力各社はこの国を挙げての原発推進の追い風を受けて、一気に自社の停止中原発の再稼働を推し進めようと、7月8日の原子力規制委員会への申請受付に殺到した。4電力会社12基の再稼働審査の申請が受理された。

こうしたいわば「再稼働の嵐」が到来するとき状況の中で、個々の原発再稼働阻止の地域ごとの闘いの枠を超えた全国の運動がつながっていく、いわば「全国陣型」をどう創り出していくかが、大きな課題としてせり上がってきている。

「再稼働の嵐」の前に

「3・11」以後、これまでの反／脱原発運動とは異なるさまざまな運動が出現してきた。これらの運動は、それを構成する人々の集まり方も、その表現スタイルも、これまでの運動の枠を超えたものとなっている。そういった新しい運動とこれまでの反／脱原発運動が互いに影響し合いながら、わずかの間に、各地でさまざまな運動の「動線」を引いてきたと言える。しかし、その多種・多様な「動線」は、未だに相手に対して対峙しきりだけの力を創り出しているとは言えない。

そうした中で、2012年6月30日から7月2日にかけて展開された「大飯原発再稼働阻止闘争」は、まさに突出していた。大飯3・4号機の再稼働を必ず阻止しようと、いくつもの「動線」が集中し、組み合わせあって、相手と対峙するくっきりとした〈前〉線を拓いていったのだ。

今この「大飯の闘い」を〈前〉線を拓いていったひとつの大きな経験として共有し、押し寄せつつある「再稼働の嵐」と対決していくことが、各地で闘う反・脱原発運動に求められているのではないかと思う。

そして、この2012年の「大飯原発再稼働阻止闘争」の経験を共有する中で、いくつかの再稼働阻止の〈前〉線が創り出されていくとき、「棄民」化の波にさらされ続ける「福島」への反転攻勢のありようもまた拓けてくるのではないだろうか。

2. 「新しい現地闘争」の創出と楕円の形成

新開さんと寺田さんに伺った話から

この7月に、京都に出向き、「STOP☆大飯原発再稼働阻止現地アクション」に中心にかかわっている新開さんと寺田さんのお二人に「大飯原発再稼働阻止闘争」について、伺う機会をもった。以下、そのとき伺ったことを整理してみよう。

大飯原発3・4号機の再稼働問題が大きく浮上してきたとき考えたことは、60年代から70年代にかけての反戦・反安保の闘争経験とそれを基に2000年代に入ってから地道に形成してきた「反戦・反差別・反貧困共同行動」（以下「反戦共同行動」と略）の取り組みの蓄積に基づいた新たな「現地闘争」をいかに構築するかということだったという。もちろんかつての「現地闘争」＝「反原発地域住民闘争」がそのまま復活することはあり得ない。かつての運動主体は高齢化し、原発立地市町村はますます原発への依存を深めている。しかし、「3・11」以後、「現地」をめぐる概念はさまざまに拡大しており、新たな「現地闘争」を創り出す可能性が生まれてきていると判断した。

一方で、以前からの反／脱原発運動は、新しい「現地」をめぐる運動の必要性は認めつつもそれを自らが担うことに、なお手が届かず、また、全国型のスケジュール闘争や、平和

運動センター等によるカンパニア闘争もすでに限界にさらされており、「新しい現地」をめぐる闘いは、主体的にかかわる見込みは全くなかった。

新開さんたちは、それまでの「反戦共同行動」の蓄積と「3・11」以後、新たに飛び出してきた若者たちの運動とを組み合わせ『STOP ☆大飯原発再稼働阻止現地アクション』を2012年春に発足させる。「新しい現地闘争」を担っていく、新たな陣型の創出をめざす第一歩が踏み出された。

幾重にもわたる橢円の形成へ

『STOP ☆大飯原発再稼働阻止現地アクション』が「新しい現地闘争」を出現させることができた背景には、幾重にもわたる橢円の形成がある。橢円とは、中心が1つの同心円と異なり、2つの焦点をもち、その焦点をそれぞれが自在に動き回ることによって創り出される(動線)の軌跡だ。『STOP ☆大飯原発再稼働阻止現地アクション』の運動・動きこそがまず最初の橢円であった。それは若狭と京都という二つの「根拠地」を自在に動く、そのありように表出されている。

新開さんたちは、若狭にも軸足を置くために、地道に人とのつながりをつくっていった。まず、40年以上にわたって住民運動・市民運動の流れを継続している小浜市の中畷哲演さんをはじめとする人々との関係を深めつつ、新たにおおい町周辺に移ってきた人々との出会いもつくっていく。その一方で、長谷川羽衣子さんに象徴されるような、「3・11」以後に新しく出て来た人々による運動と、京都での、連携、連動を強めていた。

こうした『STOP ☆大飯原発再稼働阻止現地アクション』の動きに、身軽で新しい関係づくりにも意欲的な若者たちと、テント生活のベテランの人たちの集まりによる「再稼働監視テント村」と呼ばれる営みが加わり、おおい町とその周辺への働きかけが強まっていく。もう一つの橢円だ。

さらに、5月頃から関係閣僚らがたびたび、福井県庁を訪ねるようになり、福井県庁やその隣の中央公園での行動や集会が大飯原発再稼働をめぐる動きの中で大きな意味を持ち始める。その福井を新たな焦点とした動きがさらなる橢円を作り始める。「3・11」前から福井市など嶺北地域で活動してきた人々と京都をはじめとした関西各地から駆けつける人々とが、そこで絡み合っていく。私・たちも富山から何度か参加を重ねた。その橢円の中には、住民運動あり、市民運動あり、労働運動ありとさまざまな人々が混在した。

そしてその外側に、「経産省前テントひろば」、東京「たんぼぼ舎」など、主に首都圏で活動する人々が、「大飯原発再稼働反対」をアピールする多様な活動を、東京であるいは大飯周辺で、福井で展開し、もう一回り大きな橢円を形成していく。さらには毎週金曜日の官邸前行動も全国へと呼びかけを拡げながら大きな大きな橢円の広がりを作り出していった。

こういった幾重にも重なり合った楕円の創出こそが「大飯原発再稼働阻止」の闘いの強さとなり、〈前〉線を創り出していく大きな力となったのではないだろうか。

3. 一つの範型としての「大飯原発再稼働阻止行動」

6月30日～7月2日の行動から

2012年6月30日、この日の行動のありようこそが楕円の軌跡そのものだった。大飯3号機の再起動に抗議する集会在原発正面ゲートから5 km ほど離れたおおい町の中心部で午後から開かれていた。そちらに続々と参加者が集まっていくなか、警察や警備陣もおおい町役場周辺に集中して配置されていく。正面ゲートが手薄になった。またその隙を突いてテント行動を担っていたメンバーらが、ゲートの鉄柵にチェーンを使って数台の車を繋ぎ、原発再起動に立ち会う予定の副大臣らの入場を阻止する。7月2日未明に至るまでのゲート前「オキュパイ」行動の始まりだった。この日、開かれた、一方のおおい町中心部の集会+デモ行進ともう一方のゲート封鎖行動そのままに楕円を成す〈動線〉が、一気にゲート前に集中する。それが「大飯原発再稼働阻止」の〈前〉線の現出だった。デモ隊列は続々とゲート前に集結、緊張した対峙関係が「敵」との間に続いていく。そして、どこかにこの行動の司令塔(中心点)があるわけでもないのに、その場に居合わせた誰・彼からツイッター等で、ゲート前攻防のありようがまさにリアルタイムで伝えられ、それを受けとめたさまざまな人々が次々とそれを伝播し、取るものも取りあえず、全国各地から、人々が集まっていった。そのすさまじい情報のやりとりは7月2日に至るまで続いた。

そこには、それこそ「大飯原発再稼働阻止」という目標の一点に向かって、幾重にもわたって形成されていった楕円のありようそのものが間違いなく投影されていた。

「新しい現地闘争」を闘おうと始まった『STOP ☆大飯原発再稼働阻止現地アクション』の取り組みが、いくつもの楕円の動きを呼び起こし、これまでの反／脱原発運動が持ち得なかった自らの力によって〈前〉線を創り出していく「地平」を切り拓くことができたのだ。

〈前〉線を創り出していく、一つの「範型」として

以上で見てきたように、この「大飯原発再稼働阻止闘争」は間違いなく、今後の反／脱原発運動のみならず、日本の社会運動が本当に「敵」と対峙し、この列島上のすべての人々から認知されるような、そういう前線形成の予兆としての〈前〉線の現出の一つの「範型」としてある。

ここでもう一度そのポイントを繰り返し要約すると、以下のようになる。

- 1つには、「現地」での闘いということにこだわって、意識的に「新しい現地」なるものを析出するよう働きかけを行っていったこと。（そこに以下にふれる橿円の動線の基底が創り出されていたこと）
- 2つには、その「新しい現地」を支え、含み込む幾重にもわたる橿円を創り出していったことではないだろうか。

原発の再稼働問題を抱えるそれぞれの地域はどのように、この「大飯の闘い」を一つの「範型」として受けとめ、さらにどのような陣型を構築していくことができるのだろうか。

それらの地域・地域で〈前〉線を生み出していくような「新しい現地闘争」が闘われ、それぞれの「新しい現地」に根ざした橿円が形成されていくとき、冒頭にふれたような「全国陣型」が自ずと生み出されていくに違いない。

この「全国陣型」が形成される時こそ、それを一つの焦点、「福島」をもう一つの焦点とする橿円が浮上するだろう。そのときこの列島上の反／脱原発運動は、初めて前線を拓く地平に立つことになるだろう。

しかし、ひるがえってそれぞれの地域にとって「新しい現地」とはどのようなものであり、橿円はどのようにして形成できるのだろうか。

その問いを何度でも問い直すことが必要なのではないか。ここに、『拒否』の〈前〉線情報として「大飯原発再稼働阻止闘争」を「再訪」した所以がある。

大飯原発再稼働阻止闘争の動線

全国行動・現地行動 2012・3-7

月日	a. 全国行動	b. 現地行動 (*1)	c. 推進側の動き
2012 3/25		・原子力発電に反対する福井県民会議 「大飯原発3・4号機『再稼働』に慎重な判断を求める市民集会」(福井中央公園)(中 島哲演さん 3月31日まで県庁ロビーでハ ンスト宣言)	
4/4		・美浜の会・グリーンアクション 「石橋克彦氏講演集会」(おおい町)	
4/7	「大飯原発再稼働を許さな い4・7関西集会」(大津な ぎさ公園)		
4/10		・「大飯原発再稼働監視テント」 監視行動スタート(「現地行動宣言」) (*2)	
4/12			おおい町長名で退去要請
4/14	・「大飯原発再稼働絶対阻 止!『集団ハンスト』」(経産 省前テントひろば)(*3)	・「枝野経産相福井訪問」抗議・申し入れ行 動	枝野経産相 福井県庁へ
4/18			4・26「住民説明会」開催決 定
4/21	・止めよう原発・関西ネット ワーク 「眠れ、大飯原発再稼働さ すな!」集会—関電本社ま でデモ・関電ヒューマンチ ェーン		
4/22		・「再稼働を許すな緊急集会 in 小浜」 (*4) ・「4・26住民説明会」への反対街宣	
4/23	・牧野経産副大臣滋賀・京 都訪問 抗議行動	・「STOP ★大飯原発再稼働 現地事務 所」開設準備 (*5) —東京たんぼぼ舎・経産省前テントひろば ・福島 of 椎名千恵子さんらと交流・意見交 換	

		・「監視テント」増設	
4/24		・「4・26 住民説明会」への抗議行動呼びかけ (*6)	4・26「住民説明会会場」近辺封鎖
4/25		・「4・26 住民説明会」への反対各戸ビラ・街宣	
4/26		・「4・26 住民説明会」 会場前街宣	政府主催「おおい町住民説明会」開催
4/29		・おおい町役場前 抗議行動呼びかけ	
5/1		・おおい町役場前 街宣・座り込み	
5/2		・おおい町役場前 街宣・座り込み	おおい町役場から座り込み立ち退き要請
5/3		・おおい町長宅前 座り込み	
5/5		・「監視テント」―「全国原発ゼロ声明」(*7) ・おおい町長宅前 抗議街宣	
5/21		・安全委抗議―福井駅前街宣―県庁結集―傍聴	福井県「原子力安全委員会」開催
5/22		・「5・26 もうひとつの『住民説明会』」 おおい町内ビラ入れ	
5/23		・おおい町戸別訪問で住民と対話 ・「もうひとつの『住民説明会』」連帯緊急監視テント 設置	
5/24		・おおい町議長糾弾 町役場	おおい町議会協議会開催
5/25		・おおい町議長宅前 抗議行動	
5/26		・「もうひとつの『住民説明会』」 主催 「STOP ★大飯原発再稼働現地アクション」(*8)	
5/27		・福島的女性たちを囲む 小浜・おおい連続交流会 (*9) ・「監視テント」活動再開―公園北端に移動(*10) ・おおい町議長追撃抗議行動	
5/28			公園草刈りのため立ち退き要請
5/30		・「6・4 再稼働反対福井・全国緊急集会」呼びかけ	牧野経産副大臣など常駐 細野環境相 関西広域連合訪問
6/1		・おおい町役場 抗議街宣	
6/2		・関電前から「監視テント」に合流 (*11)	細野環境相 6・2 福井県庁訪問へ

6/3		・〈いのちが大事 今なぜ再稼働？ふくいでつながろう〉「再稼働反対福井・全国緊急集会」(福井中央公園)	
6/4		・県庁前 抗議行動	細野環境相 県庁入り 県庁前厳戒態勢
6/5		・県庁前 抗議座り込み 6・10まで	
6/7	6・29「大飯再稼働は許さない! 女たちの国会前アピール」への呼びかけ (* 12)		
6/10		・県庁前 抗議座り込み—「原子力安全委員会」へ抗議結集	「福井県原子力安全委員会」 開催一傍聴者を残し別室で
6/11		・「原子力安全委員会」へ共同抗議声明	「原子力安全委員会」緊急了承
6/13		・6・16-17「大飯!ど・フリー行動!」 呼びかけ (* 13)	おおい町長同意 町議会全員協議会で報告
6/15		・「監視テント」増設	政府 大飯原発再稼働決定
6/16	「4閣僚会議による大飯再稼働決議を許さない!」 (10万人超の人たちによる官邸前抗議行動)		
6/17		・〈いのちが 大事今なぜ再稼働？ふくいでつながろう〉パート2「再稼働反対緊急福井・全国集会」 (* 14) (* 15) 「監視テント」と交流	
6/18		・大飯原発間近で再稼働反対! 命を守れ! のコール おおい町役場にも申し入れ(* 16) ・おおい町内4千枚チラシ戸別配布	
6/22	再稼働反対! 官邸前抗議行動 4万5千人	・「6・23~30オキュパイ大飯1万人招集」 ・大飯よりUst 中継開始	
6/23		・「ど・フリーウィーク」中継開始	
6/24		・「STOP 原発再稼働! 6・30おおい集会」への呼びかけ (* 17)	7・1 稼働スイッチ入れの予定
6/28		・毎日 Ust で配信 ・「テント」のべ400人	
6/29	・「6・29大飯原発再稼働を許さない! 女たちの国会前アピール」(主催「原発いらぬ女たち」) (* 18)		

	・「6・29緊急！大飯原発再稼働決定を撤回せよ！首相官邸前抗議」（*19） （*20）		
6/30		・「STOP 原発再稼働！おおい集会」(あみーシャン大飯ふれあいホール)(主催「STOP ☆大飯原発再稼働現地アクション」) 集会後、デモ「オフサイトセンター」で抗議申し入れ（*21） ・「監視テント」参加者など「大飯原発正面ゲート前封鎖・占拠」（*22）	
7/1		・「STOP ☆大飯原発再稼働現地アクション」など、ゲート前封鎖・占拠へ合流 ・「大飯原発ゲート前封鎖・占拠」継続中（*23）	7・1 21:00 制御棒引き抜き予定
7/2		・深夜午前 2 時頃まで「大飯原発ゲート前封鎖」貫徹!!（*24）	7・2 0:00 機動隊撤収

関連表の注

（*1）

「b. 現地行動には、福井で行われた全国結集／大飯周辺地域での集会／大飯現地での「STOP ★大飯原発再稼働現地アクション」／「大飯原発再稼働監視テント」などの動線が含まれている。

（*2） 大飯原発3、4号機再稼働反対、現地行動宣言

『反・脱原発をもとめる心ある人々に訴えます。』

フクシマの過酷事故は何ら収束されていません。今も死の灰がまき散らされています。まき散らされた放射能に日々苦しまされている福島の人々がいます。

フクシマは“鬼”になる

昨年の東京の集会で発せられたフクシマの言葉です。国と東電の無責任と棄民化政策ともいえるやり方への怒りです。今年、3、4月に入って国と関西電力はなにが何でも原発再稼働へ突っ走っています。はじめから予定されていたように。ストレステストの妥当評価、審査基準、工

程表、国の正面突破攻撃です。70%～80%の脱原発の民意をあざ笑うかのようなやり方です。原発は20年間本当に事故が毎年のおきていたのです。その一つ一つに正しく対処せず、情報隠しに終始してきた結果がフクシマ「過酷事故」シビアアクシデントでした。そうした反省にたつて全面的に見直さなければならないのです。私たちの再稼働の声を無視して「丁寧に粛々で行う」(野田総理)と、政府がやろうとしている再稼働ごり押しは安全性をないがしろにした新たな安全「神話」づくりです。これではこれまでと同じ元の木阿弥ではないのか。絶対許せません。もう我慢の限界です。

次は何か

原発現地での体をはった行動です。署名や集会も重要です。しかし、力を出し惜しみしてはなりません。全身全霊をかけた行動がもとめられています。スリーマイル島原発事故、チェルノブイリ原発事故の際、もりあがった運動のその後のようにしてはいけません。フクシマは訴えているのです。ここで引いたら、国の思うつぼです。私たちは大飯原発現地に再稼働反対のテントを張りたたかいます。現地攻防に打って出ます。静謐な「漁業」の町に乱を起こし、反対の声を上げます。たたかいは勝負所があります。ここでの攻防をたたかい抜きます。全国の心ある人々に訴えます。是非、現地に結集してください。応援支援に駆けつけてください。孤立したテントをテント村にしよう。オキュパイテントです。テントの力で再稼働を押し返そう。

ゼロ化が焦点

長いたたかいの中で、それでも運動の転換点は存在します。5月5日、現在稼働している唯一の泊3号機が停止します。全国54機の原発すべて停止するのです。国と政府はこのことの政治的意味を知悉しています。「ゼロでもかまわない」への流れが大きくわき起こってくるでしょう。そう、3週間が勝負所です。ここでいかなるたたかいが展開されるのか。反原発運動の転換点です。ここでたたかわなくてどうするのか、が突きつけられているのです。安全を無視し「政治判断」なるもので再稼働しようとしている国、経済産業省に痛打を与えよう。なんとしても再稼働をもくろむなら、なんとしても再稼働阻止をたたきつけよう。

オキュパイテントはみんなのものです。みんなで守り抜きましょう。

シュラフとテントを持っている人は是非参加してください。持たない人も訪問、支援、激励してください。全国の心ある反・脱原発の人々に訴えるものです。

(2012年4月10日 「大飯原発再稼働監視テント」)

(* 3) 4月17日(火) 晴れ 後 雨。

『今日が「集団ハnst行動」の初日。正午からは大規模な記者会見が開かれる予定である。朝から気持ちよく晴れ上がっている。もう10時集合より30分前にFさん、Eさんがやってきて、バ

タバタと準備を始める。テントの前には、脱原発テントの横幕の下に、「大飯原発再稼働絶対阻止！集団ハnst」の横幕が掲げられる。

用意が整う頃、11時半にはもうかなりの人が集まっている。そして揃いの法被を着て鉢巻きをしたハnst者が並んで座り、正午を期して記者会見は始まった。

元国立市長の上原公子さんの司会、淵上代表のハnst宣言で始まる。沖縄選出国會議員の照屋寛徳さんの沖縄の立場をもって反原発を訴え、「福島の子たち」の黒田節子さんが続く。広瀬隆さんの紹介で中島哲演さんがハnstにこめた、若狭の歴史の深みから立ち上がってくるような思いを語る。1000万人署名の鎌田慧さん、落合恵子さん、國會議員の服部良一さん、川田龍平さん、福島出身の講談師・神田香織さんが続く。広瀬隆さんは関電のウソを暴き、服部良一さんは、怒りと責任の思いをもって今この時から48時間ハnstに入ることを表明した。この集団ハnstの主唱者・江田さんが大きな広がりをもった運動としての「集団ハnst行動」の方向性をアピール。

(中略)

ともかく「集団ハnst行動」初日は大成功のうちにスタートした。これを竜頭蛇尾に終わらせることなく、持続する運動、広がりと集中をもって再稼働阻止の大きなうねりと凝集力を創り出していく運動としていかねば……。

(「テント日誌 4/17日(火) 経産省前テントひろば 220日目」)

(＊3のつづき) 原発が止まった日！その歴史的な子供の日に新たな繋がりを！カンショ踊りの音は霞ヶ関にこだまし太陽と月が祝福！

『晴れた！「こどもの日」に相応しい快晴の朝を迎えました。この数日の空模様とはうって変わり、営業用原発の稼働がゼロとなる今夜を控えてそれを祝福するかのようです。』

この日は「集団ハnst」の最終日と、泊原発が定期点検に入って日本で42年ぶりに全原発停止・発電稼働ゼロを迎える歴史的記念日。そのセレモニーを正午から経産省前テントひろばで行い、今まで一緒に活動をして下さった方々や支援を惜しみなく注いで下さった多くの皆さんと、まずは日本から原発の火が消えたことを素直に喜び、再稼働阻止という新たな闘いに向かう決意を確認する日です。何よりも子ども達にそれをプレゼントできる事を喜び合いたいのです。

Q さんが体調を崩されたということで見えていないのが残念。何よりもこの日は彼と迎えたかった。そして天国の蔵ちゃんとも。見てるかな？蔵ちゃん？晴れた空の上からきっと一緒に参加し

てくれてると思うと胸が熱くなります。

12時を少し過ぎ、瀧上太郎代表の挨拶でセレモニーが始まりました。いつもながら瀧上さんの言葉は力強く、明快で私たちの気持ちを鼓舞してくれます。続いては福島の椎名千恵子さん。今日を迎えたお気持ちと「未来を孕むとつきとおかのテント行動」の意味を語りますが、最初の言葉に胸が詰まります。

『今、福島の子どもたちは復興気分の中で利用されています…。』今の福島の現状はこの言葉によく表されています。一年が経っても何ら事態が好転しないで、「安全・復興キャンペーン」に子どもたちを動員し、さらなる被曝を強いていく政府・県に対して怒りを覚えますが、原発が止まっても何ら困らないことを知らしめて、脱原発運動を更なるステージに高めようと思う気持ちを再確認させてくれる言葉でした。

最後に7日間という長丁場をハンストされた江田忠雄さんの言葉で締めくくってセレモニーを終えました。もちろんこの後にこの日用意した「柏餅」「鯉のぼり」等などが皆さんに振舞われました。「柏餅」が好評だったのでホッと一安心です。（後略）

（「テント日誌 5/5(土)一経産省前テントひろば238日目」）

（＊４） おおい町住民への各戸チラシ配布・訪問アンケート調査 安全への不安と雇用不安の板ばさみにゆれる住民

『4月21～22日、「プルサーマルに反対する若狭の普通の民の会」（以下「民の会」）ら4団体が、おおい町住民を対象にしたアンケート調査を行った。大飯原発再稼働について、「賛成」「反対」を問うのではなく、町民の複雑な心境や、「何が心配であるか？」を表明してもらうことを目的としている。

原発再稼働については、住民間で、心配ごとや複雑な胸の内を話す機会はほとんどないという現状があるため、アンケートという形で、町民の思いを表明してもらうことを計画した。

アイリーン・スミスさんもそのひとり。同女史は、美浜原発細管破断事故（1991年）の際も地元に入り、住民へのビラ配りを続けてきた。

地元住民の反応について同女史は、「運転が止まっているので、生活は本当にたいへんになっている。生活と安全性への疑問の板挟みになっている」という。それでもビラを渡すと、地元住民からは「ごくろうさま」との言葉が返ってくるので「感激する」と語っている。

（後略）

（「ピープルズニュース」 2012/5/9）

（＊５） 再稼働阻止の現地行動事務所準備中

『原発再稼働で焦点になっている福井県おおい町に、再稼働に反対する京都・大阪・滋賀の活動家らが「STOP☆ おおい原発再稼働 現地アクション」として、5月5日頃の開所をめざし、

現地事務所を準備している。今後「バイバイ原発・京都」(代表・長谷川羽衣子さん)メンバーらが常駐し、住民への各戸チラシ配布・訪問アンケート調査など行う予定。

これとは別に、大飯原発への道路脇には、監視テント5張がすでに設置されており、再稼働が決定された場合には、座り込みなどの直接行動も取り組まれる。

長谷川さんらは、枝野経産相の福井県庁訪問(4月14日)の際にも抗議行動に参加。15日にはおおい町に移動して、再稼働反対の申し入れ行動を行ってきた。

その後も、おおい町と京都を往復しながら準備を進め、23～24日には、「原発いらない福島の女たち」・たんぼぼ社(東京)らと協議し、住民を対象に、福島の実験を語る交流会・茶話会なども計画している。

26日のおおい町住民説明会が終わると、時岡町長の政治判断に焦点が移っていく。現地事務所は、①おおい町住民と京都・滋賀・大阪住民の信頼関係をつくり出し、②時岡町長に対し、住民の不安をしっかりと受け止め、セレモニーだけで再稼働容認を打ち出さないよう監視する拠点として、機能することになる。

(「ピープルズニュース」 2012/5/9)』

(* 6) 「STOP☆ おおい原発再稼働 現地アクション」チラシ第2号

『現在、原発再稼働が焦点になっている福井県大飯町に京都・大阪・滋賀のメンバーを中心に「STOP☆おおい原発再稼働 現地アクション」として「バイバイ原発・京都」の長谷川羽衣子さんをはじめ5人～10人くらいが入っています(テント5張の開設と民宿での現地事務所を設置して)。主に現地で住民の方々への各戸チラシ配布など行っています。明日まくチラシです。(私は後方支援要員としてこちら[京都]で印刷して現地に発送)寝袋持参であればテントで泊まれます。現地を訪れたい方は一度、「STOP☆ おおい原発再稼働 現地アクション」までご連絡下さい。

「STOP☆ おおい原発再稼働 現地アクション」のチラシ第2号

おおい町のみなさま

原発再稼働は子どもや孫たちによい結果をもたらすのでしょうか

わたしたちは関西一円からおおい町にやってきました。というのはこのたびのおおいの原発再稼働がとても不安だからです。長年、わたしたちはおおいをはじめ若狭の原発からの電力にたよって暮らしてきました。その恩恵はとても大きなものでした。不安をかかえながらもおおい町のみなさんはその供給源のまちで暮らしてこられました。わたしたちはそのことに対して十分な思いやりを持ちませんでした。心より反省をしています。

今、福島の大変な犠牲で原発が根本的におおきな危険性を持っていることが誰にも分かりました。また発電後の廃棄物が科学や技術では解決できない、将来にわたってのマイナスの遺産

になってしまっていることも分かりました。また若狭で重大な事故が起これば琵琶湖の水が汚染されてしまうこともあきらかです(その意味では京都も滋賀も大阪も「地元」なのです)。だから原発の稼働については慎重な科学的実証と、本当に必要な電源であるかどうかを考えなおす必要があります。

関電が出している工程も津波対策や大地震対策について全く未着工状態です。それでも野田政権はおおいの原発をすぐにも再稼働させるといっています。まだ福島大事故の原因も究明されていません。なぜこれほどまでしておおいの原発を再稼働させるのでしょうか。夏の電力も企業や家庭が真剣に節電すれば不足しないことは去年の経験で分かっています。今日も関西では原発の電力はゼロのまま、経済活動も生活もなにひとつ問題は起きていません。

おおい町にとって、原発はほんとうに必要なのでしょうか。関電からお金をもらわずに、地元の商店や会社が経営を維持できるような対策を真剣に考えてみようではありませんか。NHKの世論調査ではおおい町でも 38 パーセントの人が原発再稼働に反対、または不安を持っておられる、と報道されています。この美しい海や町は子どもや孫たちにとってなによりの遺産です。またそれは関西一円で暮らす、すべての人びとの貴重な宝物です。そのことの意味を私たちもみなさんとともに考えたいと思っています。

まず再稼働をやめて、主人公である地元のみなさんとともにおおいの未来を考えましょう。おおいのことは大阪や東京で勝手に決めてもらっては困るのです。地元が完全に納得できるまで何度でも住民への説明をもとめましょう。子どもや孫たちのために。

2012年4月24日』

(* 7) 声明 5月5日、全国の原発ゼロ化をかちとる

『本日、54 基 or 50基の全原発が停止した。一機残っていた北海道泊原発が停止した。現在、日本の全原発が停止し、ゼロ化を勝ち取ったのである。もちろん、喜ぶべきことだ。

たたかう皆さんと率直に喜ぶたい。

▼再稼働をめぐる攻防

これまでの再稼働を巡る攻防を若干振り返り、中間総括を確認したい。

昨年2011年12月16日、突如福島原発過酷事故の収束宣言が野田首相から出された。ここから再稼働工作が本格的に開始されたとみるべきである。

憶測をはらむが、事態をわかりやすくするために区切って考えてみる。それまでの無策から一転した陰謀的ともいえる策動が水面下で行われる。福島原発シビアアクシデントの忘却策動である。3月11日、福島での県民集会をめぐる陰謀だ。「安心できる復興を」をメインスローガンとしようという策動だ。集会スローガンから反・脱原発を消し去り「復興」に向けての大キャンペーンをおこなおうとした。3月11日、郡山集会で大江健三郎さんが、集会冒頭、「この集会は非常に困難

な状況をうち破って勝ち取られています」といみじくも述べたように、反動の波が押し寄せていたのです。

これに対して「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」の女性たちを先頭にねばり強いたたかいで、集会は反原発のたたかいとして勝ち取られ、加藤登紀子さんほか福島の人々の反原発の声が会場を圧倒し、敵の策動は木っ端みじんに粉碎されたのです。だから、県知事も郡山市長も出席しなかった。

しかし、この間、2月には平行して再稼働に向けて、ストレステスト「妥当」工作が経産省、保安院によって続けられた。これらは再稼働に向かつての政府と電力会社の出来レースである。シナリオを書いたのは、仙石政調会長代行といわれている。

そして、3、4月は野田政権の「再稼働ありき」のシナリオ、出来レースとの連続したたたかいとなる。枝野発言に翻弄されつつも、確固とした再稼働反対のたたかいが性根を張る過程であった。

▼たたかいを牽引した3つの行動

一つは、政府4閣僚会議の「再稼働は政治判断」なる超弩級の反動に対して、首相官邸前で連日1000名をこえる直接行動が執拗にたたかわれた。ツイッターで集まった人々の行動力が遺憾なく発揮された。

さらに経産省前テントひろばのハnst宣言。これまでの半年を越えるオキュパイテントのたたかいに依拠しながら、大きなインパクトを与えた。そこでは福島的女性たちの切実な思いが全国的な影響力を創り出し、諸人士のたたかいを生み出した。

二つは、地方自治体への直接行動だ。

4月9日夜、突如、設営された大飯原発現地の原発道路沿いのオキュパイテントを皮切りに、14日福井県庁での枝野説明に対する大衆的な抗議闘争。滋賀県庁、京都府庁での経産省の説明に対する連続的たたかい。関電本店、京都支店への直接包囲行動が幾度もたたかわれた。

そして4月26日、おおい町住民説明会への原発「疑問、不安」派住民への激励・支援行動がたたかわれた。住民説明会では、不安と疑問、今までは言えなかった反対の声すら出た。柳沢副大臣は「意見は反対の方が出る」とし、「理解は進んだ」と苦しいいいわけをした。時岡忍町長は集会警備費に2600万円をかけて説明会を仕切り、「目的は達成された」と開き直った。

これに対して、5月1、2日、時岡町長弾劾の声が町役場前であがったのである。5月1日には6人の地元の住民も参加した。5月1日、小浜でひらかれた住民説明会は、多くの反対の声で原子力安全・保安院はたじたじとなった。「全関西が地元だ」というたたかいは展開されたのだ。

三つは、1000万人署名運動をはじめとする全国の地道なたたかいは基礎に座っていることです。

自分自身ができることにこだわりながら、脱原発を目標に、様々な運動と連帯しようとしている人たちのたたかいだ。20年前、30年前と同じように反原発運動が衰退していくのか、それとも新

たな持続的運動と圧倒的高揚を創り出すことができるのか、運動全体の展開とそれぞれ個別の問題が突きつけられているといえよう。この狭い日本に54基もの商用原発が作られたことをかみしめよう。懺悔ではなく、事実に対する反省を、だと思ふ。

▼たたかいは、これから

このようなたたかいでひとまず再稼働は阻止され、原発ゼロ化は勝ち取られた。

しかし、福島では「避難も、補償も、なにもなされてはいない」——このことを絶対忘れるな、である。

再稼働を巡るたたかいは、第二ラウンドに入ったといえるのか。ゼロ化はひとまず勝ち取った橋頭堡だ。率直に受け止めよう。だが、たたかいはこれからだ。

7、8月に向かって、「電力不足、計画停電と電気料金の値上げキャンペーン」とのたたかいは始まっている。経済と命の問題だが、実は簡単ではない。確信はフクシマを忘却させる敵の攻撃と真っ向からたたかうことである。大衆的な直接行動を徹底的にたたかうことである。運動の基礎としての率直な怒りを行動に転化させることである。この積み重ねの中から運動の論理と指針がわき出てくることに確信をもとう。

長いたたかいになるが、「絶対負けない。なぜなら勝つまでやめないから」(日本航空CCU・内田妙子さん)の心意気でたたかおう。

〈経産省前テントひろば〉と同志的連帯でたたかいます。4月9日から始まったオキュパイテントは延べ9張り、現在7張りです。一端5月6日で完全撤収します。

2012年 5月5日 大飯原発再稼働監視テント』

(* 8) 「5・26 もうひとつの『住民説明会』」に150名、画期的成功

『大飯原発再稼働の動きに立ちふさがる、「5・26 もうひとつの『住民説明会』」が、画期的成功をおさめた。参加者は地元住民を先頭に 150 名。大半は京都・滋賀・大阪・兵庫からの応援部隊(阪神からも 6 名参加)だったが、この間テレビにも出てきているおおい町民も何人か見受けられた。

最初は椎名千恵子さんら 5 人の福島の女性の訴え。それぞれ自分の経験をもとに、この 1 年数ヶ月、懸命に闘い、生き抜いてきた。各自 20 分ほどの訴えだったが、切々と語られた。大熊町のバスガイドだった女性は、福島の地図を書き、家族のこともあけすけに、原発と放射能について語った。自分で考え、勉強し、線量を測り、避難し、家族バラバラになりながらの 1 年数ヶ月。東京電力に勤める息子とは、今は意見が違うが、必ず分かり合えると語った。

5 人の女性とも、3・11 以前は人前でしゃべることもなかったが、自己の体験をもとに自分で勉強し、切々と訴える。枝野や細野も打ち負かす内容だ。このことは、尼崎などでのガレキ問題で、福島や関東から避難してきた女性たちの訴えとも重なり、政府や電力会社、御用学者、ガレ

キ受け入れの市長に負けない、地に足を着けた脱原発の大きなうねりが、着実に広がっていることを確信させた。

なお、彼女たちは 26 日以前におおい町にはいり、スポットアピールも行った。そこでは、4・26 以前とまったく違う町民の反応があったという。原発をこのまま眠り込ませたいという願いは、電源立地おおい町でも確実に広がっている。

後半は京大原研元講師の小林圭二さんと、脱原発の産業政策を訴える関学大の朴勝俊さん。それぞれ専門知識を使い、説明と質疑応答。住民から次々と質問が行われ、特に関西電力の大飯 3・4 号機にはベントがないことが暴露され、改めて参加者の怒りを買った。

こうして、2 時間足らずの官許の説明会と違い、3 時間半ほどの、科学者・経済学者の説明と提案、また福島現地で原発事故でいかにひどい目にあったかの訴えは、おおい町民の心を捉え、再稼働反対の機運は大きく盛り上がった。

この対極に、おおい町当局の対応は、集会場の使用を取り消したり、コメントを一言とマスコミに求められると「あ」と答えた町会議長など、世間の失笑を買っている。このような人々が、町を運営する資格はない。原発の消滅を願う町民とともに、経済的にも納得できる原発廃炉プランを国に出させ、大飯原発再稼働阻止・廃炉を実現していこう。

おおい町に公然たる反対派が登場し、町当局・議会が当事者能力を喪失している中で、次の焦点は、福井県議会に移る。6 月中旬の、福井県議会・県庁闘争を全国闘争として爆発させ、再稼働断念に追い込もう。

(後略)

2012 年 5 月 26 日 (土)

(「社会運動情報・阪神」)』

(* 9) おおい総合運動公園テントより 27 日 朝 5 日目

『「原発設置反対小浜市民の会」主催の福島の女性との交流会は、椎名さん、黒田さん、木田さん、森園さんなど福島の女性たちを初め、関西の活動家、東京のタンポポ舎の面面、プラント技術者の会そして、経済産業省前テントひろばからと多彩な支援活動集会ともなった。毎日新聞福井版 27 日朝刊で報道されている。

40 人以上の参加者のなかには、中嶋哲演さんほか二人の僧侶の姿もあった。小浜市議員、元労組、元民主党員など政治家魂を失わぬ意気さかんな男性たちが、福島の女性たちの体験談に聞き入り、3・11以降の事故・災害の真相に深く打たれた様子だった。福島の女性たちは、ひとり二時間でもたりない話術の持ち主たちだが、地元の原発依存のやむにやまれぬ民意を慮りそれぞれ饒舌を控えられた。

椎名さんは、かんしょおどりを能のパントマイムにふりを変え、自分を殺すように、伊達市の詩人、久間カズコさんのひばく詩を朗読された。米軍の兵士にも伝わるような芸能の可能性を考え

させられた。しかし、また泣いたのは、福島の女性たちこそだった。あの事故以前の美しい風土がここにあり、過去の自分が、子どもたちが、そして男たちがここでよみがえるからだ。

本当に、夏の暑さの中で、冬の寒さを実感することはできない。さらに原子炉を実感することは永遠に不可能だろう。

「もうひとつの住民説明会」に関しては、福井、朝日、毎日、読売で新聞報道されている。こちらにはSさんがビデオ収録済み。五人の福島女性、朴さん小林さんのお話は、価値千金でした。

あるおおい町男性はこう語っています。「原電への懐疑は村八分になりました。3・11から変わりましたが真実の生の声は重みが違います。事故の恐ろしさが実感できました」

(「テント日誌5/27(日)―経産省前テントひろば260日目 稼働原発ゼロ22日目」)

(* 10) 大飯原発再稼働監視テント

『4月 25 日号で紹介した、「大飯原発再稼働監視テント」。大飯原発に続く一本道の沿道に4月9日から設置されたが、テント村はいったん撤収。5月 22 日からは、おおい町総合運動公園に場所を移した。テントの数、参加者数は、今も増殖中だ。

野田政権が再稼働を正式決定した今、テント村はおおい現地行動の拠点として重要な意味を持つ。地域住民が「反対」の声を上げにくい状況にあるため、関西電力をはじめとする原子力村の連中にとって、テント村はのど元に突きつけられた刃のような存在だろう。大飯3号機が、早ければ7月1日に起動されると予想される中、テント村の様子、そこに集まった人たちの声を紹介する。

再稼働を止めよう！ おおい現地へ！

「このテント村は『いのちの祭り』だ。人をもっと増やして、関電にプレッシャーをかけよう」―大飯原発再稼働監視テント村(以下、「テント村」)に集まった人たちが、1日のイベントを終えてのシェアタイム(打ち合わせ)での光景だ。シェアタイムとは、《何をするかは集まったみんなで決めよう》というモットーで、行われているもの。

この日は、福井市内で「いのちが大事今なぜ再稼働？ふくいにつながろう」集会があり、終わってからテント村に合流した人も多く、夜の時点で100名を超えた。

テント村に集まった人々は、ほとんどが若者たち。ブログやツイッター、フェイスブック、ユーチューブなどで呼び掛け合い、情報交換しながら集まった。

テント村に集まった人の声をいくつか紹介する。

「再稼働は絶対に止めたい。そのために、僕はできることを全力でやりたい。まずはもっともっと多くの人に集まってもらうことだ」

「笑顔でおおい町の地域にとけ込んで、つながっていこう」

「地元の人をもっと積極的に味方にできる方法を考えたい」

「北九州で震災ガレキ搬入反対行動もやったけれど、明るく、非暴力直接行動でやっていきたい」

い」

「政府の手続きはすべて終わっている。ここからひっくり返していくのはしんどいけれど、まだやれることはあると思う」

「この運動の原点は福島だ。福島と結びついた運動でありたい」

「僕がここに来たのは、『本当に再稼働を止めたい！』って思うから」

「マスコミ報道には期待できない。一人ひとりがメディアになって、多くの人に伝えていこう」

（『ピープルズニュース』 2012/7/12）』

（＊11） おおい総合運動公園テントより 6月2日

『細野原子力担当大臣の入福の日程をめぐって、おおいテント村では、迎い打ちの準備のあれこれでお互い調整しあっていた。午後3時を過ぎた頃、土建会社の親方風の男が語気荒く、斜面の上から苦情をぶつけてきた。黙って聞いていると、10分後「町に言わにゃならんな」の捨て台詞。それから小一時間後、株式会社おおいの関係者二人が、警告の看板を30メートルおきに二枚立てていった。

「…テントを設営し、公園の目的外の行為を行っている事例がみられます。これらの行為は、条例に違反するもので、速やかに許可をとられるか、テントを撤去してください」と書いてある。再稼働の緊急事態性にとってはなんら意味のないことだろう。

そうこうするうちに、細野入福は2日にはないというネット情報が入る。「東京・首相官邸前2千人を優にこす抗議行動」という情報も届く。関西、関東からテントに泊りたいとの問合せがあいつぐ。「細野なんで遅れるんだ？」「人民を信じるのが先」「立ち往生か」「再稼働はまた不透明となったって」「こちらは明快そのもの。あらんかぎりの手を使って再稼働阻止」というわけで、さらに、おおいのデモ充実いたします。シュラフ、テントをお持ちいただければ、いつでも歓迎、勿論、「お話をちょっと」というかたもOKです。

昨日は「テレビでみて、現実を確かめに」という神戸の男性もみえられました。だまされたくない、真実を掴んで離したくない、そういう方に見えました。東奥日報の記者もおおい取材の傍らたちよられ、原発のない岩手の幸せを呟いて、「これからサッカー場に6億、産直に1、2億と聞かされて来ましたけれど」と人気のない大公園を見渡して苦笑していました。（後略）』

（＊12） 6. 29「大飯再稼働は許さない！女たちの国会前アピール」

『「一票一揆で女が変わる！政治も、暮らしも、原発も！」

6月7日、官邸前で福島の女たちの大飯再稼働を止めるためのダイ・イン緊急アクションが行われました。放射能の中で暮らし続ける福島の女たちの叫び、子どもたちの悲鳴、そして男たち

の悲しみ、それに対する答えが翌6月8日の野田総理の記者会見「国民の生活を守るために、大飯再稼働。原発の安全性は確認された」でした。野田総理の本音は「電力会社、財界、メガバンクの命と原子力独裁体制を守るため、国民の命と安全を生け贄に大飯再稼働」ということです。福島原発震災の被災者を見殺しにしたまま、福島の子どもたちを、日々、目に見えない放射能の銃弾の雨にさらし続け、大飯原発の破砕帯の問題も無視して再稼働を決めた野田総理。あなたに私たちの命を預けた覚えはありません。あなたの政治生命は終わりです。

16万人の原発難民を生み出し、子どもたちを見殺しにし、SPEEDIもアメリカからの放射能拡散情報も全て隠蔽し、多くの人たちに無用の被曝をさせ、賠償は遅々として進まず、事故後一年以上たった今も世界中に放射能をばらまき続け、放射能汚染の加害者となった日本という国。福島第一原発の1、2、3、4号機全てが世界の安全保障の問題となる危機的状況にあるにも関わらず、その安全確保はほったらかしで政局闘争に明け暮れる与党と野党の政治家たち。福島第一原発という過酷事故を起こしながら、尚且つ原発輸出を押し進めようと躍起になり、50億円の復興予算を使って、国連世界食料計画(WFP)を通してアフリカやアジアの子どもたちの給食用に被災地のサバ缶を送りつける日本政府。こんな政府に、もうこれ以上政治を任せることはできません。

国会議員の皆さん、あなたたちは、私たち国民の民意を代表して、全力を尽くしているのですか？国民の70%以上が拙速な大飯再稼働に反対しているにもかかわらず、野田政権の政治暴走による大飯再稼働を許した議員たちに、私たちは満身の怒りも持って抗議します。そして、私たちは、福島の人々の苦しみに寄り添い、政治生命をかけて、子どもたちと市民の安全と暮らしを守ろうと日々闘っている議員たちを応援します。今、全国各地で、国会議員全員に「再稼働 YES・NO」を問う用意をしています。

福島の女たちは、3・11以来「二度と福島の苦しみをくり返さないで」と、世界中によびかけ続けてきました。大飯再稼働は、まさに国民に対する冒瀆です。女たちは怒り、立ち上がり、繋がります。日本と世界の子どもたちを守り、地球を守りたい女たちによびかけます。私たちと一緒に立ち上がってください。全国の女たち、あなたたちの代表を「6.29 女たちの国会前アピール」に送ってください。そして、全国各地で、女たちの抗議行動を起こしてください。大飯再稼働撤回を地元の国会議員によびかけてください。そして、拙速な大飯再稼働に反対しなかった議員たちを次回の選挙で落としましょう。主権者は私たちです。私たち一人一人が持つ「武器」を今こそ最大限に生かしましょう。世界の女たちに呼びかけます。日本大使館に抗議を続けてください。大飯再稼働が撤回されるまで。

■主催「原発いらない女たち」

■発起人/連絡先 泉かおり 090-2695-1937

■呼びかけ人「原発いらない福島の女たち」、山口たか、谷田部裕子、満田夏花
アイリーン・美緒子・スミス、木村結、鈴木かずえ、石丸初美

■6.29 (金) スケジュール * 13時から、集会と記者会見が加わりました！

13:00 ~14:30 集会 @経産省前テントひろば

15:00 ~16:30 大飯再稼働撤回・女性国会議員と全国の女たちの院内集会 @参議院
議員会館 101号室

《かんしょ踊り流しにて移動》

17:00~18:00 国会正門前アピール(参加者は国会正門前南側公園角)』

(* 13) 大飯原発監視・おおい総合運動場テントからの呼びかけー 「大飯！ど・フリー行動！」

『日時 : 6月16日、17日

場所 : おおい町総合運動公園(北端)

アクセス : JR 小浜線「若狭本郷」より、徒歩5分

内容 : 完全、ど・フリーの参加型！何かやりたい事があるなら、あなた次第です！どん
どん持ち込みをしてください！例えば、音楽やっている方は、楽器を持参で！

想い : 現在、現地には、数人しか抗議する人がいません。間違いなく、ここが日本の
未来を決める最前線だと思います。私たちはたくさんの方と、大飯再稼働に対す
る抗議のやり方を話し合いたいです。現地に來る方は、再稼働を自分の事と捉
え、真剣に考えている方だと思います。どうかみんなで考え、多くの知恵を共有
し、実行したいです。よろしくお願ひします。

求む : 大飯テントには、16、17日以外でも、いつ來てもらってもかまいません。滞在す
る場合、テント持参で、アウトドアの装備をお願いします。トイレ、水場、入浴施設、
駐車場、スーパー、原発は付近にあります。常時、多くの方の参加を求めています！』

(* 14) 再稼働を許すな！緊急行動のお願い(大飯原発、伊方原発)

『大飯原発の再稼働に向けた動きが高まっています。

たんぽぽ舎では皆さんからのご意見にもとづいて、様々な行動を呼びかけています。

再稼働に疑問を抱く国民世論が半数を超える中、首相の政治判断一つで原発を動かすこと
は許されません。福井の皆さんからの緊急行動要請に応え、全国の力を結集する行動をお願い

します。

6月17日(日)福井へ行こう、バス5台で、新幹線で (たんぼぼ舎 福井応援ツアー)

<いのちが大事 今なぜ再稼働? ふくいでつながろう>

原発反対福井県民会議(中嶋哲演代表委員、ほか)と、福井県内の市民グループが力を合わせて、6月17日(日)再稼働阻止をめざして集会を開きます。

◇6月17日(日)12:00~15:00 集会とパレード

◇福井市中央公園(県庁となり)(4月の集会場所と同じ)

◇<いのちが大事 今なぜ再稼働? ふくいでつながろう>

◇主催 ふくいでつながろう実行委員会』

(* 15) 大飯原発再稼働反対の非暴力実力闘争が示したいこと

『再稼働反対の現代的象徴と終わらない闘争

大飯原発の再稼働に反対する6.17の「福井」行動は、本当は多くの(わずかな期間にカンパを寄せて頂いた千人を超える)人々のあつい連帯によって、およそ250名の参加可能となりました。

闘いというものはなかなか終わらない。終わりたいとも終われない。

確かに6月15日、野田総理は「大飯原発3・4号機の再稼働の最終判断」を明らかにした。だが、彼がどのような展望と確信のもとで、そのような不敵な判断を下したにせよ、事態は簡単には収まらない。15日の夜には、総理官邸前に1万数千人の人々が集まって怒りの声を上げ、翌16日にも朝から3波にわたって官邸前に「再稼働反対」の声がこだました。

そして17日には、福井市内で、福井では画期的とも言われる2,200(実は3,000名に近い)人によって抗議集会とデモ行進が行われた。

抗議集会では、実に85人もの発言が相次いだ。そして東京からのバスツアーに参加した250名の内、約50名は引き続きおおい町に留まって、18日朝、大飯原発の直近において怒りの声を上げると共に、時岡おおい町長と西川福井県知事に抗議の申し入れを行い、同文書をおおい町の人々宅に戸配した。そのとき既に大飯原発では、再稼働に向けて具体的な準備作業に入ったことが報道されていた。

つまり「再稼働の最終判断」が政府によってなされようとも準備作業が始まろうとも、脱原発の闘いは決して諦められてはいないのだ。人々の怒りは収まるどころか火に油を注いだ如く、22日の金曜日には一部のヤカラの嫌がらせをものともせず、首都圏反原発連合の呼びかけに4万人を超える人々によって官邸前が埋め尽くされた。闘いは終わらない!

大飯原発3号機の起動が7月1日と言われている。それに向けて「ストップ大飯原発アクション」(代表;長谷川)は「6・30おおい現地交流集会・抗議行動」と「7・1大飯原発直近非暴力実力行動」を呼びかけている。この取り組みは大飯原発3.4号機の再稼働に反対する明確な意思と怒り

を現地で関西電力に叩きつけること、3号機起動を断固として反対・抗議すること、こうした内容において福井の皆さんにピーアールし共有していく大きな流れを創り出すことなどの意義がある。

東京では毎週金曜日の官邸前アクションの流れの中で、最大規模を更新する6月29日「総理官邸前10万人アクション」も呼びかけられています。また福島の人たち・全国の女たち(原発いらない！女たち)が29日、「緊急院内集会」と国会前での断固たるピーアール活動「一票一揆」を呼びかけている。

それぞれ重要な取り組みである。現地の闘いも必要だし官邸前の闘いも、国会正面の闘いも重要だ。29日、30日、7月1日の連続的取り組みに最大限応えたいと思う。

この間の貴重なカンパの趣旨(福井には行きたいが、自分では行けないのでせめて資金援助をしたい)をも考えて、6・30から7・1の「おおい現地アクション」は以下のとおりになる。

- 1 「ストップ☆大飯原発再稼働現地アクション」の呼びかけに応じて、東京から大型バス1台にておおい町へ行く。費用負担は宿泊代金を含めて1万円に抑えたい。30日夜には民宿等に宿泊。
- 2 7月1日早朝から「大飯原発エルパーク」付近で抗議行動。

(「経産省前テントひろば ★ おおい原発の再稼働をやめろ」)

(* 16) 大飯原発の間近で再稼働反対！命を守れ！のコール おおい町役場にも申し入れ——東京バスツアー・おおい行動団

『6月18日(日) 晴れ

この日午前9時半、「大飯原発再稼働反対！東京バスツアー」と「原発いらない！福島の女たち」の有志による「おおい行動団」(総勢47名)は、大飯原発間近の簡易ゲート前に立ち並んだ。

前日の「福井でつながろう」大集会とデモに参加した後、おおい町地元の方にチャーターしていただいたバス1台でおおい町へ向かった行動団は、その日の夜は運動公園の「大飯原発監視テント」で、50名ほど集まっていた若者たちと交流し、テントや民宿、国民宿舎に分宿し、18日朝から行動した。若者たちは、ライブなどをやったあと、20人程が車座になって夜遅くまで真剣な討論を繰り広げていた。「非暴力直接行動に覚悟をもって立ち上がるべき」「土日ごとにさらに参加者を拡大し、数百人規模のオキュパイテントへと盛り上げよう」等々、その真剣さが伝わってくる。

大飯原発は三方を山に囲まれ要塞のように位置し、トンネルが唯一そこに通じる道となっている。そのトンネルの手前、町有地と関電所有地を区切るところで道いっぱいに簡易ゲートは設置され、警備員が立ち並んでいた。1週間前に設置されたようだ。再稼働に向けた警戒のようだ。

バスを降り立つや、みんな簡易ゲートに取りついて、トンネルの向こうにあるはずの原発を見据え、「再稼働反対！再稼働撤回！」のコールが湧き起こる。ここで抗議集会。

この日牧野経産副大臣が来る予定とのことで福井テレビが早くから来ていたが、思わぬ遭遇を一部始終取材。

関西から、「5・26もうひとつの住民説明会」の成果にたって「6・30交流集会」、「7・1抗議行動」へという提起がなされる。福島の女たちから次々と5人がアピール。立ち並んでいる警備員に対しても、「原発の現場で仕事をしている人が最も危ない。なにかがあればすぐに逃げて下さい。命を大切にして下さい。」と訴え、これを読んで欲しいと資料を手渡す。原発災害で避難を強いられ、今も放射能と被曝に苦しむ福島の人たちの訴えに、警備員達も神妙な面持ちだった。最後のコールの中には早速「作業員を守れ！」が付け加えられた。

抗議集会を終える頃、静岡・浜ネットの鈴木事務局長たちが合流。またバイクを走らせてきた若い女性3人が到着。ここで抗議行動があると聞いて奈良からやって来たという。そのうちに、この場が各地からやってくる人々で埋め尽くされるような光景が頭に浮かぶ。

その後、おおい町役場に申し入れに赴く。アポなしの突然の訪問であったが、原子力担当の企画課対応。広い部屋が用意されて全員が入り、申し入れ書を読み上げて手渡し、福島の女性たちが次々と訴える。「是非、一度福島に立ち、福島を知ってほしい」、「福島の現実を人ごととしてではなく、おおい町自身の問題として考えてほしい」、「美しい若狭の海・空・山を放射能で汚さないでほしい」等々、訴えは続いた。

その後、バスは一路米原へ。福井県庁への申し入れは、代表して2人の女性が向かい、無事、その任を果たしたとのこと。最後にバスの突然のチャーターや、民宿からの送迎など、大変なお世話をいただいた、おおい町地元のM夫妻に心からの感謝を申し上げておきたい。

テントにたどり着いたときはまだ明るかった。いつものメンバーたちが待ちかまえていて、労をねぎらってくれた。17日はテントの前に座り切れない程の人たちが各地から集まっていたそうだ。

今夜は泊り番である。「おおい行動」の記憶がいつまでも頭の中で渦巻いていた。

(「テント日誌6/18(月)―経産省前テントひろば282日目 稼働原発ゼロ44日目」)

(* 17) 「STOP原発再稼働！6・30おおい集会」への参加を呼びかけます

「STOP 原発再稼働！6・30おおい集会」への参加を呼びかけます

大飯原発再稼働に反対するすべての皆さん！

STOP ☆大飯原発再稼働現地アクション

報道によれば、いよいよ7月1日には大飯原発が起動され、7月4日には発電を開始します。私たち STOP ☆大飯原発再稼働現地アクションは、大飯原発再稼働に抗議し、ただちに中

止することを要求して、6月30日(土)におおい町での集会とデモを行うことを呼びかけます。野田政権は、新たな「安全神話」をもって大飯原発の再稼働を決定しただけではなく、大飯を突破口に伊方など全国各地の原発の再稼働を強行しようとしています。絶対に許すことはできません。いまおおい町においても住民が再稼働に反対する声をあげ、6月17日には福井市で2200人が結集する大集会が開催されました。大飯原発再稼働に抗議し、立ちあがり始めたおおい町の住民を激励し、大飯を突破口とした各地の原発の再稼働に反対する全国的な連帯を強めていくために、関西・全国からの総結集を呼びかけます。

■ STOP 原発再稼働！6・30おおい集会

日時 2012年6月30日(土) 13時～15時

会場 あみーシャン大飯ふれあいホール

福井県大飯郡おおい町成和2-1-1 (JR 若狭本郷駅下車)

呼びかけ

STOP ☆大飯原発再稼働現地アクション(代表・長谷川羽衣子)

連絡先 090-8124-4945

主内容(予定)

ゲスト発言 福島の女性たちなど

大飯原発再稼働反対！原発のない若狭・福井へ

おおい町の住民からの発言

福井の反原発運動からの発言など

再稼働に直面する各地からの報告(伊方・志賀など)

全国的な連帯を強めていくために たんぽぽ舎など

■集会後デモ

おおい町役場、オフサイトセンター(牧野経産副大臣が常駐)などを通過するコース

2012年6月24日』

(* 18) 6/29全国の女たちと福島の女たちが大飯再稼働反対の行動へ

『6月29日、「原発いらぬ全国の女たち」主催で、大飯再稼働絶対反対の国会前アピール&緊急院内集会が行われた。まず昼に経産省前テントに集合し、13時から、経産省前テントひろばで「6.29大飯再稼働を許さない！女たちの国会前アピール」が開始された。テント前にはバスで到着した福島の女たちや伊方、玄海、東海村からかけつけた女たちも並ぶ。

発起人の泉かおりさん(北海道・Shut 泊)は「一票一揆で女が変わる！政治も、暮らしも、原発も！」という横断幕を携えてきた。そして、「福島の女たちは、3・11以来、二度と福島の苦しみをくり返さないでと行動している。世界中に呼びかけ続けてきた。今日はニューヨークほか全世界

で行動が起こっている。女たちが政治を変えないと子どもたちは守れない。民主党政権はもう終わりだ。原発に賛成する人を落とし、原発いらぬという人を支援しよう。このうねりを第一歩にして原発再稼働をとめよう」とアピールした。

そのあと、「原発いらぬ」と各地で闘ってきた人たちが訴え、さらに福島的女たち全員が心の底からの叫びを訴えた。全国の女たちの木村さんは東電株主として、6月26日の株主総会の様子を詳しく報告した。

14時30分にテントひろば集会を終えて、女たちは国会に向かった。

15時から参議院議員会館1階101号室で、大飯再稼働撤回・女性国会議員と全国の女たちの院内集会が持たれた。会場に入りきれないほどの参加者で、再稼働をとめるためにどうするか、と熱い討論が行われた。

「この2日間で何ができるか考えよう」「女性国会議員は国会内で座り込んでほしい」等々。国会議員では社民党の福島瑞穂さん、阿部知子さん、民主党の谷岡郁子さんなどが参加して発言した。

福島の郡山市議会でこの日全会一致で大飯原発再稼働反対の決議がなされた、と報告があった。

アイリーンさんも、「絶対にあきらめない。なかなか勝たないけれど負けない。仲間を広げよう」と訴えた。椎名さんも、「空気を変えていくことです。そうしたら次のステップが作られる」と。

最後に、こうした集会を、7月29日にも持つことを確認し、国会正門前行動へと移動した。

正門前では、福島をはじめ各地から参加した女たちが次々一言リレートーク。「原発再稼働絶対反対」、「野田政権を許さない」と、怒りのアピールが続いた。

向かい側の歩道ではこれと一体で「かんしょ踊り」が踊られていた。

そして、女たちは「かんしょ踊り」で、この日の歴史的な首相官邸前大デモに合流した。

(「とめよう戦争への道！百万人署名運動」)

(* 19) 7・1大飯原発3号機起動ぜったい許さない！再稼働阻止！

『6・29夜18時～首相官邸前10万人緊急大抗議行動へ、

6・30～7・1大飯現地1万人大行動へ、

★全福井・全関西・全国から、ありったけの怒りと決意と勇気の総結集を！

★土日職場休暇を取れない人や行くことができない人も、おおい現地に連帯してあらゆるところで再稼働絶対反対の声をあげてください！

怒りの大行動「紫陽花革命」で野田をたおせ！野田政権たおして再稼働を粉碎しよう！

★6.29緊急！大飯原発再稼働決定を撤回せよ！首相官邸前抗議

【日時】6/29(金)18:00～20:00 予定

【場所】首相官邸前(国会記者会館前、国会議事堂前駅3番出口出ですぐ)

【呼びかけ】首都圏反原発連合有志

★この抗議行動の情報を拡散する為に、緊急拡散のご協力をお願いします！

呼びかけ

6月16日、野田政権は、大飯原発3、4号基の再稼働をついに正式に決定してしまいました。

野田首相、枝野経産相、細野原発担当相、藤村官房長官らによる、閣僚会合での中長期の安全対策をすべて後回しにした、「暫定的な安全基準」による「安全」との政府判断。

おおい町議会の、再稼働に慎重な多くの住民の意見を無視する形での再稼働容認。

福井県の原子力安全専門委員会による、「安全」との政府判断の追認。

野田首相の再稼働の必要性を訴える記者会見の「儀式」。

責任を負いたくないばかりに、この「儀式」を受けてようやく再稼働に同意した、西川知事や時岡町長。

こうした出鱈目で拙速なプロセスにより、今回の大飯原発再稼働は進もうとしています。

私たち、首都圏反原発連合は、3月29日より毎週、大飯原発再稼働反対の「首相官邸前抗議」を行ってまいりました。

当初300名程度だった参加者は、1000人→2700人→4000人→12000人→45000人と、回を追うごとに劇的に増加しています。

福島第一原発事故の「収束」もままならないまま、そこから何の教訓を得る事もなく、再稼働ありきで物事を進めていった野田政権に対しての怒りがいよいよ噴出する形で、この抗議行動の規模は拡大を続けています。

野田政権は、世論の大半を占める再稼働に慎重な市民の声を無視し、今回の決断を下しました。

したがって、私たちもまた、今回の決定を黙って受け容れる必要は一切ありません。

6月29日(金)18時より、首相官邸前にて原発再稼働反対の抗議行動を行います。

前回の45000人をはるかに凌ぐ、10万人規模の抗議行動で、大飯原発再稼働決定をただちに撤回すること、私たちが一切諦めていないことを、野田政権に対して突きつけましょう。

今まで以上の情報拡散とご参加をどうか宜しくお願い致します。

※反原発・脱原発というテーマと関係のない特定の政治団体や政治的テーマに関する旗やのぼり、プラカード等はなるべくご遠慮ください。

※抗議時間中のチラシ類の配布はご遠慮ください。

※その他、基本的に主催者の指示に従っていただきますようあらかじめご了承願いたします。

また、大阪でも同日18時～19時半、関電本社前にて再稼働反対の抗議行動を行います。

【日時】6/29(金)18～19時半予定

【場所】関電本社前(大阪府 大阪市北区中之島3丁目6-16)

地図 → <http://www1.kepco.co.jp/office/honten.htm>

(* 20) 東京・首相官邸前 歴史的デモ

『押し寄せる人の波 15万人の「再稼働反対！」』

報告＝遙矢当

4月に始まった首相官邸前抗議デモ。いよいよメディアも無視できなくなり、首都圏でも徐々にテレビや新聞でも報道され始めた。

そして6月 29 日、盛り上がりは頂点に達した。この朝、私は「今日は帰ってこないかもしれない」と家族に言い残して部屋を出た。

18 時 30 分、永田町駅に到着すると、想像を超える人の群れと「大飯原発再稼働反対！」の声、先週より高らかに聞こえてきた。その時点で、参加者は2万人を越えていた。もはや熱気というより、殺気に近い緊迫感が感じ取れる。大飯再稼働まであと2日に迫った重みを、改めて感じた。

大混乱の議事堂周辺を掻き分けるように進むと、記者会館の前で、いつもお世話になっている「新宿西口反戦意思表示」(大木晴子さんら*注)の皆さんと合流し、一緒に声を出すことになった。雨の予報が奇跡的に晴れた上空は、何機ものヘリが行き交う。ふと、広瀬隆氏らが飛ばせたヘリはどれか?と思ったが、探す余裕もない。後から後から人が押し寄せ、「再稼働反対」のボルテージは、果てしなく上がり続けた。

群衆を見ると、元気よく飛び上がるおなじみの顔を見つけた。14日に豎川弾圧から保釈された園良太さんだった。私は、園さんと並びながら「再稼働反対」の声を出した。警察のバリケードは何度も突き破られ、更に押し寄せる人で混乱が続いた。

警察による中止命令

19 時 50 分。うねりを上げ続ける「再稼働反対」のシュプレヒコールが、唐突に静まった。すると、主催者側がトラメガで声明を出した。「私たちは、今日のような混乱が続くのを恐れていました。これ以上の混乱が続くと、もうこの官邸前でデモができなくなります。今日はこれで終了とします。後方の方からゆっくりと戻ってください」。一斉に参加者からため息が出ると同時に、様々な怒号も響いた。「まだ時間が残っているんだから続けろよ!」「これじゃ大飯は止まらない!」もっともだった。

「どう思う?」と隣の園さんに訊くと、「警察による主催者への懐柔があったと思う」と述べた。主催者側は少数の集団、今後の活動も含めて警察に押し切られてしまったのかもしれない。今日、何の為に 15 万人の人たちが官邸前に集まったのか。デモ参加者は、その目的を正面から突き付けられた瞬間だった。

15 万人は、紛れもない「民衆の声」であり、政治と歴史を動かす一つの力になり得たはずだ。

ケガ人もなく逮捕者も出ないデモ、それは非暴力の理想である。ただ「大飯原発の再稼働」は、長く取り組むべき問題ではない。国民の目の前の命が問われている。私は、6月 29 日が、再稼働の問題に終止符を打つべき日だったと思う。

結局、野田政権によって再稼働の舵は切られた。今日は「民意が殺された日」なのだろうか、「ある種の支配が完成された日」なのだろうか。諦めきれない思いを胸に、後年の評価を待つことになりそうだ。

(「ピープルズニュース」 2012/7/12 更新)』

(* 21) 変わり始めたおおい町

『大飯原発3号機の再稼働を翌日に控えた6月 30 日、おおい町「あみーシャン大飯」で、「STOP 原発再稼働！ おおい集会」がおこなわれた(主催・STOP☆大飯原発再稼働現地アクション)。会場は、用意されたイスだけでは足りず、床に座って参加する人で埋まった。集会前日、首相官邸前を 15 万人もの人々が集まった熱気を、そのまま引き継いだ雰囲気だった。

参加者は地元・若狭や関西各地をはじめ、全国各地から集まった。子ども連れの母親の姿が目立った。

集会では、小林圭二さん(元京都大学原子炉実験所講師)が、改めて大飯原発の危険性を指摘。①大飯原発敷地内を通る断層(破碎帯)の危険性、②大飯の原子炉は加圧水型であり、事故の時には格納容器そのものが水素爆発を起こす恐れがある、と再稼働を厳しく批判した。その他、福島からのアピール、各地で反原発運動の取り組みの報告や、「大飯原発再稼働監視テント」からの報告、などがあつた。

おおい町内の僧侶・宮崎宗真さんは、檀家や知人に原発関連の仕事に就いている人が多い中で、「再稼働反対」の声を上げた理由を、「おおい町でも声を出しやすくなった」と語っている。「福島の事故を考えると、再稼働はありえない。福島を忘れてはいけない」(宮崎さん)。

デモ出発時には、雨が降り出した。まず、おおい町役場を目指す。周囲は、周りを田んぼに囲まれた田園地帯だ。「原発やめよう」「NO NUKES」「WE NEVER FORGET 3.11」…などの自分の言葉で訴えを書いた手書きのプラカードやグッズが、とても目を引いた。

途中から、左右に民家が見えてきた。自動車整備工場などで働く人や、スーパーに買い物に来ている人は、のどかな町を「再稼働反対！」と叫びながらデモをする約500人のデモを、固い表情で見つめていた。後で聞くと、デモに手を振ってくれた町民も多く、デモとすれ違った時に、コールに唱和している地元の人もいたとのこと。安全面で大きな不安を抱えながらも、「声を出しにくい」という、おおい町の雰囲気は、少しずつ変わっているのかもしれない。

デモに対して、「不愉快である」という態度を露わにする人もいた。原発再稼働が、雇用や交付金、地域での人間関係などが絡んだ、ナーバスな問題だということを実感させられた。デモは、おおい町役場を折り返し点として、牧野経産副大臣が常駐するオフサイトセンター(原子力

防災センター)までの道のりを、「再稼働反対！」を訴えて歩いた。

オフサイトセンターでは、県職員や警察が門を封鎖し、さらに再稼働反対の申し入れ書受け取りも拒んだため、抗議の音が響き渡った。常駐しているはずの牧野経産副大臣は留守ということで、直接手渡すことはできなかったが、代表数人が敷地内に入って責任者に申し入れ書を手渡し、「6・30 おおい集会」は解散となった。

(「ピープルズニュース」 2012/7/12 更新)』

(* 22) 大飯原発が再起動した日、機動隊が攻め込んできた

『 30 日午後から大飯原発入口の封鎖を続ける再稼働反対派の市民は疲れ切っていた。夜通し降った雨は、1 日午後2時頃まで止まなかった。雨と機動隊とのニラミ合いで体力を消耗した反対派の面々に、京都や東京などから駆け付けた女性たちが炊き出しのサービスを始めたのが午後4時過ぎだった。

ピザ特有のチーズが焦げたような香り、味噌汁の匂いが食欲を刺激する。

皆ひとしきりパクついた頃、異変が起きた。機動隊が増強されたのである。海側と山側の両方から反対派を挟撃する形になった。大飯原発は山の向こう側にある。

機動隊はさらに増強された。海側と山側の両方合わせれば総勢で 200 人はいるだろうか。黒いヘルメットが不気味に光る。午後 5 時を回った頃だった。強化プラスチックの盾を持った山側の機動隊が前進を始めた。

反対派は両手をあげて非暴力で対抗するが、柔剣道の猛者が揃う機動隊のパワーにジワジワと押し込まれた。それでも両手をあげたまま抵抗を続けた。膠着状態が暫く続いた。

一方、海側の機動隊はダイ・インの市民たちを次々とゴボウ抜きにしていっていった。ピザをふるまっていた母親も手足をつかまれ引きずり出された。

パーカッションのリズムと「再稼働反対」のシュプレヒコールが夕空に響く。夜のとぼりがすっかり降りた午後 9 時、再起動のスイッチが入った。ほぼ同時に山側の機動隊がなだれ込んだ。反対派の市民たちは次々となぎ倒されていった。

(「田中龍作ジャーナル」 2012 年 7 月 2 日)』

(* 23) 原発ゲート前封鎖行動

『「再稼働反対！」—大飯原発ゲート前は、太鼓・ドラムなどのリズムに合わせて、コールが繰り返されていた。7月1日。大飯原発3号炉の制御棒が抜かれ、再稼働が予定されている日だ。ここでは、前日夕方から監視テントの有志たちが座り込みに入り、夜通しでサウンド抗議集会を行っていた。

プラカードや横断幕を掲げる人。リズムに合わせて踊る人。降り続く雨の中、子ども連れの母

親。無言で花を掲げる人。「福島では、放射能で毎日人々が苦しんでいる。そんな中で、なぜ大飯を稼働するのか。福島の私たちの苦しみを繰り返すのか」との福島からの叫び。「原発再稼働を止めたい！」という思いひとつで集まった300人が、ゲート前の抗議行動に参加した。

おおい町総合運動公園の監視テントは、「30日には1万人が集まろう！」を合い言葉に、ブログやツイッター、フェイスブックで呼びかけられた。監視テントに集まる人は日ごとに増え、連日、音楽やパフォーマンスで「再稼働反対」を表現し続けた。

「東京の首相官邸前で、あれだけの人が集まっているのを見て、私も行動したくて、ここに来ました」(京都から来た女性)ーデモや集会への参加経験がなさそうな女性の姿が目についた。

大飯原発は大島半島の先端にある。ここへ通じる道は一本しかないため、原発作業員は、このゲートを通してしか入場できない。「直接行動でここを封鎖しよう！」という方針が提起された。官邸は「正門から牧野経産副大臣を入れよ」と指示していたが、ゲート前占拠によって断念。作業員らとともに船で海上から原発に入り、再稼働に備えていたという。

午後6時過ぎ、機動隊がゲート前を占拠していた人々を排除し、ゲート前を「制圧」した。午後9時過ぎ、いよいよ再稼働のために、制御棒を抜くスイッチが入れられた。しかし、ゲート前では「再稼働反対！」の声が止むことはない。ゲート封鎖は、深夜午前2時頃まで貫徹された。

原子力村を追い詰めた抗議行動

ゲート前で抗議行動が始まってからの約30時間、「再稼働反対！」の抗議は続けられた。そこは、首相官邸前と同じく「解放区」だったと思う。抗議の様子は「ユーストリーム」で生中継され、数万人が視聴した。

再稼働が強行された今、現地に集まった人々は、今どういう思いでいるのだろうか。監視テント村の臼田敦伸さんは、「みんな、さらに怒りを強めたという感じです。落ち込んでなんかいませんよ」と、語ってくれた。

「ゲート封鎖は、原子力村の連中を追いつめたと思います。行動で『再稼働反対』の意思を、世界中に示したからです。そして、こうした行動が次の行動を呼ぶと確信しています。伊方原発などの再稼働も狙われています。総理官邸前に15万人が集まったように、相互に影響を与え合って、僕らも行動していきます。みんな『制御棒は抜かれたけど、また入れさせたら良いんだ！』と言っています。これからも、したたかにやっていきます。」

(「ピープルズニュース」 2012/7/12 更新)』

(* 24) 大飯原発ゲート占拠・封鎖を経験して

——未完のままの出来事——

大野光明

切迫した現場からの呼びかけ

大飯原発の再稼働の前日。2012年6月30日。大飯原発へとつづく唯一の車道にあるゲートが、再稼働に反対する人々によって封鎖されたことを知る。

知人から携帯にメールが届く。

【緊急です。拡散を！】再稼働の死のスイッチを入れさせない、非暴力直接行動の現場に来てます。現在、数人が大飯原発入り口ゲートを封鎖。機動隊が来ていますが、200人ぐらいで対峙。というか若い機動隊員たちを、皆して一生懸命に説得してます。来れる人は来てほしい！…回りに知らせてください。広めてください！関西の人、駆けつけてください。できたら遠方の人も！



Twitter や Ustream でも、現場の様子が伝わってくる。ゲートの道路はバリケードによって封鎖されていた。各地から集まった人々は、自らの体を鎖でゲートにくくりつけ、体を張って封鎖を続けている。切迫した現地の様子が、痛いほど伝わってきた。これで再稼働を遅らせることはできても、たぶん止めるのは厳しいのだろうなとは思った。けれども、このまま何もせずに、数週間前に見たあの道路とゲートを、悠々と政府の役人や関電職員が通り過ぎ、再稼働してしまう、というのはおかしい。また、自分は少しの時間とお金で現地へ行けるにもかかわらず、何も抵抗せずに、再稼働の手続きを見過ごしてしまうことも、おかしいのではないかと思った。

自宅のある京都から大飯までは思ったより近い。自動車であつたの 2 時間半から 3 時間くらい。さっそくレンタカー会社に電話する。「土日なんで、もう予約がいっぱいですよ〜」。ならばと両親に電話する。「大飯原発前の抗議行動に行くんだけど、車貸してくれないかな…」。真正面から両親に反原発のことを切り出したのは今回が初めてかもしれない。両親は「あぁいいよ」の一言だった。

占拠・封鎖の空間

7月1日。朝5時半、自宅を出発した。友人たちも同乗し、3名での移動。友人は、午後に予定があるにもかかわらず、数時間だけでも、ということらしい。

京都で有料道路に入り、大飯近くの IC で高速を降りる。目の前に若狭湾が広がっている。天気は大雨。車の後ろを見ると、機動隊を運ぶ装甲車やパトカーが 5 台くらい連なって原発に向かっていった。のどかな海と山とのギャップ。現場の切迫した状況が感じられた。

大飯原発前に近づくにつれて、車道の両側にたくさんの車が止まるようになった。50 台くらい

はあったらどうか。ゲートに到着したのは 8 時半。ゲートに作られたバリケードの姿は圧巻だった。ゲートの手前と後ろに自動車がそれぞれ数台、ぴったりとくっつけられて並べられ、人が通るスペースはほとんど残されていない。人が通れそうな僅かな脇道には、鎖やロープが縦横無尽にはりめぐらされ、丁寧にかきわけなければ、通ることができない。まるで、芸術作品のような出来栄だ。再稼働阻止の本気の思いが伝わってくる空間だと感じた。初めてこのバリケードを通過したとき、背筋が伸びるような気持ちになった。

バリケードの手前 10 メートルくらいからは座り込むたくさんの人々。バリケードの向こう側、つまり、原発側には、それ以上の多くの人々が集まっていた。バリケードから原発側 100 メートルくらい奥のところに、機動隊と警備員の阻止線がある。集まった人々はゲートと道路を封鎖し、バリケードの前後の 100 メートル強の幅を完全に占拠・封鎖していた。数週間前に私が見たゲートの姿とはあまりにもかけはなれている。

集っている人は最も多かつたであろう夕方頃で 400 人くらいだろうか。京都や大阪、東京の反原発デモやイベントで顔を見たことのある人たち。沖縄の辺野古や高江の米軍基地・ヘリパッド建設反対のデモやイベントで出会っていた人たち。経済産業省前テントを運営している人たち。けれど、圧倒的に多いのは学生風の 20 代、30 代前半の人たちだ。それも女性が非常に多かつたのが印象的だった。こういう書き方はとても失礼なのかもしれないが、機動隊の激しい暴力と対峙する現場にいそうにない人、たとえば野外フェスやライブに足を運んでいそうな雰囲気の人たちが多く集まっている。大飯原発再稼働という政府の決定は、実に多様な人々に、いてもたってもいられない切実な思いを抱かせたのだ。どこから、なぜ、どのように、この行動に参加したのかと、聞いてみたいと思う人ばかりだった。残念ながら、そういう時間はほとんどなかつた。

ゲート奥の機動隊の阻止線に対峙しながら、「再稼働反対」のコールが続けられる。その後方にはたくさんのドラムや楽器を奏でる人々。また、次々に差し入れの食べ物と飲み物、カップやタオルが運ばれてきた。どこからともなく、あたりまえに。

一方、対峙している機動隊や警備員も非常に若い。10 代なのではないかという人も多かつた。表情からは混乱と緊張が感じられた。「人を守るために仕事をしているんじゃないの?」、「何を守りたくてそこに立っているんですか! ?」、「あなたたちにも家族や子供がいるでしょう」、「原発を止めるために、命令に背いて、その場を離れてほしい」。このように機動隊に語りかける参加者も多かつた。若い機動隊員たちは、今、自らがどのような仕事をやらされているのかを少しずつ実感していったのではないだろうか。

占拠・封鎖・対峙によって生まれる即興の集団性

午前中、関電・大飯原発所長室の職員への抗議申し入れ書の提出。

そして、夕方 5 時頃、バリケードの前後から、50 人ほどで隊列を組んだ機動隊が阻止線に続々と加わり始め、私たちはこれまでにない数の機動隊、警察、警備員と向き合うことになった。機動隊は戦闘服姿(野球のキャッチャーのような姿)で物々しい。少し高い位置で見張りをしている男性が、皆に「来てるぞー。スクラムを組もう! 」と身振り手振りで伝えてくれる。お互い、肘を差し

出して、スクラムを組み始める。占拠する私たちの列は3列くらいになった。

こちら側から、機動隊の阻止線を崩したり、突破するような行動は取られなかった。あくまで、私たちが引いているピケやバリケードのラインと空間を維持することが目指されていたと思う。誰かから指示されるのでもなく、話し合われたのでもなく、自然にそうになっている。

近くの男が「ガンジーだよ、ガンジー！」と呼びかけていた。また、別の参加者は「非暴力だよ！非暴力！手をこっちから出さへんで！」とも呼びかけていた。



まず、関電からの警告があった。小さなマイクでの警告で、何を言っているのかまったく聞えない。聞こえなくても、とりあえず警告した、という事実で良いのだ、という態度。提出した申し入れ書への回答もない。次に警察からの警告。直ちに離れること、バリケードとなっている車をどかすことなどを「命令」していたようだが、同じくほとんど聞き取れなかった。機動隊の阻止線の向こうで、指揮官や警察官らが、いそがしそうにマイクや携帯でやりとりを始め、身振り手振りで話し合っているのが見える。確実に実力で排除する行動が準備されていることを感じる。

そして、こちら側の緊張も高まっていった。今までとは違う空気が変わっていった。気づくと、スクラムを組んでいる私の隣の女性の腕と手から、彼女の震えが伝わってきた。何かがこみあげてきたのだろうか、泣きじゃくっている人もいる。背後からはドラムの力強い音が聞こえてくる。太鼓とともに狼煙をあげるような、暴力的な排除にまっすぐ向き合うような、そういう音だった。徐々に男性が最前列の女性と入れ替わっていく。「子どもがいたら、外に出そう！」という声もあちこちで発せられた。気づいた人間が気づいたことを伝え、それに同意できる人間はそれに応え、同意できない人間は自然にスルーしたり、もっとこうしたほうがいいんじゃないか、と伝えあったりする。名乗ることもなく、コミュニケーションはあちこちで取られた。

私はこれから数週間の自分の予定を思い出していた。まあ、いざとなったら、たぶんなんとかなるくらいの予定だな、と冷静に考えた。

夕方6時頃、機動隊が動き出す。盾が肩の高さにまで上げられる。直後、ウォーっ、という大きな声とともに、盾を使って左右中央一斉に押しこんでくる。波のような塊が向かってくる感じだった。ガーっと後退してしまう。それでもこちら側は皆で声をあげ、スクラムを組み、踏みとどまろうとする。機動隊は一度止まる。そして、再び気持ちの悪い怒号をあげながら、襲いかかってくる。それが何度となく繰り返された。目の前の機動隊の壁の向こうで、悠々と指示を出す年配の指揮官の姿が目に入った。

6時からの最初の1時間はしんどかった。時間がたつにつれ、後退し、疲れてくる。いつまで占拠するのか、ということは話し合われていなかったように思う。少なくとも私の周りでは。経産副大臣や保安院職員がやってきて、夜9時に再稼働の作業に立ち会う。再稼働を止めること、そ

して、少なくともこのゲートからは彼ら(男ばかりだ)を原発に通さないことが暗黙の了解だった。だから、一つの目標は9時までは占拠・封鎖を続けること。しかし、9時はずいぶん遠いものだった。それまでに簡単に排除されてしまうのではないかと感じた。ゲートをはさんだ反対側では、集った仲間が、警察によってごぼう抜きにされているという情報も伝わってきた。関電・機動隊はさっさと排除し、ゲートの解放を目指していたと思う。8時頃までは、機動隊は波状的、実に積極的に攻めてきた。右から来たと思えば、左から。少し膠着状態が続いたと思ったら、急に押しこんでくる。

こちらはじりじり後退していく。遠くにあったはずのゲート周辺の車やドラム隊に近づいていく。

しかし、機動隊との攻防がくり返されるなかで、私たちは冷静になっていった。機動隊のやり方に次第に慣れていき、声をかけあい、スクラムの組み方や向き、対時の仕方を修正し、適切なものにしていった。疲れている人がいれば、元気な人間が後ろから交代を申し出る。後ろに引いた人たちは、膠着状態の間に、飲み物や食べ物を持ってきて回してくれた。「機動隊が右にまわったぞ!」、「くるぞくるぞ!」、「そっち大丈夫かー」、「あっちが手薄だよ」、「9時まであと90分! すごいぞ、止めてるぞ!」、「向こうはあせってる。今はこっちのペース!」などなど、冷静で、互いに鼓舞するような言葉が交わされていた。せめぎあう時間帯のサッカーの試合のようだった。しかし監督やコーチはいない。全員がフィールドプレーヤーだった。「押さないでくださ〜い!」と言いつつ、ぐいぐい押しこんでくる機動隊に向けて、「いやーん、痛〜い、やめてくれるう〜」とちやかしながら、空気をかえてしまう男。客観的には厳しい場面の連続なのだが、ジョークや笑い、ユーモアがあるから不思議だ。

それにしても、ドラムの音、「再稼働反対!」や「暴力反対!」という抗議の声は止まない。むしろ、時間とともに、強くなった。その粘り強さに、今日の前で形成され、変容しつつけているこの集団性は強いと思った。押しこまれつつも、膠着状態がおとずれると、ドラムの音やコールの声で思いを新たに、態勢を立て直し、スクラムを組み直す。機動隊は徐々にあせっていった。耳のそばでの無遠慮な怒号や命令口調の叫び声、頭をこづいたり、見えないところで背中や足を蹴ったり殴ったり(女性の顔面をわしづかみにしたり、首にエルボーをくらわしたり、ひどい場面も多かった)、ということを繰り返していた様に、それを感じた。

この集団性のなかで、ドラムとはどんな存在だったのだろうか。スクラムを組んでいる私たちの多くは、背中を機動隊の盾に向けているため、ドラムを叩いている人たちと向かいあう。彼ら・彼女らが衰えることなく、身体全体でドラムを叩き続けている姿を確認するたびに、勇気づけられた。そして、ドラムのリズムとビートが、自らのコールと混じり合って、バイブレーションを生み出す。身体にエネルギーが補充される感覚も何度となく経験した。私だけでなく、他の参加者も同じように語っていた。ドラムや音楽は、「まだまだ続けるぞ!」、「合意してないぞ!」、「再稼働に納得してないぞ!」というコールとして鳴り響いており、「頑張れ!頑張れ!」と呼びかけつつける存在でもあった。また、ドラム隊は、目の前のスクラムと機動隊の攻防を見ながら、強さや速さを自然と変えていたように思う。だから、ドラムや音楽は、表面的な祝祭性を演出する道具ではなかった。フィールドプレーヤーを支えるサポーターではなく、ゲームのサウンドトラックでもない。

スクラムの一部であり、非暴力直接行動による不服従の実践のとても重要な一部として加わっている。音楽と実践、ドラムとスクラムに境界はなく、地続きの別の実践、あるいは別の表現として存在していた。

また、苦しいなか、励まされた出来事が二つあった。

一つ目。左手の山の側面に、突然、横断幕を持った人たちがわーっと現われたこと。横断幕と手を振りながら、こちらに一生懸命エールを送ってくる。このときの、盛り上がりはすごかった。おそらく、ゲート前でごぼう抜きにされ、こちら側と分断されてしまった人たちが、警察の目を盗んで山を登ったのだと思う。ゲートの前と後ろがこうやって繋がった瞬間、ドラムもコールも急に大きくなった。「この



期に及んで、さらに元気になるのかよ」という本音が機動隊の表情からは読み取れた。

二つ目は、Ustream の生中継を行っていた IWJ をはじめとする市民メディア取材者とカメラの存在。機動隊が見えないところで、執拗につっかかっていたり、暴言を吐いたり、頭や顎や背中など殴ってくるような場面があると、さっとカメラが向けられた。見えないことにされてしまう出来事を追いかけて、機動隊の行動を抑える効果があった。また、参加者にとっては、カメラが、その向こうに、中継を見ている多くの人の存在を感じさせるものでもあったのではないかと。スクラムのなかの参加者と市民メディア、カメラの向こうの Web を通じた参加者との集団性のようなものも形成されていたのである。市民メディア取材者は身体をあずけながら取材・撮影をしていたが、彼ら・彼女らはスクラムの一部にもなっていた。

このように、機動隊と対峙するなかで、スクラムを組む人々、ドラム隊、市民メディア、水や食料を配り歩く人たち、Web 上の参加者などが、コミュニケーションを取り、励まし合い、結びつき、まとまっていった。実践の試行錯誤は、俯瞰する指揮者のもとで行われたのではなく、目の前の状況を読み解き、判断した一人一人の行動の連鎖によって生まれたものであり、即興の集団性を生み出すものであった。時間の経過とともに、集団性の強度と集中力は増していき、徐々に 9 時は遠いものでなくなった。十分持ちこたえられる時間にならなくなっていったのである。

「勝利」の経験 ?

少しずつ日が暮れ始め、電灯が付き、夜空に太った月が光る。隣りの男性が、「月がきれいで最高だー」と言い、親指をあげた。汗だくの身体に涼しい風が通り抜ける。山の木々が風を受けて、海のように揺れていた。機動隊の暴力にまみれた現場で、不思議な爽快感と美しさを感じた瞬間だった。

なんとすごい行動が続いているのだ、と思い、鳥肌が立ち、目頭が熱くなった。この現場に集まり、闘っている仲間の強さとしなやかさと笑い。これは希望だと思えるようになった。

8 時前まで続いた機動隊からの暴力的な排除の動きは次第に弱まっていった。9 時までの排

除を諦めたのだろうか。副大臣らは、別ルートで大飯原発に向かうことになったのだろうか(後の情報で、船で上陸、原発入りしたことを知る)。

そして、9時。一斉にマスコミの記者らのカメラのフラッシュがたかれた。9時まで持ちこたえた安ど感と、再稼働はどうなったのかという不安とがない交ぜとなり、私はよく分からない気持ちになった。他の参加者も同じだったようだ。大きな喜びの声はあがらない。機動隊も引くことはなく、散発的に襲撃を続ける。「再稼働反対」の声、ドラムの音は鳴りやまず、続けられる。

12時頃。目の前で一斉に歓声があがる。車の上で人が飛びまわっている。旗がはちきれそうなほどに振られる。ゲート入り口の機動隊が撤退したのだ。そして、ゲートの外へと排除・分断されていた人たちが、バリケードを乗り越えこちら側に一斉に戻ってきた。あっという間に人があふれかえった。ドラムの音は強くなり、「再稼働反対」の声はますます大きくなった。踊りまくる人、抱き合う人、倒れ込む人。空間を人々が掌握しきったように感じた。機動隊の襲撃が始まって約6時間。機動隊のあれだけの襲撃にもかかわらず、参加者は服従せず、合意せず、その意志をそれぞれの身体で表現しきった。みんなが笑顔だった。いぶかしがりながらも、「勝利」、あるいは「解放」の経験がそこここに見て取れた。

「勝利」？再稼働は阻止できなかった、という情報は入ってきていて、ほとんどの人が知っていただろう。けれども、人々が目の前で感じているのは「勝利」感だ。政府・関電による再稼働決定や原発事故以降明るみになった原子カムラという体制に、徹底的に服従しないこと、合意していないことをつらぬいたこと。即興の集団性のなかで、それぞれの意志・態度を再確認しつづけたこと。ある人が語っていた。「このバリケード、すごいでしょ。この空間を獲得できていること自体が、すでに勝利なんじゃないか。」この後、この空間から退いたとしても、今日の経験が各地に散らばり、別な形で持続するであろうことも大いに予感させる雰囲気もひしひしと感じられた。これらの意味において、占拠・封鎖の経験は「勝利」として実感されたのだと思う。

私はよれよれになって、スクラムをかわってもらい、路上に倒れこむように座り込んだ。目の前で、同じように座り込んでいる男性がいた。ずっとドラムを叩いていた人だ。「どうもありがとう。めっちゃ励まされたわ。厳しかったとき、ほんまに助かった」、「そう言ってくれると、嬉しいわ・・・」、そう言葉を交わして握手した。

もう体力も限界。今日、やれる範囲のことはやったかなと思った。12時半頃、迷いながらも、現場を去ることにした。

※その後については、「6.30 午後3時半から始まった大飯原発正門封鎖行動は、7.2 午前2時に勝利的に貫徹しました。現場に駆けつけてくれた仲間、カンパで活動を支えてくれた仲間、情報拡散に尽力してくれた仲間のおかげで、大きな行動をとることができました。」とのことである。 <http://oi55.blog.fc2.com/blog-entry-77.html> 映像でも「貫徹」の様子が確認できる。

<http://www.ustream.tv/recorded/23699152>

未来のプロジェクトとして

これまで一参加者の視点・経験から、大飯原発ゲート占拠・封鎖の一部を書いてきた。狭い空

間だったにも関わらず、いつどこでどんな出来事が起こっていたのか、全体像はまったく把握できない。

この行動での経験を深め、広げ、行動後へと繋げていくために、考えておきたいことを二点述べたい。

第一に、非暴力直接行動と不服従の力についてである。今回の占拠・封鎖はこの力を多くの人に提示する出来事であった。

まず、「非暴力直接行動」という概念は、非常に幅広い意味で用いられているものだと思う。歴史をひもとけば、「非暴力直接行動」は「(市民的)不服従」と共に概念として形成され、実践されてきたのではないだろうか。不服従の意志を非暴力的に、そして直接行動で示すこと。昨今の一部の反原発デモの現場や運動を批評・記述する文章などでは、「非暴力」という言葉が権力側の暴力を問題化しない、抵抗を否定する平和的態度というニュアンスでさえ使われているように感じる。大飯原発ゲートでのこの日の行動は、権力の決定と、この決定を支える制度に徹底して服従しない、合意しない、しなやかで力強い実践であった。多くの人々が(それはきっと Web 中継を通じて参加した人も含むだろう)非暴力直接行動の概念を、目の前の現場にぶつけ、鍛えなおし、豊饒な形で経験する稀有な出来事であったように思う。

大飯原発ゲートに集まった人々の参加の動機の根底には、既存の政治・経済システムへの怒りがあった。いくら署名を集めても、デモを繰り返しても、twitter や facebook で情報交換をしても、日本政府と電力会社の政策は変わらないように見える。この怒りを、非暴力直接行動によって表現したことの意味は何か。

それ[非暴力直接行動]は、合法・非合法を超えた生産行為である。…支配はかならずその違法を問う。だがその法は彼の正義を罰することによって、みずからの不法を露呈せざるをえない。合法は権力者の名分であるだけで、決して正義の保証ではない。／直接行動に対して、法律がその強権をふるえばふるほど、それは法律そのものの不正義を証明し、みずから墓穴をほることとなる。(向井孝、2002『暴力論ノート—非暴力直接行動とは何か』「黒」発行社、48ページ。)

大飯原発ゲートを占拠・封鎖する行為は、政府や電力会社から絶えず「違法」であると指摘されていた(原発推進派や反原発運動内部からもその声はあがっている)。しかし、大飯原発の再稼働反対の声がこれだけ多くあがる中、その声を忠実に実践することが「違法」とされること自体が、政府と電力会社の政策自体の暴力性や権力を際立たせる。大飯原発ゲートの占拠・封鎖の実践は、非暴力直接行動と不服従によって、政府と電力会社の不当性と原発の暴力性を示すことに成功したのだと思う。

だから、非暴力直接行動の力とは、合法的か非合法的かという統治の論理・視線によって自らの行動や思想を切り縮めるのではなく、自らの行動や思想を練り上げるなかで、合法／非合法の境界線自体との緊張関係を生き、批判的に問う力である。権力によって、そして、ときに運動

の内部によってこそ、合法的か非合法的かによって自らの行動や思想を切り縮めるメカニズムが強力に働いている昨今、大飯原発に集った多様な人々は、軽々とこの切り縮めるメカニズムを乗り越えていった。数多くある「非暴力」をかかげる運動や言論に対しても、その「非暴力」はどのような関係性を生きているのか？という鋭い問いかけをしているはずである。

しかも、この切り縮めるメカニズムの乗り越えは、歓びにあふれた出来事として、人々に経験されたのである。そして、乗り越えによって、権力の網の目をするすると抜け出しては転覆するような力をもった、しなやかな即興の集団性が次々に出現していた。

これは一つの希望だ。この力が各地に散らばりながら、それぞれの現場で芽吹き続けるにちがいない。

第二に、原発のある大飯町民との関係性をどう考えたらよいのか、という問いがある。大飯に行き、「反原発」の声をあげることは躊躇を抱かせる。大飯へと移動する途中で、自らの生活の場と大飯との距離を感じることができる。大飯の町に入れば、この町の政治・経済・社会の様子と自分の住む町との違いを感じ取ることができる。そして、原発を「引き受け」てきた「この街」と自らとの関係性を問い直すことが不可避に始まる。このような経験も含めての占拠・封鎖だったことを強調したい。

参加者との会話の中からは、「外部」から運動を持ち込むことへの批判、短期的な運動によって現地に住み続ける住民に「迷惑」をかけてしまうのではないかといった批判は当然認識されているように感じられた。また、では、現地社会がすべて「反原発」にまとまるまで再稼働反対の声をここで上げてはいけないのか、再稼働を阻止する行動をしてはいけないのか、という自問自答もあっただろう。このような問いと逡巡のなかで／にもかかわらず、占拠と封鎖が実行され、ましてや逮捕の危険性のある行為が繰り返された。参加者の「にもかかわらず」の意味とその重みを、まず理解することから始めたい。

〈町民の立場の理解〉か〈再稼働阻止のための直接行動〉かという逡巡ともつれ。しかし、大飯原発の現場に潜在的にあったのは〈再稼働阻止のための直接行動〉がとにかく必要だと感じつつ、当然〈町民の立場の理解〉も意識したい、という両者を架橋することはできないのかという問いだったと思う。

占拠・封鎖前のテント村や、占拠・封鎖中に、地元の方々が激励や差し入れに来られたという声も少し聞いた。もちろん、それが全てではない。問題は困難だ。

大飯原発ゲートの占拠・封鎖は、〈町民の立場の理解〉と〈再稼働阻止のための直接行動〉との間でもつれながらも、別の思考、行動、集団性をつくろうという未完のプロジェクトとして存在するものだった。占拠・封鎖のあと、自宅へと戻る帰路で、人々はそのことを痛いほど感じていたと思う。少なくとも私はそうだった。

この逡巡やもつれ、違和感にひたすら付き合いながら、行動に参加した人々の経験のただなかから、新たな思想・運動・概念を組み立てなおすこと(既存の思想・運動・概念で今回の行動を事後的に鎮圧しないこと)。きっとそれは既に始まっている。

「再稼働反対！」を主張する非暴力直接行動と不服従の運動・思想は、未完のまま、あなたの目の前に問いとして投げかけられている。 (2012年7月4日)

終わりに

以上、「大飯原発再稼働阻止闘争」を「再訪」し、その軌跡をたどり直してみた。

この「大飯の闘い」によって誕生を促され、さらに「一つの範型」としての「大飯の闘い」を、それぞれの地域で学びあい、受け継ぐことを試み続けているのが、「再稼働阻止全国ネットワーク」だ。

最後に「再稼働阻止全国ネットワーク」の形成までとその後を振り返り、今後の「志賀原発再稼働阻止」の陣型づくりへの課題についてふれてみたい。

1. 「再稼働阻止全国ネットワーク」の発足まで

2012年7月15日、「大飯の闘い」の余熱がまだ残る中、東京都内で、第1回目の『再稼働阻止全国相談会』が開かれた。

呼びかけたのは、「再稼働反対全国アクション」、「反原発自治体議員・市民連盟」、「経産省前テントひろば」、「STOP ☆大飯原発再稼働現地アクション」、「たんぼぼ舎」の5団体。

前述した楯円の形成にそれぞれが重要な役割を担った運動体の集まりだった。

続く8月19、20日。伊方原発の地元、愛媛県の松山市内で、第2回目の「全国相談会」が開催される。ここで「再稼働阻止全国ネットワーク」発足にむけた大枠が話し合われた。会議の中身もさることながら、たった一泊ではあっても、寝食をともにし、議論を重ねて、関係を深めることの大切さを確認しあえた。そのことの意味が大きかったと思う。

そして、11月10日、「再稼働阻止全国ネットワーク」の結成集会在東京都内で開かれ、さまざまな地域・運動体からの参加者は、300名に上った。

「再稼働の嵐」に立ち向かうための「全国陣型」を創り出していく大きなネットワークが誕生したのである。

2. 「交流ツアー・交流合宿」を通して学ぶ

「再稼働阻止全国ネットワーク」結成直後から、2013年8月まで、原発をかかえる各地へと向かう交流ツアー、各地での交流合宿が連続して取り組まれていく。

2012年12月の敦賀を皮切りに、羽咋、柏崎、伊方、大飯、泊、川内と続いた。

この4月の石川県羽咋市での交流合宿を受け入れた側の一員としては、この合宿が「志賀原発再稼働阻止」の陣型づくりを考えていく大きな取りかかりとなったのではないかと考えている。

その上でさらに各地へのツアーや合宿への参加を重ねる中で、改めて以下のことを強く確信した。

- ① 2012年の「大飯原発再稼働阻止闘争」をまさに範型として受けとめ、その切り拓いた「地平」を石川・富山の仲間と共有し、認識を深めていくことが求められている。
- ② 新開さんたち「STOP ☆大飯原発再稼働現地アクション」が果敢に、そして着実に創り出していった「新しい現地闘争」を能登とその周辺で構築していくための粘り強い取り組みが必要なこと
- ③ 「大飯の闘い」をめぐる示された、幾重にもわたる楯円の動きを能登、金沢—富山で創り出し、それらを可能なかぎり重ね合わせることで、能登—前項の楯円を呼び寄せることに向かっていきたい。

現在、これらの3点についての取り組みを進めているが、前述した今年の7月の規制委員会での再稼働申請に志賀原発が入らず、申請のめどが立っていないことから、反対運動の側に、ある種緊張が緩むような状態が見られるようになっている。

しかし、北陸電力が自ら廃炉をめざすことなどあり得ない。今こそ、「再稼働阻止全国ネットワーク」に集う各地の運動とともに、再稼働阻止の動きを強めていくべき時と心して取り組んでいきたいと思う。

なお、今回の「『拒否』の〈前〉線情報」は、京都の新開さんと寺田さんからの丁寧な「大飯原発再稼働阻止闘争」についての話がなければ成り立たないものでした。お二人に改めて感謝申し上げます。なお、新開さんご自身が書かれたものとして、以下を参照してください。——「大飯再稼働阻止現地闘争」（「情況」2012年7—8月参照）

遠方からの風信

*I WOULD NOT PREFER TO LIVE IN
SUCH A CRUEL WORLD, BUT TO
BECOME TO <THE NOT-YET-BEING>*

「遠方からの風信 (No.1所収)」をめぐって ——若い世代に共通する「拒否」の感性に注目する

「生・労働・運動ネット富山」では、「拒否」の〈前〉線情報 No. 1」の「遠方からの風信」で掲載した、東京に住む知り合いの青年の「Facebook」の内容について、「受信」した側の「仁義」の切り方として、自分・たちがそれを読んでどのように感じたのかを語り合う「座談会」をもった。その「座談会」で話した中身を、同「青年」の了解を得て、ここに掲載する。

「Facebook」というメディアにとって、このような扱いがふさわしいものかどうかは依然判断保留ではあるが、今回の「座談会」についての疑問や批判が、同「青年」をはじめとする読者から、多数寄せられることを期待している。

そこに「予示的政治」がはらまれているのか——若い世代の共通感覚

・今回の「風信」は、本人の許可を取った上で、フェイスブックから「引用」したわけなんですけど、全部載せているわけではないのです。削っているところもある。そういう意味では恣意的に使わせてもらっているところもあります。これは6月の半ばまでなんですね。その後もあることだし、今回掲載する部分が、本人が一番表現したいことなのかどうかよく分からないわけですが、それはともかく、まずは、これを読んでどう思ったのかという話をしましょう。どうですか。

・この中で一番誌面が使われているのは、「10万人集会」のことですよ。そこで耕大くんが思ったことと、それに対して意見を寄せてくれている人がいますね。

これ、前に僕らの議論の中で出ていた「予示的政治」のことだと思うんですよ、問題はね。耕大くんが問題にしたいのは「予示的政治」だと思うんですよ。要するに反原発の集会の中で、その中にははらまれなければいけない、この次の社会の在り方からしたら、この女の人を「排除」と

いうのはおかしいというのは、とてもデリケートな、あるいはセンシティブな、いい感性だなあと思っています。

若い人は、だいたいこれが「予示的政治」の問題であるというのは分かっている。「予示的政治」の問題であると感じる感性は、次の社会を切り開く可能性のある感覚だと思うから、これだけタイトに締め付けられた社会の中で、かえって、そういう感性が生まれてきているのではないか。そこに現状を打破する可能性を見なければいけないのではないか。

その「予示的政治」を感じる感性に賭けなければいけない僕らは、彼ら若者の生を困難にするような社会を構成してきたという意味では、間違いなくその構成員であるわけです。自分はその世代だなというふうに思うので、そういう風に、若い人に対しては自分はいなければいけないんだと、最近すごく思っているんです。我が身も振り返らずに、ややもすると若い人批判をしてしまう人が多いんだけど、自分はそれじゃあいけないんだなあと思っています。

この集会の作り方自体が、予定調和的に既成のパターンを踏んで開かれて終わっている。そんな反原発の集会に未来はないと思うんです。このままそれを何百編繰り返しても、がちが明かないと思う。その未来のなさというのをこういう若い人が感じて、どういう風にそれを突破するのかという風に、じれながら感じる感性というのが、こういう突発的にステージに上がった人の行為を見過ごさない。あるいは、こういう人の行為に対して、どのように主催者やそこに集まっている人が対応するのか、というのをすごく見ている。逆の意味でその場の空気を読むというようなことを、しているんだろうなと感じたのです。

それはすごくいいことだなと、僕も思いました。僕も、そう若くはないのですが、例えばデモに出たり、人前で発言したりするときに感じることにすごく近いんですよ。表現しようとする瞬間に、必ずあるんです。ある既成のパターン内で上手にまとめようという意識と、それじゃあ本当に表現したことにならないだろう。それをどう壊すのかというのが表現だろうという思い、その両方がいつもせめぎ合っているわけですね。特に、人前で自分をさらしながら表現するときにはいつもある。僕のような年代の者にもあるんだけど、そういう感覚が若い人に受け継がれ、より研ぎ澄まされてきているように思います。

こういう既成のものではもうダメなんだ。泥舟に乗っているわけだから、このままだと沈んでいくよということがよく分かっている。そういうセンスというのがすごく研ぎ澄まされてきている。だけど、そう簡単に出口は見つからないし、ひっくり返すことはできない。そういうことが感覚的に分かり合えている人たちなのかなと、耕大くんの問題提起に対するフェイスブック上の反応なんかを含めて、そう思います。

前面化する「予示的政治」

・「いいね」とか、意見を寄せている人たちの感覚も、そういう意味では同一の波長にある、同じ質をもっているのではないかという感じが強いということを行っているんですね。

・「主催者側の立場からすると」とか、一生懸命にコメントしている人がいて、私もそれが新鮮でし

た。自分の感覚ってダメだなと思ったんだけど、やっぱり最初に読んだとき、自分が主催者側の意識に立ってしまっていて、「いやあ〜」と思う自分がいたんですね。でも、痛々しい。耕大くんの文章を読んでいると、どこか弱い部分があるように感じる。

・耕大くんの生育の歴史というか、生育過程に、近いところで接してきたところがあるからなおさらなのでしょう。そういうことがあるから、あまり突き放して見られないところがあるんでしょうね。

・今出ていたのは、大事なポイントだと思います。僕らみたいな古い世代から見ると、執着しているものがよく見えないわけですよ。転々と変わるじゃないですか、やっていることが。何に目が行っているのかということが転々と変わる。その転々と変わることが何であるのか、それはどういうことなんだろうということ、僕は読んでいて思うわけです。痛々しさの反映であると同時に、そういう風に転々と自分が取り組みたいことが変わるということのわけが、今の「予示的政治」の話で分かったような気がしました。

つまり、「予示的政治」というのは、僕らみたいな世代の人間にとってみれば、闘争というのは敵を設定して、それを倒すことに向かってしゃにむに突き進むことなんだと。石を投げるか、火炎瓶を投げるか、棍棒を振るうかは別にして、なんかそういうイメージで考えるわけじゃないですか。で、そのことの中に「予示的政治」なんて言っている余裕はないよ、というのが、ある時代までの運動観の中では、それが当たり前であったと思うんですね。逆に言えば、そういうこと自体が「予示的政治」だと思以外になかったというか。だからつまり、日常性から離れて、非日常的な空間をそこに創出するんだぞ、ということ自体が、そんな言葉はなかったけれども「予示的政治」だったんだというか。

それでもその時代にあったことは、もっと前の世代からすれば、僕が耕大くんについて感じるのと同じようなことを感じたんでしょうね。よく言われた言葉で言えば「あいつらマルクス主義のマの字も知らないくせに、コココーラと何とかの世代だ」と揶揄された時代であったわけだけれど、そういうのって、ある意味では同時代で生きる人と、もう一つ前の世代のずれというのは当然あると思うんだけど。

そういうことと言えばそんなに変わりはないんだけど、そのことのもっている位置が前面化しているわけですよ、耕大くんの場合なんかで言えば。

つまり、火炎瓶を投げることも、「予示的政治」でないことはないというのかな。日常生活を否定するところに自分が立つことによって、その行為が成り立つわけでしょう。そのこと自体が日常性を否定しているんだ、というある種の高揚感を生むわけじゃないですか。それが、「予示的政治」でもあるわけですよ。

でも、そういう言い方で言っている限り「予示的政治」なんて言わないで済んじゃうところがあるから、今展開してくれたように、そのことをそのこととして、一つのカテゴリーとして考えていいような、ある中身があるというか、広がりがあるというか、そういうところで受け取らなければいけないんだなあ、今話を聞いていて、改めて思いました。

マイクを占拠して何を言うのか

・おそらく、この集会に出ていた人は、大江健三郎とかですか、そういう人たちが粛々とステージに出てはしゃべっていく、そのパターンに飽きるんだと思うんですね。飽きるというか、その場の構成としては、予定調和であって、「つきあっていらんねえなあ」ということですよ。学校と同じことでしょ、次の先生が来てしゃべるみたい。みんな先生方みたいな人たちだもんね。学校で「つきあっていらんねえなあ」と思って、他のことに気がそれるのと同じように、他のこと、つまり誰か予定外の人が壇上で話し出したことに、気が行ったんだと思う。粛々と流れる儀式的にも思える時間の中で、何かほころびはないのかと、若い人は探していたんだと思う、自分のセンスで。それで、こういう人が出てきたら、これはその場を壊すことじゃないですか。

ある意味で、この集会自体は、社会の生きづまりをひっくり返すための集会である。で、そのひっくり返すことのひな形が、その集会の中で行われているわけだから、それに荷担しないでどうするのかという発想ですね。これは、主催者とは真逆の発想だけれども、必ずそういうことってあると思うんですね。そこに並んでじっと話を聞かされている人たちの中に、そういう感覚というのがあって、で、そういう感覚に依拠しない限り、ひっくり返せるはずがないわけですよ、世の中は。

・そうですね。そこで、今のところどなたもご指摘にならないんですけども、この「拒否」の〈前線情報〉の第1号の冊子の中に、2012年の7月の「10万人集会」のことについて触れられているところが2カ所あるんです。気がついてますか。一つはここですよ。もう一つは23ページのところです。そこを皆さんちゃんと着目してくださいよ。

つまり、耕大くんは、自分がその会場のマイクを占拠して、ある種の攪乱的な要素を含ませながら、何か言いたかったんです。それでその前の日に電話してきて、何を言ったらいいと思う？ということ聞いてきたわけ。そこのところについて、ちょっと触れたんですね。話の主題で言えばメインのものではないんですよ。ただ、そのことを触れざるを得なかった、と言うか触れたかったんだ。言ったことはまた別にあるんですよ。そこまでにしておきます。これ以上話すと、何を答えたかということに踏み込まざるを得なくなるから。耕大くんの投げかけていることを受け止めるのであれば、そのことが一方で出てこなければおかしいでしょ。

・そうでしたね。まあ、最初から耕大くんもそういう気持ちで臨んだんだと思います。

・ここに書いてある限りでは、その女の人が連れ去られた後、壇上に上ってマイクを握ったまではよかったのだけれど、マイクの音が切れていたという話になっていますよね。耕大くん自身も、自分のこととして、そこのところはもう少し掘り下げてほしいと思うんだけど。何をそこでしたかったのかということが、必ずしも耕大くん自身の言葉としても展開されていないんですよ。

仮に何か言ったとしたら何を言ったのだらうと考えると、その女性がそこに出てきたこと、そのことを許容できるかできないかという、さっきの「予示的政治」というものを我々は求めているんだ！という叫びみたいなものと、耕大くんがそこでやろうとしたことや言いたかったことが、本当に対応していたかどうかということが、耕大くんにも問われることとしてあると思うんですけども。そして、もう一方では、耕大くんの問いに電話で答えた者が考えていることが、全く問われているわけで

す、そこで。それは分かります？

・耕大くんには話すべき中身は今のところないんだと思うんですよね。やりたいことはやりたいんですよ。要するにこの女の人みたいなことをしたいわけです。だから、自分だと思ったんだと思う、この女の人をね。だけど、中身はないんですよ、耕大くんにもなくて、あなたに「何を言ったらいいですか」と聞いたんだと思う。だけど、聞いてもピンとこなかったから言えなかったんだと思う、結局はね。言うべき言葉はないんだよね。ないんだけど、このパターンを壊さない限り、新しい社会は語れないんだというか、そういう切迫した気分をもってその場に臨んでいたのじゃないか。

・いやあ、そこまで私は思っていなかったなあ。

・だから、耕大くんに戻ってくるものもある。最後にまたそっちに戻っていくことにして、前の日に聞いてきたっていうことも、耕大くんの問題としてはあると思うんだけど、それに対してこちらが何を言ったのかということも逆に言えば問題なわけですよ。そのすれ違いをどう考えるのかということが大きなことなんだなということも、改めて思いました。耕大くんが期待しているのは別にそういうことではなかったと思うし。いや、期待しているのかどうかは分からないんですよ。耕大くん自身がもし言えるとしたら、なんとやったか分からないから。ただ、少なくとも今出てきている、どのような目標あるいは狙いをもった集会であれ、10万人であろうと100万人であろうと、そこが「予示的政治」の質をどこまで持っているのかということが大事なことだということ。そして、そのことを感じる感性がいいって、さっきから言われているわけで。

近接化する「政治」と「予示的政治」との距離

・もうちょっとだけ戻ってそっちの方を言うと、例のデモ論のような話をしたときにもその話は出たと思うんだけど、要するに東京周辺で行われた「3・11」以後の反原発デモというのは、少なくとも2011年のある段階までは、その中心な動き方というのは「素人の乱」の人たちが作ってきていますよね。あのときの持っている雰囲気というのは、さっきから出ている「予示的政治」とストレートな「政治」というものの距離がないというのか、「予示的政治」というのが生まれるか生まれないかというよりも、あらかじめ「予示的政治」を構成すること自体が目指されていると言った方がいいのか。「素人の乱」というのをやっている人たちのよさというのは、そういうところがあるんじゃないか。

で、それが次の段階に入るということで、「官邸前デモ」に入っていくわけだけでも、その中でもなかったとは思わないわけです。少なくとも、何万人集会とか言って、明治公園がいっぱいになったとかならないとかいうところでないところのほうが、ずっと「予示的政治」の質をもっているというのか、もつことが当たり前であるというのか。

逆に言えば、この「10万人集会」なんかは明らかに、この間の日本の反原発運動の中でははや主流ではないような、もう一つ前の人たちを寄せる集会の形式を踏襲しているだけでしょ、完全に。僕らからしても、あれなんだ？というのか。別に、大江健三郎さんにがんばっていただくの

はいいんだけど。

・なんか、心躍らないというか。

・そうそう。一番大江健三郎さんなんか聞いてみたいよねえ。ここであの女性がしたことは、あなたにとって何だったんですか？って。別に、そんなところに出てきて演説することがあなたの仕事じゃないよ。あなたの小説にしか我々は価値を見ていないよ。あなたが何かそこで言ってくれても、なんのこともないよと、僕なんか思っちゃうんですよ。表現している一人の作家として、そのことにきちんと向き合う責任があなたにはあったんじゃないかと言いたいところはあるよね。

でも、耕大くんたちってそういうことは言わないんだよ絶対に。そういうげすな発想はないんだよね。そんなことは詮索しないって言ったらしいのかな。

・それは、「有名な人」でくられているわけで、あそこに出ていた「だ、だ、だ、脱原発」とか歌う、その筋では有名になった人たちというかな、そういうのがみんな出ていたわけですよ。それが大江健三郎であれ誰であれ、一緒なんだと思う。それはそれとしておいたというか、だから「有名な人」っていう風を書いてあったんだと思う。そんな風にその人の思想性だとかなんだとかは、考えていない。

僕はあの集会に行ったんだけど、その中で一番印象に残ったのは、園良太くんという人が、集会をやっている最中に、出たり入ったりゾロゾロソロソロしている連中、花見の帰りみたいにバスに向かう人たちに向かって、「あなた方は、帰ったあとにどうするんだ！これで終わりなの？」みたいなことをずうっとしゃべっているわけですね。自分はそこでひたすら彼を見ていただけと言いか、見守っていただけで、立ち止まっていた人も結構いたんですよ。一生懸命聞いている人もいたんだけど、でも、俺もそう思うぞって言って、彼に変わってマイクを握って俺はこうだって言う人もいなかったし、若い人の中にもいなかった。それも残念ながら集会の一コマになっていた。彼はそれを異化したかったんだけど。恐ろしいというか。

でもそれに気がついた人は、どんな風にいたのかなとは思。ほとんどの人はそのこと自体にも気がつかずに、人がしゃべるとるわいみたいな感じで帰って行ったんだろうけれど。

・あなたはこの女の人のことは、気がついたのですか？

・僕はそのとき気がつかなかった。僕もあっちに行ったりこっちに行ったりしていたわけで、前の方に座ることができなくて、後から来て、要するに集会がどういう風になっているかということだけを気にして、ぐるぐる僕も回っていました。だから、そのステージでそういうことが行われていることに全然気がつかなかったし、耕大くんにも気がつかなかった。

・ああいう 10 万人とか何とかいうのは、予定調和的なプログラムで進められていくよね。・それしかあり得ないと思っちゃうよね、主催者側で見るとどうしてもね。

「自分たちの意志を練り上げていく場」はあるのか

・そうやって 10 万人集まるということに価値がないわけじゃないけれど、そういう集まり方というのは、自分たちの意志を形成していくというか、それを練っていくとか、いろんなことを勘案しながら

ら、自分たちの場合はこうなんだと、大げさに言えば、人々が自分の原発に関わる意志を練り上げていく、そういうことに入らないでしょ。僕なんか古い感覚なんだと思うんだけど、こうやって人が何万人集まったとか言っても、このままだったら拡散しちゃうじゃないかという思いがすごくあったので、そこで何万人集まろうと、そのこと自体は別にたいしたことじゃないと思いました。

そうじゃなくて、そういう意志の表出の仕方をさらに練り上げていって、私の地域ではとか、私の職場ではとか、そういう風に自分が生きていることを主要に占めている空間で、そのことを本当に問題にしていられるような、そういうことをどうやって作っていくのかということで、「反原発評議会」というようなものを作れ、というようなことを言ったらいいということ、耕大くんには言ったんですね。

そういう風に今のところ日本の反原発運動というのはできていないでしょう。自分たちの意志を絶えず練り上げていく、そういう場所をどうやって作っていくのか、そりゃあ街頭がそれであったと言われればそれまでなんだけれども。でも街頭の運動というのはあるサイクルでしかできないからね。そういう、人々が自分たちの意志を練り上げていく場をどうやって作っていくのかというようなことが、今必要なんじゃないかと言いたかったんですね。だから、言っていること自体はそんなにおかしくはないと思うんだけど、ただ、耕大くんなんかはその場に臨む臨み方としては、やっぱりそれはとんちんかんなことだったんだなあという風には思うんですよ。

・今の話を聞いていて思うのですが、若い人たちにそのことが通じにくいには、状況的な問題があると思います。その「意見を練り上げていく場」というのが、古典的なパターンで言えば労働現場だったと思うんですよ。でも今彼ら、耕大くんたち若い人の労働現場は、非正規雇用で、下手したら派遣的な雇用で毎日現場が変わるような雇用のされ方だったりして、現場に仲間がいなような労働現場なわけですよ。自分とピンハネすることばかりしか考えない雇用主しか見えないような現場だったりして、「意見を練り上げていく場」というのは、昔のイメージどおりのものはほとんど労働現場にないと思うんですよ、どこにも。

あるとしたら、要するにSNSですよ。SNSで親密に、いきなり、ここに掲載されているような話になるわけですよ。僕も思うんですけれど、ものすごい傷つきやすい丸裸の文を書いているわけです、耕大くんなんかは。それでまた丸裸に返す人もいて、「ぼくもなんだか仕事でへとへとなんだけれど、わかるよ」なんていう文を、丸裸に返してくる。恐ろしいほどに丸裸な関係でやりとりしているんですね。でも、この人たちはたぶん、「意志を練り上げていく現場」みたいなものはもたない、実生活の中にはまったくなくて、あるのはSNSを介してなわけです。

ああ、そうか。だから、もしかしたら彼らは路上に出やすいのかもしれないと、今ふと思いました。要するに練り上げる場がないから、ネットで繋がり、「行かないか」って言ったら「じゃあ、行ってみようか」という風集散するという、そういうことが非常に近いということじゃないでしょうか。

僕ら富山みたいなところでいて、公務員みたいな仕事をしていると、昔のイメージは職場にもまだもっているようなところがある。それに、こうやって皆さんと直接会って話していると、「練り上げていきましょう」、ということに非常に僕らが近いと思うんですよ。でも東京にいる彼ら若い人には、それはイメージできないのでは、と思いますね。

・ただ、僕みたいなのが一番こっち側、右側にいるとすれば、耕大くんたちが一番左側にいるとして、例えば、今度の号でも取り上げたフリーター全般労組やさっきから言っている「素人の乱」とか、ああいう人たち。僕みたいなある種の古典性を引きずっているわけではない、だけど全くそれと無縁ではない、だからといって、耕大くんたちのようにほとんど個に還元されているわけでもない、そのほんの手前のところである種の「共同主観性」みたいなものを成立させようとする。

世代的に若者とオールドを繋ぐ位置にある運動体

・あなたが言うように、耕大くんたちにはそういう場はないかもしれないと思うんですよ。だけど、もうちょっと前の世代の人たちのところで違った在り方を作ってきているということはないのかなと思うわけです。だから、フリーター全般労組の例で言えば、「自由と生存のメーデー」というのをずっと続けているでしょ。そういうのは街頭で意志を表出していくありようですよ。「素人の乱」も、ひたすらそういう、昔の僕らからすれば、「あれは何だ」といことになりかねないような、ほとんど攪乱的な街頭の使い方をするじゃない。だけど、同時に「素人の乱」で言えば、自分たちが開いた店で人が集まって絶えずだべっていたりとかね、するような要素もあるし。フリーター全般労組にしたって、「自由と生存の家」とか言って共同の住まいを作ったり、「野菜扱っています」みたいな側面もあるわけですよ。

そういう意味では耕大くんたちのことをさっきから言ってくれているのはその通りだと思うんだよね。ただ、問題は、ぶつかっていないとか、うまく交錯できていないということ。耕大くんのこの文章の中でも、「もやい」に行ったときのことが書いてあるんだけど、「もやい」なんていうのは、ある意味ではおなじではないけれどもフリーター全般労組とか、あの辺の世代に近いでしょ。

だから、そういう意味では、政治と「予示的政治」が区別されない、区別しないことにこそ意味があるというのが耕大くんたちであるとするならば、僕なんかは、「予示的政治」なんて言うのは、それを貫徹することであり得ることであるかもしれないけれど、それがメインに掲げられることではないというような感覚なんで、その真ん中の辺が、その辺りのことを一番考えているというかな。

「拒否」の〈前〉線情報」の第1号の中で取り上げているフリーター全般労組の人たちの、今年の4月の反原発企画「西へ行った人、北へ行った人」というのは、自分たちのそういうポジションをすごく意識していて、それを考えながら組んでいる企画のように見られるところがあって、それはそれですごくいいなあと思うところがあります。そういうことに耕大くんたちがどういう風に反応するのかみたいなことを、僕は本当な知りたいんだけど。

なんでもあいの街「東京」

・この耕大くんのフェイスブックっていうのかな、これ、今、「10万人集会」のある種の古典的な在り方に対して批判的な目で取り上げていると思ったら、反貧困の生活保護費の切り下げ攻撃に反対しよう！みたいな集まりがあるという案内が出ていたり、いろいろ出てくるじゃない。そういう意味では、ぼんぼん飛んでいるように見えるんだけど、そのことの必然性みたいなことが、

さっきから上手に言われているような気がするんですよ。

・社会をひっくり返すつもりならば、その場も常にひっくり返されるものなんだという風にないと、僕は我慢できないよ、ということなんだと思うんですね、どこへ行っても。それが非常に現れているのがこの集会の場面であって、どこに行っても基本的にそういうセンスでいてしまう。だから、「これは教条主義だ、面白くない」と思ったら、もうダメなんだ。

・すうっと引いちゃうんだよね。

・でもそれを引いちゃうと見るのが、僕らなんだろうな。

・だから、そういう風に見るとそうなんだけれども、彼らの中では一貫している。

・東京の不思議なところというか、いろんなものがある。だから、身を引いたように見えても、自分は引いたつもりはない。別のものへ転戦したつもりになれる。だって、「素人の乱」だって、行けば常に何かやっているから、どこからでも関わられる。

・矢部史郎さんが、東京というのは、何でもあり、何にでも出会えるんだ、というのが良さである、って言っている文章があって、ある意味ではそういうことだよ。

・富山だったら、一つ引いたらそれだけで出入り禁止になっちゃうよ。

・やっぱり富山じゃあ生きづらいよね。

・息苦しくなっちゃう。

・いろんなことがこの中に盛り込まれているんだよね。だけど本人はいろんなことを盛り込んでいるとは思っていないと思う。みんな自分が表現していることは同じことなんだよ、ということなんだと思う。

・耕大くん、そう言えばあれは書いてないんだね、電車の中で叫んでいるっていうのは。

・あれはユーチューブかなんかに載っているものでしょう。

・僕はあれは本当にびっくりしちゃった。「再稼働反対！」って言って、電車の中で回るやつ。金曜行動の後で会って、「僕は金曜行動の後も一人でやっているんです」って言うから、何をやっているのかなと思ったら、最初のうちは、東京の歩道って広いから、緑地帯みたいところがいくつかあるんですよ。そこで止まって、そこで一人で叫ぶわけよ。聞いている人は誰もいないんだよ。でも、一応信号待ちで止まっている人とか、警官はいるよね。

最初そこでやっていて、いよいよ人がいなくなったら、今度は「高円寺の方へ行こう」ということになって、電車に乗ったのね。電車に乗ったら、「僕、やりたいことあるから。あなたはここにいてください」って言うから、何するのかなあって見ていたら、電車の中でずうっと叫んでいるわけよ、「原発なんかいらなんでしょう、そうでしょう」とか言って。ただずうっと言って回るだけなんですよね。でも、そのうち、右翼かなんかにつかまって、ボコボコにされるかもしれないとか、あるいは警察なり列車の警備担当者に捕まるかもしれないとかって言いながら、何とか戻ってきた。

・それは、そのときにあなたと一緒に電車に乗るもつと前から耕大くんがやっていることなんですよ。「ユーチューブ」かなんかに映っているのを見たよ。

・それで、何人か共鳴して、「そうだ！」って言ってくれる人もいます、って言うわけだけれど、それは、酔っ払いかなんかが言っているのかもしれないし、わけがわかんない。東京の電車だか

ら、人がいっぱいいるわけよ。時間帯によっては富山なんか誰も電車に乗っていないっていうこともあるけれど、わあっといいるから、わあわあ言ってもすぐに隠れてしまうわけよね。車両が全部繋がっているからね、東京の電車は。ずうっと行ける。

・東京には何でもありみたいなそういう要素があるでしょう。僕ら東京に行ったら本当に思うけれど、真夏なのに真冬みたいな格好をしている人がいたり、着ているものもみんな自由じゃない、歩いていると。富山じゃあそういうわけにいかんもんね。そういう意味では、目を白黒させているようなところがあるけれども。

耕大くんが「何を言ったらいいだろう」と言ったときに返したもののすれ違いは、やっぱりすごく大きいと思うんだよね。

・僕が思ったのは、壇上を占拠した人が、「枝野さんというのはいいい人だと思います」というような素朴なことを言っていたじゃない。でも、その格好を見たら、モヒカンなんだよね。発言とその人の存在のありようのちぐはぐさというか。

・耕大くんたちはその言葉に注目しているんじゃないんだよ。彼女が言っていることはわかんないよ。僕もあの映像を見たけれど、何か言いたいことがあるんだという思いだけで飛び出してきた感じはするね。

・この後の耕大くんのフェイスブックでは、歌を作ったことが載っている。一つは福島の子どもたちの十数人が甲状腺がんになっていることが明らかになったのに、自分はそれを知らないでいたと、それを繰り返し歌っているのね。あれも路上でやっているわけでしょう。

・そう。たぶん高円寺の駅前だと思う。もう一つは TPP のこと。TPP でメキシコの百姓がみんな失業しちゃったということ。自分で撮って「ユーチューブ」に載っている。字幕も出るようになっていて、クリックすると文字が出てくる。自分で「照れてどうする」なんて突っ込みを入れている。

言葉が指し示すことを読み手はどう受け止めるのか ーその世代的ギャップ

・最初にフェイスブックから僕が文を集めたでしょ。ものすごく表現がストレートなんだよね。SNS って基本的には公の場じゃない。誰が見るかわからないから。それなのにストレートな言葉を並べていて、僕には、こういう言葉を並べていいのかという戸惑いがあるんだけど、そういうのはないみたいね。

死にたいとかなんとかを書いていた時期があったんだよ。それですぐに親に電話をしたんです。「耕大がこんな事を書いているよ」って。その後ぱたっと書かなくなった時期があって、「絶対おかしいから連絡を取ってよ」って頼んだんだけど、そうしたら親から連絡があって、「耕大はいつも詩的な言葉で書くから、大丈夫。詩だと思って」って言われて、ほっとしたんだけど。やっぱり書いているトーンは似ているんだな。文章のもっている圧力というのかな。正直、今でも読みづらい。

アウトノミアのことを紹介しているようなところは、すうっと読めるんですよ。耕大くんはこんなことに興味を持っているんだな、ふむふむという感じで。でも自分のことに近いような言葉というの

は、なんか強いというか、ちょっと僕にはつらいという感じがする。耕大くんの文章に触れて、僕は困ったという感じに近い。

・最近のも何度か自殺未遂をしたんだとか、いつでも首をつるための輪っかみたいのを置いているんだとか書かれているよ。

・へえ～、そうなの。それ、今のこと？

・僕は、そういうのはそのまま載せていいのかと思ってしまう。最初はみんなにメールで配っていて、こんなのが書いてあったよとそのまま載せていたんだけど、だんだんつらくなっていくのね。それで、あなたが一度耕大くんに本誌1号に載せてもいいか聞こうかって言ったから、いいのかなあと思っていたら、やりとりがあって、載せてもいいということになったときに、僕がだいぶ気になるところを減らしたんですよ。けれども、逆に耕大くんの方がそれに付け足してきて、この写真はどうしても必要だとか、この文を載せてほしいとか書いてきて、ああそうなのか、こういうことは省いてはいけないことなのかと。そういうやりとりの中で、緊張感をもっていました。

・さっき出ていた「予示的政治」の話は興味深いし面白いんだけど、耕大くんは SNS の上で自分の感性をさらけ出して、すぐにイベントを組むんですよ。何何しませんか？という風に、いっぱいやっているのね。そういうことに対しての反応にはでこぼこがあって、いっぱいイベント会場に来たりこなかったりすることで、一喜一憂してるんじゃないかなあと思ってしまう。耕大くんは一人でやっている気がする、見ていたら。一人で何でもやっていたら目に遭っているんだしたら、気の毒だなあと思ってしまう。

・本当に楽しいのかな。本当にそう思っているのかな。手応えみたいなものはあるのかなあ。

・その辺の「間尺」っていうのかな、ずいぶん違うような気がするね。痛々しいとみるのと同じように、これで自分のやりたいことがやれているのか、絶えず一人になってしまっているんじゃないかとか、そういう感想がさっきから出ているんだけど、そういうのも本当にそういうのでいいのかなとか。

さっきの死にたいとかいうのも、言葉が表出されるときに、よく言われる言い方で言えば、自分の思考することを表出していると同時に、言葉というのは何かを指すわけですよ。その距離みたいなのが非常に違うんだろうなとは思うね。人によっても違うんだろうし、時代によっても違いがある。これである種の成就感みたいのがあるのだろうかというのは、それはそういう言葉の受け止め方のところで見ているからだっていうことはないのかな。僕らのもっている「こうであることが充実していることだ」とか、「何かやるんだったら共同の関係が成り立っていなければダメなんじゃないか」とか、そういうある種の見方で見ているでしょう。それをそのまま耕大くんに当てはめて見ていることでいいのかという問題よね。

・まあ、いろんなことが出てきたけれど、大きく分ければ、最初に出てきた「予示的政治」を伴わないアクションなんて無意味だということ。これはオキュパイの世界的な運動にしたってそういう風に成り立ってきているんですよ。むしろそれについて行けない古い方が問題なんだと思う。それと関連して、運動感覚だとか運動観におけるある種の世代的な相違っていうのはあるよね。そういう問題はあると思う。

それともう一つは、今言っていること。例えば「死にたい」って言えば、あなたは文字通り死にたがっているんじゃないかと受け止めるんでしょう。そういう受け止め方というのは違うんだろうと思うんだよね。それはさっきから言っていることにみんな通じるように思うけどね。

・小学校5年生の女の子が、担任の先生に、「死にたいと思って首をつるための輪っかを作った」って言ったんですね。で、慌ててお母さんに電話したら、お母さんは笑って「そんな深刻な問題ではないんですけどね」っていうんです。それで、担任はどうしたらいいのか分からなくなるんです。そんな重大なことを聞いておきながら、そこにコミットしたら、軽く返されるという。その女の子にもそんなにコミットしてほしい感じもない。これは、もしかすると、今話されている、言葉が表出されるときに指すことの世代的な違いなのかもしれない。

フェイスブックを活字にして掲載することとは

・気になるから言うんだけど、結局これは耕大くんのフェイスブックをもれなく全部載つけたわけじゃあないんだよね。一種の「引用」なんです。その引用の妥当性を考えなければいけないのかなと思ってはいる。フェイスブックというものをこうやって紙の上に表すということも、本当はどうなんだろうと思う。それをまるまる載せないで、ある程度編集しているのもどうなんだということがある。この後もこういうことを続けていいのかどうか。フェイスブックっていうのは、こういう風に読むものではないんだろうね。

・読み捨てみたい感覚でいるから成り立つものなのかな？

・僕らみたいな感覚では、どんどん言葉が飛んでいくという感じだけでも。そういう感覚で行けば、こんな風に紙の上で表すこと自体が邪道じゃない。しかもある種の編集をしているわけだよ。それでいいんだろうか。

・やっぱり、人がフェイスブックで書いたことを切り取って掲載している僕らが、書かれていることに対して、自分たちがどう見ているかっていうことをある程度表明しないといけないよね。そうしないと、非常に中途半端なことになる。

・公平じゃないですよ。これを読むことで、僕らの「手つき」ばかり見える人がいると思うんだよね。その辺は本人が今のところは、いいと言ってくれているからこうしているだけのことなんだけれども。

・耕大くんのフェイスブックで現在は見られないものもあります。彼は途中で休憩する場面があって、見せてない時間が何か所もあるんですよ。普通ならいつでも、これまで書かれたものが見られるようになっているんですよ。だけど、彼は自分で、ここは削除しようとか思ってそうしているんだろうと思います。

彼の表現してきたことの蓄積を、僕らが適当に切り取って印刷してしまった。一応、「これでいいですよ」と言ってもらって載せたわけじゃない。ぼくは、あんまりにもストレートな表現については、そう感じるのは自分の感性だからまずいんだけど、ここまで言っているのかいという風に、ずっと心配しています。

・それに対して「いいね」っていう返答が返ってくるわけじゃない。そのときの「いいね」っていう反応に対して、「何でそんな軽いことが言えるの？」って言いたくなるじゃない、僕らからすると。

・軽いことなんです。きわめて軽いことなんですよ、フェイスブックのやりとりは。

・軽いと感じるのは僕らだからなんですよ。

・だから僕もなかなか「いいね」を返せないですよ。普通なら日常性そのものをポッと載せてしまっわけよ。でも耕大くんはそうじゃない。耕大くんの日常というのがこういうものなんだろうなと思いはじめたんだけど。

フェイスブックでは、自分の日常をポンポンポンポン書いていくんです、基本的にはね。だから、耕大くんの日常というのは僕から見たら、すごい非日常的な日常を送っているから、どうしようかと思ってしまうんだけど、彼はそういうのが普通なんだろうなと、最近時々思います。

・今回のフェイスブックには未だ出て来ないんだけど、途中でブラック企業みたいなどころにいて、ぱっとやめるじゃない。そのやめかたにしたって、僕らからすれば「もうやめたの？」というのがあって、その次はもう違う話題が出てくるみたいな。自分がやっていて困惑したとか大変だったということが、必ずしも書いてあるわけではないんですよ。

・僕は、これほどむき出しじゃなくて、もうちょっとアイロニーがあってもいいと思うんだけどなあ。斜めに見るといっか、そういうのがない表現だから、読んでいてつらいのかな。物語だとある意味で読めるわけじゃないですか。こういう風な枠で捉えていて、自分の経験はこうで、というようになっていけば、読めるんだけど。

・別にそれは耕大くん特有のものと言うよりは、とりわけ東京なんかで一人暮らしをしているような若い人に言えることなんじゃないですか。

・耕大くんの言語と僕らの言語との間に、共通語が今のところないんだと思う。今やっていることは翻訳作業みたいなものであって。そうなればなるほど、相手の言葉の神髄を外しているのかもしれない。自分の言葉に翻訳しているわけだからね。応酬ができるようになってくればいいんだけどね。フェイスブック的にやれないとだめなんだろうな、応酬なんていうのも。

この若者の動きこそが、ガタリの言う「主観性の地図作成」ではないのか

・耕大くんの「その場の強制力に抗いたい」という感覚、「その中にどっぷりとつかっていたら、身動きがとれなくなる、反転させたい」という在り方、それだと、「素人の乱」の松本はじめさんのところへ行ったら、どこへ行ったら、その人の弟子になってどうこうというのはありえないでしょ。そこでのある種の権威に対しては、与しないといっか、それに背を向けたいわけだから、常に。

その場の成り立ち方を読むんだと思う。若い人たちは成り立ち方が一番気になって、「この場はこの人が仕切っているのか、ふうん」という風になるんじゃないかな。

耕大くんもそういうことに長けているといっか、そういうことが特に敏感だから、いろんなところに行っては帰るようなことをしているように見えるんだけど。面白そうだぞ、ここに「予示的政治」が展開されているのではないかと首を突っ込んでみる、そして、その場の成り立ち方のよう

なものを、さっつつかんでしまう。その点においては一貫しているわけです。で、そういう若者の在り方が、現状を変える力にならないかなあと
思います。

実際、耕大くんだっていい線いってるわけでしょ。「素人の乱」とか、フリーター全般労組とか、「もやい」とか、そういうところにはちゃんと行っている。行っても、その場に腰を落ち着けてが
んばる人にはならないわけだけれど。「こういうのいいな、よしがんばるぞ！」なんて書いているか
らね。「それどうなったの？」って言いたいところは、もちろんあるんだけどね。

実は、近年、ガタリが再び注目されているらしくて、少し聞きかじっているんだけど、耕大くん
が、いろいろなところに行ってみたり、SNSを通じて丸裸の論議をしたりする在り方を、ガタリが言
う「主観性の地図作成」をしているんだと捉えてみたいんだけど、どうでしょう。

村澤真保呂という人によれば、「主観性の地図作成」とは、自己が既成の秩序の中にいながら
その秩序に従わない固有の点である「特異点」となり、そこから、自己と自己を取り巻く空間の地
図を描く試みであり、不断に書き換えられるものだという。「マイクロファシズム」に常にアレルギー反
応を起こし、「マイクロ政治」において常に「予示的政治」を求める彼らの在り方は、まさにそう呼べる
のではないかと思うんだけど、どう思う。

・「主観性の地図作成」か、なるほど。そう呼んだほうが、なんだか若者の在り方を捉えやすいよ
うな気がするよね。普通、「地図作成」というと、自分の勝手な、つまり主観的な見取り図ではなく
て、他者とも共有できるように、縮尺を合わせたような、ある種の客観性が込められるように思うの
だけれども、ガタリの使い方は独特で、「主観性」の「地図作成」というのだから、そこにもう一ひね
りあるんでしょね。特有の意味が込められているのだろうけれども、そこも含めて、ぜひその方
向で考えていきたいね。

若い人の感性が社会をひっくり返す原動力になる ーそこに近づきたい

ひきこもりの人たちにしたら、SNSをうまく使って、「主観性の地図作成」に向かう可能性が
あると思う。ひきこもりの人たちが、逆にどうやって世界をひっくり返す原動力になれるのか、とい
う問いとしてもぜひ考えたいと思うんですね。文字通り身動きがとれないまでに攻め込まれている
中で、オセロの玉をひっくり返すようにして世界を反転させようとするわけだから、身動きできない
自分自身を裏返すことによって世界を白から黒に反転させるというようなことなのだから、そのひ
きこもりという行為、あるいは、どこかに出て行ってもすぐに帰ってくることを繰り返してしまう行為
の中に、すごいダイナミズムが隠れている、という風に、その可能性があるんだという風に、考え
てみたい。また、そういう風にしか今の世の中は変わらないのかもしれない。

・その通りのことが起こっているんだと思うんだよ。オキュパイの世界的な連鎖なんていうのは、既
存の捉え方では、いったい何が行われているのか分からないというような要素をたくさんはらんで
いるわけでしょ。そういうことがもっともっと進むんだと思うよね、この先。

だから、逆に言えば、「彼らはこうすべきだ」なんて、僕らが言えちゃうようなことではどうてい彼

らは解放されないんであってね、それについては、僕らは言葉がないようなことなんだと思う。ただ、点線であれ、そこに近づきたいという思いがあるから、こういう悪あがきをしているわけです。「風信」のコーナーに若い人のフェイスブックの文を使わせてもらったり、それについて今日ここで話しているみたいにあれこれ言ってみたりするという一連のことも、ほとんど悪あがきですよ。これは、悪あがきの産物なんですよ。

その場でどのように振る舞うのか ー自分たちの役割は若い人の登場できる場を用意することではないか

・僕たちは、『拒否』の前線は」なんて言っているわけだけれど、ようするにあの「10万人集会」では、大きく「拒否」を言っているわけでしょ。その「10万人集会」の中の政治を「拒否」するってことだよ。そういうのは、僕らはなかなかできないと思うんだけど。あの女の人を目の当たりにしたら、僕も実は耕大くんみたいなのところがあって、周りはどう動くのかって気にするところはあるんだけど、実際に自分自身はその場で反応できなかったと思うな。

・僕は、何も振る舞えなかったとは思いますが、「ちゃんと聞けよ」ぐらいは言ったと思うな。

・そういうのが声になって、波になったら、新しい政治になったのかもしれない。あれは画期だったと後に言われたかもしれないけれど、ならなかったんだから画期的な集会とはならない。そういうことを耕大くんは画策していたんだと思うんだけど。自分で、あの女の人のようなことをしたかったんだろうね。

・だから、すれ違いが激しいわけでしょ。「反原発の評議会を」なんて言っているんだから。いや、善意に解釈すればね、評議会の概念をうんと拡張すれば、レーテというドイツ語は、もともと「語る」という意味なんだよね。「評議する」ということなんだから。日本語にしたって、いろいろ話して、論議して、決めていくってことでしょ。「評議会」の「評議」の意味は。

・しかし、「何を言ったらいいですかね」と聞かれたら、本当に何を言ったらいいかわからないよね。僕だったら、園良太くんが言っているようなことぐらいだと思う、自分が言えることとしたら。

・逆に言えば、その会場にいないで、そこで行われていることに関わっているってことでしょ、園くんのスタンスというのは。

・うん。ただ、「会場」っていう感覚はもともとなかったと思う。あれだけ長くなったら、集中している人ももちろんいるんだけど、してない人の方が圧倒的に多い。

・『拒否』の前線をさぐる」というのは、結構そういうことだと思うんですよ。耕大くんの感性なんですよ、やっぱり。その場をどうひっくり返すかということが、まさにミクロの場で常に考えられていること。今こうやって何人かで話している場でもそうだし。

・そう考えると、例の大飯の行動も、どうだったのだろう。微妙だったのかなという気がしますね。僕らは、練りに練ってやったというように受け止めているところもあるんだけど、京都の新開さん自身も言っていたんだけど、あそこでそのゲートのところに車を止めて繋いじゃったという、それがあるから、封鎖できたというのはあるんだけど、それって本当は微妙というか……

・そりゃそうよ。練りに練ったのは、現地アクションの事務所ができて、大飯でビラまきしたし、「もう一つの説明会」をやったとか、そこまでですよ。最後のアクションというのは、若者たちがやらなきゃできなかったこと。逆に言えば、新開さんたちに、若者たちの情熱に応じられた感覚の良さがあったからこそ、そこまでできたということでしょう。

・そうですね。たいがい今までのパターンでいくと、「なにやってんだ、そんなことしたら、弾圧を招くだけじゃないか」って言ってやめさせることが多かったろうし。新開さんたちの度量というか、あるいは若い人との関係の作り方というか、それによって実現したんだとは思う。

・そこまでね、新開さんたちが読んでいてやったということではないと思う。でも、その直前までいったから、若い人たちも次へ行けたわけであって。

ああいうのをパッとやれちゃうというかな、「テントがあるんだったらどこへでも行くよ」みたいな風に行動している人間たちと、耕大くんたちが出会えたらいいなあというのはあるよね。ああいうことがやりたいんじゃないかと僕なんかは思うんだけど。

・あの人たちの中に、僕が仲良くなった人で熊さんという人がいるんだけど、その人なんかは僕よりちょっと上の年代でヒッピー世代みたいな感覚の人なんですね。ギターをもってのこのこと出てきて、髪の毛を伸ばして髭はやして「熊です」みたいな。そういう感覚の人も何人かあそこにいたんですよ。もちろんテント村を作った、亡くなった吉岡という人も、しっかりと動きを把握していたと思うし。

・「混成旅団」なんだよね。

・そうです。先輩、大先輩みたいな人がいたり、ちょっと僕より若い世代がいたり。もっと若いのが20代でいたり。

・例の「北へ向かった人」の北島教行という人も、そういう人なんだと思うの。だから、あれはあそこへ行っちゃったけれど、あそこへ行かなきゃあんな風に動いていたと思うんだ、北島という人は、おそらくね。

・でも、耕大くんももしかしたらテントを回っている風に、回っているのかもしれないよ。東京の中のイベントや集会や運動体という「テント」を回っているのかもしれない。

・経産省前のテントには、耕大くんは興味はあるのかな？

・そんなにやっている感じはないね。もちろんそこにいる人たちと、やりとりはしていると思うんだけど。

・オキュパイ運動の話が先程出たんですけど、スペインの「6月15日運動」ってあったでしょ。そのときに広場を占拠したときのスローガンが、家ない、年金もない、職もない・・・と連ねて最後が「ノン ティエネ ミエド」なんです。つまり、「怖いものなんかない」というデモをやっていて、そりゃあいいなと思いました。結局今、そういうところに行くかどうかという話だと思うんですよ。日本の運動全体がそういうところに突き抜けるのかどうかというね。

・若い人たちが、そういうものとして登場できる空間を作るぐらいは、僕らがやるべきことだろうと思うんですよ。大飯のテント村にいたような人たちが、最終的にはゲート前封鎖をしたわけでしょう。新開さんたちが別の場所で「集会」をやっていた間に、この人たちは座り込みをやっていたわけ

じゃない。で、次の日に合流したわけだよね。

すくなくともそういうものが登場できる場を作るというのかな。そういうところまで作るのが、僕らの仕事だよね。実際封鎖そのものをやれるかという、僕なんかはようやれんとは思っただけだけど。そういう意味では、別に役割分担したいというわけじゃなくて、そこまではやらなきゃいけないことなんだろうなという気はするね。

そういうことで言うと、「再稼働阻止全国ネットワーク」の人たちは、古いんだよね。だから、そこまでが自分たちの役割なんだというようにむしろ限定した方がよっぽどすっきりすると、僕なんか思うんだけどな。

こういう冊子を作って、耕大くんのフェイスブックを載つけたことが、「場を用意する」ということにあたるわけでしょ。それをもっと、アクションレベルを高めていけば、今言ったことに近いことになるわけでしょ。今回も、実はそういうつもりなんですけれどね。

- じゃあ、やっぱり、「ひきこもり諸君！」というのを書かなきゃいけないね。
- 「ひきこもり諸君！」のことは、第4号で、「拒否」の前線の諸相のところで行ってみたいと思います。
- どんどん面白くなってくるね。

すべてが 可能だった

駒井英吾さんから、「カイロからの手紙」(日本語意識)が送られてきた。駒井さんの了解を得て、掲載する。

オマー・ロベルト・ハミルトン

2013年8月17日

<http://www.madamasr.com/content/everything-was-possible>

一人きりで座ったまま 11時間が過ぎた
どうすりゃいいんだ
エジプト行きの旅客機に乗った2011年1月29日 その日以来
はじめて途方にくれる

これから 今日よりもっと酷い日が やってくる

世界を変えてみせる と俺たちは思った
俺たちだけじゃない
どんな革命でも 宿命を感じさせてくれるだろ
今日は とてもそんな気がしない
信念を曲げたりはしない が 若者の気楽さ？ ナイーヴさ？ 理想主義？ 能天気？
そんなのは すべて 消え去った

殺された奴らを悼む 殺した奴らを憎む
殺された奴らを悼む 死に追いやった奴らを憎む
殺された奴らを悼む 許した奴らを憎む

どうしてこんなことに？
いったいどうやって辿り着いたんだ？
ここ何処？

2011年2月12日 ホスニ・ムバラク打倒
13日の朝 アメリカ合衆国行きの旅客機に乗る 今の仕事を片付けに
それからカイロに移住 新しい国創りを始めるんだ
バルコニーで お袋と話をする
煙草を吸い お茶をすする 少し寒いから
これまでのこと これまでの行動 これからの行動 これからの計画

あの夜 すべてが 可能だった

世界革命

大臣任命の実用的な再編

これからの映画学校が教えるべきこと

朝まで続く会話 メモまで取った

もしかすると この思い出が 一番つらい

アメリカ合衆国から戻るまでに 軍隊はタハリール広場での2つの座り込みを一掃
大勢の市民を軍法会議にかけ 「処女検査」と呼ばれる女性への暴行を開始
革命は少し小さくなっていたが より真剣で集中力に溢れ 常に 攻撃に 曝されていた

決して倒れてはいなかった国家 より深く存在する本当の国家 「顧客」国家

毎月 一度 必ず 攻撃を仕掛けてくる 国家

3月 4月 8月 12月 タハリール広場を一掃

イスラエル大使館抗議を攻撃

11月 カイロの下町を覆った催涙弾 ペンシルヴァニアを思い出させる

内閣府の屋根から 石やモロトフ弾が降っている

ポートサイド・スタジアム 非常口が溶接され もはや逃げ道はない

毎月 人々は 闘い 死んでいく

エジプト全土に渡る軍事支配 それを破る機会は確かにあった

ムバラク追放の後 タハリール広場に留まること

タハリールは主導権を握っていたし 政治家の道具に成り下がってはいなかった

しかし 皆帰ってしまった 翌日に戻ると言いながら 結局戻らなかった

皆 風呂に入りたかった 自分の布団で寝たかった

市内あらゆる場所で掃除が始まり 正午までに 全てが片付き跡形もなく消えていた

2011年11月 2012年1月 軍事政権の終わりを求める声が あらゆる道でこだましていた
だが今は 路上の行動を政治的な利益に変えることは 政治家たちが自らに課した役割に過ぎない

軍隊にとって 交渉できる相手が生まれてしまった

仮に 革命家 リベラル派 ムスリム同胞団 サラフィー主義者といった 軍隊に反対する全ての勢力が

本当に連帯していたら 今日どうなっていただろうか

死? もしかすると だが 必ずしも

少なくとも今日 市民国家に より近づいていただろうか

イデオロギー上の連帯は 不可能だった

しかし 戦術としての 一時的な連帯なら機能したかもしれない
ところが 話し合う代りに 皆それぞれが軍隊と取引を行った
当然 総督たちは より有利な立場に 上り詰めた

皆それぞれが 責められるべきだろう

古くからのリベラル派 裕福で快適な暮らしをしていたリベラル派は 革命に同意してはいたが
軍隊との繋がり長く 繰り返しムスリム同胞団を中傷
革命家たちの政治不信は 政治からの本質的な疎外を意味した
サラフィー主義者は 自分たちに最も有利な取引 文科省や厚生労働省に関わる取引にしか
興味を示さなかった
ムスリム同胞団は 動員能力を誇り 最初から傲慢で 信用されず
リベラル派と選挙での取引を進め アメリカ合衆国へのロビー活動を怠らず 軍隊には免責と
軍自らの監査を約束

大統領就任後ムハンマド・モルシは 内務省を敵に回すことを拒否
それどころか アフマド・ガマル・エディンを内務大臣に任命
2011年1月革命阻止を試みた アシウト安全保障理事会 理事長
モハメド・マフムード ウルトラスの大虐殺 エジプト軍最高評議会 警備責任者
そのアフマド・ガマル・エディンを 内務大臣に任命

本当の敵は 常に 警察と軍隊による 保安国家
この保安国家の解体なくして 何も成し遂げることはできない
この保安国家解体への機会は 確かにあった 市民国家建設への可能性
しかし そのためには モルシとムスリム同胞団は 組織的で安定した軍隊ではなく 主張が
まとまらず 言い争いの絶えない左派とリベラル派の勢力との困難な交渉を選ぶことが 不可
欠だった

* * * *

今日は サラエヴォ
昨日は スレブレニツァ虐殺記念館
エジプトの仲間たちが 迫りくる四方からの銃撃から逃れるために
カイロの「10月6日」橋から飛び降りていた まさにその時
ラトコ・ムラディッチ総督は カメラを見つめながら 歴史に語りかける

「1995年7月11日 今日 スレブレニツァにて セルビアの記念すべき祝日を目前に トルコ
民族に対する蜂起を記念して この街をセルビアの国に捧げる ムスリム民族への報復の時が
来たのだ」

サラエヴォの道を彷徨う 建物には全て 戦争の傷跡

映画祭の前夜祭 一人で酒をあおる 記念館のビデオに現れた女性を思いながら

「もし 泣き叫んでいたら もし その子を連れていかなくて と叫んでいたら もし すがり
ついて 引き止めていたら なんでもいいから 止めようとしていたら もしかしたら 自分を許
すことができたかもしれない」

* * * *

2013年6月27日 エストリル・カフェ テレビの下 隅の席
6人の仲間 6月30日のデモ行進は 必ず襲撃される 3人はそう確信
国民民主党が国を混乱させるには絶好の機会
そして 軍部がもう一度主導権を握る
暗殺者リストの噂
流れ弾から眼をかばうために 数百ポンドも出してゴーグルを買う
本当は デモに行きたくない
モルシには辞めてほしい でも周りから聞こえてくる声はおぞましい ネットで出回っているデモ
・ビラ 反軍隊や反警察のかけ声は禁じると明記
でも 行くしかないだろ 友人が皆 行くからには
仲間が殺されるのを テレビで見てるって言うのか？

予想は 大きく 外れた
軍隊や体制は 俺たちの血を欲しがってはいなかった 少なくとも今回は
もうたいしたことないと思われたのか それとも かつてない反撃にでると思ったからか

7月3日 軍隊はクーデターを実行 2011年2月11日と同じシナリオ
2月は 市民の怒りを和らげ 足止めするために ムバラクを追放 思惑通り
今回は何が起きたのか 市民の怒りが 軍隊を動かしたのか
それとも タマロッドを利用して 怒りを扇動したのか

* * * *

武器を持たないものが勝つことはあるのだろうか？

かつて イラン人の友人が こう語った
「我々が求めているものは 革命ではなく 改革だ
革命は 最も暴力的な者によってのみ 勝利される」

今朝起きて 最初に読んだのは アダム・シャツツの言葉
「エジプトの革命家たちは 革命への信仰を 革命の存在と 誤解したのだ」

だが 信じなかったら 何が残る？ 信じるのが 行動の基盤 そして 自分らしさ
革命は 根本的な変化をもたらした
革命を信じて 互いに共有した 一瞬にせよ
永久に続く失望 貪欲さ 悪意の中で その一瞬だけは 人間に価値があった
コミュニティと共に生きること それは 孤立して本と向き合っているよりも素晴らしかった
その一瞬だけは 決して消えてしまわない価値が 革命にはあった

この2年半が 人々にとってどんなに大切であったか それを過小評価することはできない
人々は 力付けられ 決して 恐れてはいなかった
革命の存在は 政治的な主導力やプロセスの存在と 決して 混同されてはならない

革命は もう死んだ と俺たちが言って はじめて死ぬんだ
革命は もう死にたくない と俺たちが言って はじめて死ぬ

カイロ・バブアロクのアパート 市場に向かうたびに見える戸口
2011年11月22日 最初のモハメド・マフムード通りの戦いで身を隠した戸口
催涙弾の雲の臭い 鍵のかかったガラス扉 ガラスの反射 警察の銃撃 近づいてくるのが
見える
装填の音 大きくなる 大きくなる
はっきりとした意識の中で 自分の声が聴こえる

ふりむけ 背中を撃たれりゃいい 助かるかもしれないだろ
まっすぐ立て 立てたら 死んだからって 忘れられたりはしないから
順番が来たぞ 命まで捧げた奴だっていた 両目を無くした奴だって
アラアは刑務所行きだ 皆 勇敢だった
勇敢に まっすぐに 立て 忘れられたりはしないから

死ぬことを 恐れずに 立ち向かう？
今日 それは 出来ない 今日 筆を持った 臆病者
革命が 引きずられて 浅瀬の墓場の真上で撃ち殺される のが 見える
何をなすべきか 分からない
でも 手遅れになる前に 取り戻す
また 戦うか
さもなくば いつか 後悔にまみれて 死ぬぞ

(英日意訳:駒井英吾)



This work is licensed under a [Creative Commons Attribution-ShareAlike 3.0 Unported License](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/).

- 性懲りもなく、井戸を掘る。「我田引用」の井戸を掘る。「大海」についての幻想は言うまでもなく、その幻想を捨てここを掘り続ければ、その〈むこう〉にという幻想も棄て、井戸を掘る。
- 地を這う〈声〉が沖縄から届く。その〈声〉に自らの声を返すために、私・たちは、どれだけ遠くまで、いかなければならないのだろうか。私・たちにあるのは、その〈声〉の対極に、立ち続けようという意味だけだ。
- この夏、二つの「時をかけた戦死」のような訃報を、聞いた。——お目にかかったことは、一度しかなかったが、「さようなら川音勉さん」

生・労働・運動ネット富山

代表 埴野謙二

2013年10月

〒 930-0009 富山市神通町3-5-3

TEL : 076-441-7843 FAX : 076-444-6093

URL : <http://net-jammers.net> E-mail:jammers@net-jammers.net